

ジャン・パウルの『政治的四句節説法』他翻訳

恒吉, 法海

九州大学大学院言語文化研究院 : 教授 : ドイツ文学 Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University : Professor : German Literature

<https://hdl.handle.net/2324/16863>

出版情報 : ジャン・パウル 研究書・翻訳書, pp.1-119, 2010-04-04
バージョン :
権利関係 :

^{マルス}
火星と日輪の王座の交替(1814年)

*

政治的四旬節説法(1817年)

ジャン・パウル著 恒吉法海 訳・解題

恒吉法海・九州大学リポジトリ翻訳研究 3

2010年4月12日

目次

マルス

火星と日輪の王座の交替

序言	4
大晦日の夜、一八一三年を支配している惑星の火星がその後任の日輪あるいは太陽神に一八一四年の支配権を委任する件の簡略報告	8

政治的四旬節説法

序言	24
I. ドイツの為のその後の薄明 あるドイツの皇太子とその妃への献辞と共に	27
第一のその後の薄明	28
第二のその後の薄明	35
第三のその後の薄明	42
II. 帝国城塞ツィービンゲン包囲の間のネーポムク教会への私の滞在	51
III. 薄明かりの蝶あるいはスフィンクス	69
IV. 出征を含むグロースラウザウとカウツェンでの二重観兵式	75
V. 晩夏の蝶	95
訳注	102
解題	109
あとがき	119

火星と日輪の一八一四年の王座の交替
冗談のパンフレット

序言

私がかくも行為と出来事に満ちた稀な時代に、他の作家達とは違って、海燕とか猛々しい鷹の代わりに、この単に戯れのパンフレットのような軽やかな蝶や裁縫鳥を送りつけているからといって、読者が非難したくなるのであれば、読者にはただ検閲官を攻撃して欲しいが、しかしこの小著を許可した検閲官ではなく、これを禁じた検閲官を攻撃して欲しい。即ち後の検閲官がこの蝶に有名な週刊新聞への飛来を禁じたのであって、それはこれがフランス人に対する骸骨蛾として不吉に見えたからというものであった。別の言葉で言えば、検閲官と私とが（我らの政府の命令で）狙い撃つべき相手に対して書くことを検閲官は私に禁じたのである。私は王によって任命された国民兵として銃剣を携えて国境で彼に出会ったら、彼にペン先の方がもっと強く斬りつけるものか親しく尋ねてみて、彼自身の突撃や切り込みについて尋問し、批評したいところである。しかしここでは彼のことは切り上げ、ここに見られるように、すべてを許し、私同様に勇敢であるように見えるもっとまじな検閲官のことを述べよう。しかしまさにこの検閲長官、反検閲官のお蔭で私が冒頭述べ始めたように、この小品は惨めに全く孤立して卑小な形で出現することになった。これは大四つ折り判であれば、それも厚くなる予定であったのだが、多大の利点を得られていたであろうものである。

即ち何人かの人々は古代ドイツ人の徹底性の新たな印として満足して気付いたことであろうが、現今では八つ折り判の本が栄え、頂点に達することはないのである（まだ十六折り判はカレンダーとしてより容易に切り抜けている）。ドイツが欲するのは大四つ折り判である。このような切石の巻はそれ故毎年どこでも書籍商から提供されており、朝刊紙とか上流新聞とか憩紙とか等々の名前でこれらは製本される前に皆が手にしている。というのは若干の軽やかさと重さを結び付けるためにドイツ人には厚い作品が個別の軽やかな新聞の形で週ごとに手渡されており、それで実際ライプツィヒの書籍市では、ちょうどライプツィヒの手前の外面的屋台同様に二つの対照的な大きさが最も求められ、支払われているのである、つまり巨人と小人である。

さて小さな文書は、巨大な象の作品の中に、これはひょっとしたら百人もの会員が共同して同時に形成していくものかもしれないが、差し込まれ、挿入されて — 例えばヘルダーがその⁽¹⁾絵を書斎に有していたかのインドの象が部分部分は個々の動物の組み合わせであったような具合で、 — このような小さなものは小部分の動物としてまあ受け入れられるものとなる。しかしこれが自己主張する独自のゾウカブト虫として象から分離するとなると — 誰もこのカブト虫に[デンマークの]⁽²⁾象勲章を授けようとはしないだろう。

しかしこのことだけが、何故筆者はかくも重たい時代に小さな蝶あるいは裁縫鳥を（両者とも単に葉の上に巣作りする）飛来させるのを幾らかためらうのかの唯一の理由ではない。

第二の理由は、この小品では単にフランス人をからかっていて、フランス人と戦ってはいないからである。確かに、冗談が真面目になるや、その後真面目から冗談を作り出すこと、たとえ辛辣な冗談であれ作り出すこと、それに雷を落とす怒りのビラ製作者の中に単にからかうだけの者を混ぜることは良いことで、いや必要なことであり、内的解放の印であらう。しかし教師達の真面目な精神がそれに和し、強められることはまずない。

現筆者でさえ、過去のぎざぎざした氷の湖の眺めを振り返ることよりも、より高度なピ

タゴラス的の同盟、一つのヨーロッパ同盟とその絶えざる前進の気持ちのいい眺めに、凍えた国々へのゆっくりした春の到来のように、身を任せることを好む。

筆者はこの時代をすでに現在として味わい、楽しんでい。というのは歴史上類似のコスモポリタンの戦争がどこにあるかということになるからである。この戦争ではほとんど一大陸の侯爵達や民族が自由の再生のために、そして征服のためではなく、征服された者達のために団結し、熱中しており、そしてここでは理念の倫理的力が武器の様々な力を調停しながら一つの目標に向けさせているのである。かつて屈服した民族や侯爵達がもっと荒々しい突撃のもと蜂起したことがあるか。ドイツの王座は過去の墓石としてあって、その下に磔にされた自由が埋葬されていて、この自由が復活して墓の番人を打ち倒して、その使徒を放ったのではないか。かつて猛き軍がその暴力のあらゆる手段にもかかわらず、かくも穏やかな市民達に祝福されたことがあるか。まことに時代に対する喜びの涙は陽光の中の露の雫であって、これは絶えず、見る人が動くにつれ、別の色の宝石に変わるものである。

勿論現今の太陽が沈んだら — あってはならないが、 — 陰鬱な夜となろう。しかし太陽は花の芽を育てており、翌朝にはこれを更に開花させよう。現今のような民族の再生は、間近な未来の幸福には失敗しても、遠い未来にとっては例として絶えざる治癒となろう。殉教者の死⁽³⁾は宗教の復活に変わる。リュッツェン⁽⁴⁾の周りのマラトンの平野では何度か樅の種が蒔かれた。しかし種は、十六年後であれ、十六週後であれ、いつも育ってきた。種の中にはなお、数世紀後によく樅の梢となるような種が埋め込まれているかもしれない。

筆者はすでに以前、奴隷への敵の強募のときに書いた作品（『平和の説法』、『薄明』等）の中で恐怖の代わりに希望を説いて育てたことを自認していいだろう。というのは希望のみが正しい勇気を与えるのであって、絶望はせいぜい人間よりは動物にふさわしい勇気を与えるだけであるからである。かくて摂理の永遠の星々が長い夜の極光を通じて人間にはほの白く輝くのであって、この極光が消えるや、先の星々が静かに輝き続けるのである。

ちなみに戦争と現在に関しては平和と未来に関するよりも目下助言を与えにくい。かくも多くの戦火の後では明かりのことを考えるべきで、同時に夜警人の世話をしなければならぬ。火とそれに明かりを保つことである。民族のためには十分に立派に[*1]書かれてきた。しかし侯爵や偉い人のためには少なく、これは勿論難しくかつやり甲斐のあることである。

すべて日々刻々書かれる文書の中で目下政治家のためのもの、侯爵、大人新報あるいは鑑が喫緊のものである。確かに幸運の太陽の日射病に対しては、最新の疲労や凍傷は有効であろう。侯爵と人民を共に、穴ぼこの氷原に行く者達を互いに結び付けるがごとく、危険から救い上げている大きな絆はそう簡単に切断されそうにない。先の先の時代の真の精神的変事は長いこと自由を守るものとして作用するであろうからである。しかし目下大事なものは、千もの墓に十分に深く長く溝を引いた戦争の鋤機械に続いて、世紀のこの液汁の時代に種子を投げ込む種蒔機械、馬鋤機械が来ることであろう。今はすぐにそして長いこと耕されなければならない。緊張の後には弛緩が、犠牲の意識の後には豊かな賠償の希望が、休みの後には努力の疲れよりももっとひどい疲れが続くことになる。 —

歴史や商業、経済、法律、統治について執筆する広義の意味での政治的作家は国々の幸

福にとって十分認知されていない重要性を有している。彼らの筆は国家の羅針となり舵となり同時にまた、岩礁よりも緩慢にはあるが船に穴をあける船食い虫の針ともなる。全権者[ナポレオン]の頭の中での行為についての唯一の過った考えが一つの世界を毀損する。

侯爵新報、大人新報 — この不足と不可欠性については先に言及したが — これは勿論単に少数の者によって、少数の者のために、少数の者と共に書かれ得るもので、それはいずれにせよ生来の政治家である気宇の大きな歴史家達、それに経済家、つまりエルランゲンで活躍⁽⁶⁾している方よりも偉大な財政学者達、更には老いた政治家達で、これらはいずれにせよ体系よりは経験を、長い説教よりも短いテキストを好んで書き留めるものである。このような新報には偉大な故人の政治家の箴言も採用されよう、そしてモーザー⁽⁷⁾やメーザーは幾多の格言で侯爵達の役に立つであろう。

要するに、このような侯爵新報の出現は早いほど良いと望まれるであろう。いや最良のことであれ、それを単に望むことはそれ自体罪⁽⁸⁾でもなく愚かなことでもないのであるから — それ故現今の大陸での平和の四分割太守の個々の君主にその最も偉大な先祖の幸福を願うことも罪でも愚かなことでもないのであって、 — 最も有りそうもないことを願ったり呼んだりすることも許されよう、つまり国父として教皇と張り合えるような侯爵達にとって四つの全教会の公会議ではなくてもそれだけの数の会議が開けたらという願いである。あるいは少なくともドイツにとって帝国よりも早く帝国議会が願わしい。一つの学者用議席のための木材しかましな木材を手にも有しないとしても、この議席にとってはすでに十分であろう。アリストテレス[*2]は書いた、最大の立法家を出したのは中産階級である、と。学者は変転常ない現在の中ではよるべなく硬直しているけれども、それだけに大きな遠くの圏に注意を寄せており、この点で内部に没頭している政治家に勝っている。政治家はわずかな、動揺しやすい目しか有しない。学者は、千もの目を有する昆虫のように、目の不動性を目の数で補っている。過去全体が学者に過去の目をガラスとして貸与しているからである。

いや図書館の単なる書架がこのような学者用議席ではないかと尋ねる人がいよう。勿論(と私は答えなければならない)。しかしその場合まさに希望の侯爵新報、大人新報が一層望まれる。

— 更に一人の男の寄稿が望まれるところである、彼は国々と精神の自由について偉大なこと純粋なことを考え、書いてきたのであった。汝、穏やかなヨハネス・フォン・ミュラー⁽⁹⁾よ、四つの国々[*3]の上の聖なる太陽の温かい輝きを汝には体験し、目にして欲しかった。この四つの国々に汝は雲と影の下、種を蒔き、涙を流したのであった。

しかし更に汝、ドイツの解放のための大胆な闘士、力強くて、かつ自らの半世紀の生命の分だけ余りに早く逝ったフィヒテよ、汝の逝去を今日私は序言を終えるときに知ったのだが、汝は少なくとも偉大な解放の曙光を体験した。戦いの一つ以上の戦場で勇ましい国民軍兵士⁽¹⁰⁾の汝は、今や永遠の平和に恵まれ、遂に天上で真のフィヒテ哲学の鍵を手をしている。

バイロイト、一八一四年二月十日。

ジャン・パウル・Fr. リヒター

*1 しかし何人かのビラ執筆者は、人民に対してちょっと昔のドイツ語あるいはルタードイツ語を真似ればもっと力強く話しかけられるであろうと期待する過ちに陥っている。教養ある彼らにとってルタードイツ語は新ドイツ語と違って美しい古代風な魅力が感じられるからである。しかし無教養の民衆はまさにかの古代ドイツ語そのものの中で暮らし、読んでいる。従って古代ドイツ語にコントラストの魅力を感じず、むしろ新ドイツ語に感ずる。多分まさに、我々にとっては卑小なものとして時代の崇高な状況に逆らうある文体が民衆を炎で包み、焚きつけることであろう、つまり比喻の輝きに満ちた、叱咤の声の多い、激しい感情の酒で一杯の華美な（しかし理解しやすい）文体である。誰もが青年のとき自分をシラーの方がゲーテが持ち上げてくれたよりももっと夢中にさせたのではないかと自問してみるといい。民衆は美しい意味でも悪い意味でも常に青年である。ただわかりやすさという条件は不可欠である。そして煙が炎に影をさしてはならない。 — 民衆にとって戦争の歌は別である。ここでは粗野な単純さ（グライム⁽⁵⁾の単純さのように）が適している。というのは歌うときには読書のときのように教えられたり、説得されたいとは思わないからである。単に納得したことを歌って表現したいのである。更に歌は短いほどよろしい。人は長い歌をたった一回歌ってすますよりも、短い歌を何度も歌って引き延ばすものである。我らの新たな戦争歌の詩人は長い詩を長い武器と見なしている。最後になるが、兵士にとってメロディーのない詩が何の役に立とう、シューバルトの音楽のないシューバルトの歌のようなものだ。

*2 アリストテレス 『政治学』Ⅲ.Ⅱ.[Ⅳ.Ⅱ]

*3 チューリヒ、ウィーン、ベルリン、カッセル。

大晦日の夜、一八一三年を支配している惑星の火星がその後任の日輪あるいは太陽神に一八一四年の支配権を委任する件の簡略報告

昔の占星師は周知のように、太陽を含めて七つの主要な惑星があって、毎年その一つが次々に地球を支配していると仮定していた。彼らの実用的な裁可に従うと一八一三年はまさに火星が支配しており、一八一四年は日輪あるいは太陽神が、一八一五年は金星[*1]が支配する。 — しかし何と運命は我らの愚行を、予言の愚行さえも真似ることか。 —

同じ火星[軍神]が一八一三年には新聞記者にとって神話学的に日々十分に血を流して支配し、同時に天文学者にとってすべての夜真っ赤に大きく照らしていた。同じ太陽神が一八一四年には我らの許に薬剤、オリーブの枝、歌声と共にやって来る。一八一五年を支配する惑星の金星さえもが穏やかな宵の明星、力強い明けの明星として意味深く解放の太陽の年に接合している。

上記のことから、我々皆が町で、つまり一八一三年と一八一四年の大晦日の舞踏会で実際に体験し、見聞した現象の説明ができよう。

機知を除いて、ほとんどすべてのものが輝いた我々の大晦日の舞踏会の広間でフルート時計がおよそ十一時を告げて、フルートの音を鳴らした時であったろうか、玄関から背の高い、兜を被り甲冑を付けた仮装の者が入って来た。これは我々踊り手や神話学者達が皆、胸のメドゥーサの頭や手の槍、わき腹の雄鶏を見て、すぐに真の戦の神、軍神と気付いたのであった。モンフォコンからモーリツツ⁽¹⁾に至る最良の神話学者達が描くような軍神であった。彼は一つの星形勲章としてボタン穴の横に血のように赤く、赤銅色の惑星火星を縫い付けていた。広間全体が、少なくともその神話学者達は誰もがそんなわけで誰を目の前にしているか、つまり自分の（まだ四十五分程の間）支配する主君を目の前にしていることを知っていた。私は先導の踊り手、神話学者として、まずシェーナ・アングレーズのとき固まってしまった。踊りの列は我々の支配の君主を見て凍えた並木道に見えた。そして我々は皆通常のように誓忠式を行った、つまり、愚かに、硬く、黙って行った。地上の民は誰も話し始めず、オーケストラは演奏を止め、ただティンパニー奏者だけがその張り革で若干の打撃を挨拶、祝詞として考えていた。白い服の少女達は自然のものが十分にあったら、その花をまくのに十分な数のものがいたであろう。しかし大方は人工のものであった、（つまり花のことである）。

我々の惑星の主君がかくも突然に、全くさりげなく舞踏会場に現れたこと、ラッパを吹く御者も連れず — 従僕とその長も連れず — パレードする市民兵も連れず — 号砲も鐘の音もなく現れたことで我々踊り手は若干の弁解ができよう。

この君主の使用人、従僕全体は（雄鶏は人間に数えられない）一人の宮廷道化師に限られていて、これが自分の上司の後から小さなポータブルの王座を運んでいた。

踊り手や臣下の誰もがその驚きから覚めやらぬうちに、向かい合った両開き戸から、もう一人の高貴な者、仮装の者が入ってきた。これに関してはどんなに愚かな神話学者であれ、その七弦琴、背中の銀の弓、頭上の月桂冠、頬髭やその他の髭の欠如から即座に日輪あるいは太陽神と悟ったに違いなかった。それに黄金の胸の星も、一八一四年を支配する太陽であることを明らかにしていた。十二時を過ぎたら我々を所有することになるこの地球の皇太子も大地や舞踏会の床に何の爆音仕掛けも花火も発光仕掛けもなしに現れた。こ

の世の太陽ときたらいつもは雷や稲光や曙光と共に現れるのであるが、それにこの男の宮廷全体も同様に一人の宮廷道化師から成り立っていて、この道化師がまたポータブルの、もっと低い王座をその太陽神のために運んでいた。

王座の天蓋からは何も掲げられていなかった、多分天上で天を支配する惑星は自分以上のものを有することができないからであろう。

我々はかくも間近に瀕死の現在と若い未来とを、支配する君主とその後継者とを同時に、両者ともただ三十分の違いで離れていること、いや後では単に一瞬間によって離れていることを目の当たりにしたとき、我々皆が、給仕人に至るまで高揚した。ただ筆者は自分の内的な興奮、高ぶりを、我々はいつでも現在と未来の間に立っていて、入れ替わるという考察、そしてすべてこの世では互いに結局最後の架け橋としての一瞬間を通じて離れる、例えば早速この文が次の文と離れるという考察をすることによって静めた。

我々は皆数年前から大砲鑄造によって十分に居酒屋政談に馴れ、そのために象られているので、それで多分我らの中の舞踏申込者のうち誰一人として、最も太った商人から最も瘦せた学校教師に至るまで、政治家として容易にこう察知しない者はいないであろう、つまり高貴な権力の天体が我らの舞踏会場にその神話学的王座の権標と共に現れたのは単に、互いに王座継承の儀式をきちんと行い、地上の王笏を譲りかつ引き受けるためであると察知しない者はいないであろう。

しかしこのような祝祭では講演がなされ、約束が行われ — 紋章と命令が張り付けられ、計算と権標が片付けられ — 百ものことがなされなければならないが、これらのうちただの一つも広間では行われなかった。代わりに両頭目、火星と日輪は黙って気位高く向かい合って座っていたが、遂に両者の宮廷道化師が愛らしく、しかし品位をもって —

それで両人が一歩進んで — 互いに近寄り、政治的に抱擁し、しばらく沈黙していた後、また同じように退いて、互いに離れた。

両宮廷道化師、全権委任者はちなみにその主君の性格に合わせて衣装を着、変装していた。彼らの服はさながら一枚の信任状であり、すべての多彩な染みは公認状であった。即ち火星あるいは軍人の道化師は兜の代わりに先のとがった縁なし帽を被り — 槍の代わりに道化師の打ちべらを有し — その服はすべてのヨーロッパの制服からただ指の長さだけの服をモザイク状に縫い合わせたもので、それで十分に多彩なものになっていて、いつもは悪魔を描くときに使う雄鶏マルスの尾羽が軍神の雄鶏を表していた。

太陽神の道化師もそれに劣らぬ服を着て着飾っていた。というのはその鈴は戯れに日輪の七弦琴を思い出させ — そのサテュロスの角、火薬筒は日輪の弓を — 数珠状の煮た月桂樹の実の市民冠(2)は月桂冠を — 眉の両虹へと続くその頬髭アポロンは日輪の滑らかな顎を思い出させたからである。 —

後から持参されるべき軍神とアポロンの星形勲章、あるいは惑星に関しては、どちらの道化師も賢者の一個の星を帯びていた。しかし大きなもので、紙幣ではなく、真の金紙でできたものであった。そして太陽神の道化師はその金紙で胸とへそを覆っていて、その輝く光輝を背中の締め金で締めていた。

すべては仮装であると分かった。しかし仮装していない舞踏会には余りにグロテスクであった。というのも軍神の道化師は惨めにその仮面の盛り上がった片面を顔の方へ裏返して、我々にはくぼんだ面だけが見えて、役に立ったのは儀礼的接吻をする際太陽神の

道化師の仮面に対してのみであったからである。

寓意がすべての背後に隠されているのか私は考えてみた。しかし何も見つかりそうになかった。

遂に両権力がしばらく座っていた後、支配の権力、軍神が声を発して、我々大晦日の踊り手全員を地上代表議会の代議員と見なしてこう語りかけた。「地球の代議員の諸君。私に対する貴方らのこれまでの忠誠と帰服をよしとするものである。私は今年ヨーロッパを救った。ヨーロッパの敵はもはや存在しない。モスクワでは私は軍神ウルトル（復讐者）であった。ドレスデン⁽³⁾ではビストル（二重の復讐者[*2]）であった。私は私の王座を気高い兄弟の日輪に譲る。日輪は私と私の帝国が貢献したものを決して忘れないであろう。私の顧問官、宮廷道化師が、地上の代議員の諸君、諸君に本年の決算を報告するであろう」。

この後、道化の元老院、あるいは軍神の道化師は赤いカプセルから勲章の綬の幅の記載された巻紙を取り出し、それを二十七人用の包帯の長さにまで広げた。これは外科医や軍医が日々より習熟して使い慣れているものである。彼は始めた。「陛下、ヨーロッパは感動しています。貴方がいなければ乙女エウロペは未亡人に、さながらニコロ・ブオナパルテ[*3]の喜劇のようになっていたことでしょう。陛下、私が特別にドイツの代議員の諸氏に陛下の栄光の支配の年の政治的会計を報告することをお許してください」。ここで顧問官、つまり道化師は舞踏のシューズを履いた単純な広間の踊り手、バツタに対して、地上とドイツの気高い使節に対するが如く向き直って、愛想よく次のような忘れがたい表現で語りかけた。

私の尊敬する代議員の諸兄

貴方らは私同様、ドイツが以前からヨーロッパの戦闘的なレーゲンスブルクであったということをご存じです。ドイツにヨーロッパは[レーゲンスブルクの帝国議会の]大会議室に送るようにその部族を送ってきました、何らかの争いに関して票が、つまり戦火が必要になったときのことです。ドイツ人はあたかもその檜の木に似ている按配で、この木には（他のすべての木と比較して）レーゼル⁽⁶⁾によると大方の昆虫が巣を造り食らうために集まるのです、つまり二百種の昆虫が集まります。

しかし特に、ドイツが戦争に対する一人の保護者（プロテクトル）⁽⁷⁾を有するようになってから、ドイツはこの保護者の下でいつも国内で平和のために戦わざるを得なくなったという事情が加わりました。そこでドイツの半分が戦火で焼け上がってしまうと — 自分の半分の側が焼けたら、もう半分を焼くよう頼んだ聖ローレンティウスに似て — 同様に王笏の焼き串のもう一方の元気な半分が前面に回されるのでした。

皆様、鞭は結局国々の長さになって — 互いに編まれた革の鞭のせいでそうになって、 — 小さな私としては、取っ手をサン・クルーで動かせば、その革でニュルンベルクの書籍商やゴータの国民新聞記者⁽⁸⁾の鼻を撫でてみたい気になるほどだったのです。しばしばドイツ人の犠牲そのものがドイツ人の犠牲の司祭者達のために使用されたのは勿論結構なことでした、これは例えばスキタイ人が犠牲の肉を煮る際、犠牲の骨を燃やすために使用したようなものです[*4]。

私どもはそれに私どもの敵の真の友でなければならず、キリスト教徒として一方の頬がぶたれたら、もう一方の頬を差し出さなければならなかったのです。言論に詳しい者達は

私どもの友情を十分に正しくラテン語にネケシタースあるいはネケシトゥードー(強制)と訳しています、世界市民のローマ人が友情をそう呼んだようなものです。

しかし他方、私どもの敵は私どもをまだ友人として扱ったと告白したいと思います。友人の許では彼らは何も邪推せず、気ままに言葉、振る舞いを好んで友情の塩と解してくれたのでした。それ故私どもが必ずしも宣戦布告に対して愛の告白でもって答えないと彼らは気を悪くするのでした。というのも彼らは貴婦人に似て、彼らが貴婦人同様に残忍な者を演じて、なお相変わらず愛されるであろうと期待していたからです[*5]。男性として愛らしく打たれた将軍も、小国を愛らしく打つ者でありたかったのです。私どもは公には喜びの余り泣く以外泣くことは禁じられました、ユダヤ人も安息日に泣くことが禁じられているようなものです[*6]、(私どもは魔女の宴会[サバト]を開かなかったでしょうか)。私どもはドイツについてその零落⁽⁹⁾(アルティトゥードー⁽¹⁰⁾)よりはその高揚(同じアルティトゥードー)を十分自由に書くべきで、私どもの十字架への高揚の祝典を行うべきであります。

ドイツと都市の多能力の代議員の皆様。勿論金はこのような事情では大して国庫に残りません、半分の使徒日に村の教会の寄付金袋に入ってくる程度のものです。私どもの貯金箱は少しの燃料ですむ徳用暖炉となるべきでしょう。貴方ら自身は、それ故敵によってわずかな金しか残されず、それできっと皆様は今大晦日の舞踏会やカルタ遊び、その他の卑小な支出のための金しか有せず、本や学問や芸術のための、公的施設等のための偉大な支出用には有しないことでしょう。

勿論ドイツの幾多の国が全く余所の国として、つまり余所者として、例えばハンザ同盟の国としてフランスに移り、そこにそこを自らの戦場として残る限り、ユス・アルビナギイがあるいはドイツ語で外国人財産没収⁽¹¹⁾法が介入してきて、故人の遺産に手をのばすことはあり得たのです。しかし何人かのフランス人将軍が、古代ドイツの世襲職[遺産局]をドイツ語を知らずに、受動的な職としてではなく、活動的な遺産局、相続局と見なして管理していたのであれば — それ故今では何も有しない幾多のドイツ人がすでに多くを有していて、つまり負債を有せず、いわんや何か財産を有することはない状態にあり、 — かくて偉大な国民への加入の慣習をより小さなフリーメーソン支部への加入の慣習と比較し、正当化すれば、多分あれこれの比喩的弁解を入手することになりましょう、つまりこの慣習によれば加入者は同様に衣服や貴金属を身から外さなければならないのです、ただこの者はすべてをまた得ます(つまりロッジ[支部]の場合です)。

私がフランス人に対するある種の党派心を疑われることに臆しないならば、この党派心は彼らをいつもは時に自分の確信に反して守っている私の主君が私に張り付けているのですが、私は喜んでこう付け加えましょう、彼らはほとんどすべての同盟的、あるいはライン同盟的、国の代表、蜜蜂の身分に対する真の養蜂家(その防護帽は蜂の刺繍のある外套⁽¹²⁾)であって、これらを弱く硫黄でくすべて、それから巣房を切り取った、と。更にまたこう付け加えたいことでしょう、彼らはしばしば我々を裸にして、かくて戦闘のために弱めるよりはもっと強くし、 — 切り損なうよりは切って造った、と — 戦争が、ギリシア人がいつも裸で行った体育的オリンピア的訓練のより高次なものにすぎない限りでの話となりますが。彼らはこう結論づけたように見えます。宇宙に対する自らの聴診器、望遠鏡、触覚がしばしば単なる食道とかそのようなものから成り立っている自分らの将軍が

すでに勇敢であったのであれば、胃には立派な苦い胃液しか有しない人々、腹一杯のライオンではなく、素面のライオンである人々はいかほど勇敢であるに違いないかということです。というのは実際私どもは数年前から罪の代わりに、祝典、戦勝祝典、行軍式、年によって変動する八月の諸祭典⁽¹³⁾よりも頻繁に行うものはなかったからです。それも私どもが復讐の女神祭⁽¹⁴⁾と呼ぶべきであろうような祝典ばかりです。というのは周知のように古代人は復讐の女神に全く素面の状態でのみ犠牲を捧げることが許されたからです。私どもの公の行進では、カトリックの誓願式のように、十字架が先に運ばれ、その後を十字架に掛けられた者達はその位階に従って付いて行き、歌ったのです。

私の恵み深き主君、軍神殿は、更に述べることをお許しくさることでしょう、つまり私どもの敵は、何らかのヴィーナスを見つけたら、それはヴィーナス・ウラニアであれ、パンデモスであれ、カリピュガ[美しい尻]であってさえ、このような女性を、外国人であろうと、既婚であろうと、あるいは乙女であろうと、即刻崇拜したのです、ローマ人がすべての民の神々を自分達の神々と見なしたようなものです。女性に対する敬意から彼らは華奢なヴィーナスではなく、単にヴルカンの⁽¹⁵⁾夫を鉄の通行遮断鎖の中に置きました。というのは以前婚儀の際単なる侯爵の代理人と花嫁の間に置かれて二人を分けていた刀は、彼らによって銃剣同様巧みに結合のために利用されたからです、彼らはすべての世界の使節としてすべての世界との結婚を外交的に演ずる必要があったのです。一つの町と共に同時に女性の心が付属品、無恥な品として征服されました。そしてどのサド侯爵⁽¹⁶⁾も、とりわけラウラのような女性を自分の遠縁の女性として捜し求めました[*7]。残念ながらドイツ人はそのことによって蜘蛛が捕らえて毒を与える蚊となってしまいました。比較的大きいハチドリすらも鳥蜘蛛に見つかってしまいました。

ドイツの状態は、私の恵み深い主君、軍神殿の登場以前はこのようなものでした。

裸の王というものは、チェスの時のように、勝負なしではなく、王手詰めになっていたのです。ユリウス・カエサルがまず週単位の、いや日数単位の執政官を導入したように

- 一 それ故コモドゥス皇帝の下ではかつて年に二十五人の執政官が支配したのですが、
- 一 常緑の侯爵の代わりに夏播き大根の種に従って月ぎめの短命の侯爵が植えられたのでした。

以前王冠は、恒星の如く、不動のものと見なされました。しかしトビアス・マイヤーが不動のものではない八十の恒星の表を作ったように、王座も動員した軍によって動くものとなって、戴冠の渡り鳥が発案されたのでした。

アレティーノが侯爵の鞭と自称し、アッティラが神の鞭、あるいは民衆の鞭と自称したとすれば、この両鞭は互いにより合わされて、それで従僕のような民よりも劣等なものが生じました、つまり従僕のような侯爵です。というのは舵に単に余所者の奴隷船長の舵取りの權奴隷がいるのであれば、いずれにせよ国家の船全体は最良のブチントーロからも単に黒人のガレー船しかできないことでしょう。

勇敢さのみが昔からの価値を保っていて

- 一 敵に対する侯爵の勇敢さでさえそうでした、
- 一 そして世界の賭全体は単に[トランプ遊びの]ホンブレあるいは人間の賭で(ホンブレとはスペイン語で人間の謂です)、そこでは大方のマタドール(マタドール[切り札])とは殺害者の謂です)を手に行っている者が勝ったのです。

しかし、地球の代議員の皆様、私の主君の侯爵が打ち負かした敵に対して、これ以上即

興で申し上げるべきことは実際何もありません」。 — こう軍神の宮廷道化師は結んで、黙った。

舞踏会に集まっていた皆が驚いたことに、今や太陽神の道化師が語り始め、葉のない煮立てられた自らの月桂冠を示しながら、述べた。「同僚の道化師殿、お許しを願って、若干補足申し上げたい、書籍商売の件は...」。

この件を先ほどから怪しいことに思い始めていた若干の声望ある商人や官房書記に対して私はこっそりと向き直って、言った。「私が公使館参事官として若干外交上のことを理解しているとしますれば、この件で肝要なことは、両家の支配の侯爵家、惑星家が直接本人ではなく代理人を通じて互いに許そうとしていることです。トルコ皇帝が謁見の際ただ高官にのみ答えさせるようなもの、あるいはイギリスの国王がただ大臣にのみ責任を負わせるようなものです」。

「何も」と太陽神の道化師は続けた、「執筆することは許されなかったのです、新聞を除いては、それで私どもは風評の女神のトランペットからは然るべき作品の代わりに、トランペット奏者が息を吹いた後ふり落とす唾ていどのものしか得るものはなかったのです。政治的月刊誌記者は固まってますます不毛となり、全くの禿になって、髪のない状態になっています。ライプツィヒの書籍市では極専制君主[Despotissimus]あるいは至上の君主は、トルコ皇帝に似て、単に学的唾達にのみ仕えさせたいと思ったのでした。

印刷用紙、写字用紙上の政治的哲学は家畜小屋の紙製のランタン同様に禁じられました、火を出さないようにするためです。包囲されたドイツは包囲された町に似ていて、この町ではすべての窓が汚物で閉じられるのです。誰かが明かりを点すと、早速あれこれの検閲官が、明かりをモール人のように洗って白くしようとし始めて、明かりが折れて暗くなってしまいうまで続けるのでした。

普遍的王国に大学ほど似つかわしくないものはなく、大学はヨーロッパの戦闘的学長、あるいは神の学長代理に学問的学長を対置するので、かくて大学は — さながらドイツ人の予備要塞で — 包囲され、取り壊されまし⁽¹⁷⁾た。

太陽神を抱く太陽はヨシュアの⁽¹⁸⁾許の太陽のように止まったままでは許されず、近世のヨシュアの許、約束の地を目指す途次というよりは約束の地を出る途次、より良く戦闘に仕えるためにより早く沈まなければならなかったのです。

それでも敵の将校達殿とそれに私ども皆にさえ、自由な生活が、自由な演説とまでは行かなかったけれども、許されました。そして私は昔のダンス教師の規則がこの目で逆にされているのを見ました。腹を出し胸を引っ込めるのです。書記や話者は皆氷上に行くようなものでした、あるいは山を下るような具合でした、つまり膝と背中を曲げていたのです。

ドイツの安寧への祈りは禁じられました、単に、祈ることが許されるか、あるいはより明確に言うと安寧[女神]の占い[*8]が許されるかまたは尋ねることだけが許されました。

私自身、参事官でそれも宮廷道化師であります、ごく秘かにゆっくりと登場しなければならなかったのです、単に柔らかな粘液から蝸牛やアリアドネの糸を引き出すようなものです。私はかつて政治的な種子商人として小さな辛子粒ほどの真理を便箋で作った上品な紙袋に仕舞ったときのことを覚えています — たたんだ紙袋をまた空の針用紙包みに仕舞い — この針用紙包みをまた古い喜劇宣伝ポスターの中に — このポスターを校正用紙の中に — これを地図の中に — 地図を広いカルタウネ紙の中に — 最後に

全体をきれいな真紅の羊皮紙の中に仕舞いました。 — 私の希望したことは、人々がこれを開けるとき疲れてしまうか、あるいは開ける際辛子粒をこぼしてしまうことでした。しかし両方生じたときでさえ、私には何の益があったのでしょうか。

最も気の毒に思われたのは私の至尊の陛下のことで、陛下は数分後には皆様や私の支配者となられるのですが、即ち太陽神のこのお方、最も美しい者の神が、以前は自分に捧げられ供えられていた動物に自ら捧げられ供えられたということです、狼や鳥、啄木鳥、蝗に供えられたのです。

こうしたしばらく続く環状の日輪の食あるいは日食の他に、私の恵み深いミューズの神は自分の最良の息子達の多くが貴方らの偉大な軍神の支配下で射殺のために使い果たされ、費消されたのです。ポーランド人が攻囲されたワルシャワから一六〇九年鉛不足のため真珠で発砲したのであれば、このようなことはダイヤモンドの発砲と呼べましょう。胴の代わりに頭を使っています。アテネ人達はこのようなことは我慢できなかったことでしょう、彼らは、今はさほど知られていない詩人のエウポリスがスパルタ人との戦いで溺死したとき、詩人はもはや戦闘に参加してはならないという法を定めたのでした」。

「恐れながら」 — と戦闘の道化師は太陽の道化師に答えました — 「参事官殿に申し上げます、それでも多くのギリシアやローマの古典作家はソフォクレスやアイスキュロスからキケロやホラティウスに至るまでその頭を平和時に明らかにするよりも早く戦争で試したのです、副校長や第二級生徒は、カエサルやクセノフォンが戦争を早くになって、戦争でその古典の文体のためのテーマや素材を見つけていなかったら、カエサル全体とその戦役と共に、（それにクラスでギリシア語が学ばれる場合）クセノフォン全体をその退却と共に欠かせざるを得なくなることでしょう。ローマでは、十年間の抗議文あるいは段々の論争の後、つまり十年間の戦役の後、役所の仕事を得たのですが、それでもすべての職に十分生きた志願者が残っていたのです[*9]」。

しかし話を戻します。適宜先の話、つまり我らの時代の苦しみ、これには特に三種類の嘘が含まれていますが、この苦しみに戻らないと私は私の外交的性格と関連から外れてしまいます。すでにフランス語の中に『帝国ジャーナル』の信憑性を写すものがあります。例えばフランス語の Billion[十億]はドイツ語の Billion[一万億]よりも小さいので、フランス語の Quintillion[百京]は単にドイツ語の Trillion[百京]にすぎません[*10]。ちょうど単なる ⁽¹⁹⁾rien[何も〜ない]は、次の否定語がなければ、フランス人の許では「何か、ちょっと」を意味するようなものです。例えばしかし「それをちょっとでも信ずる方法は」。部隊や収入の数の点でこの語学の天才が侮辱を感じずることはほとんどなかったのです。それで『モニター紙』や『パリ紙』の真実というものはパリの尻[下着]やパリの胸[ブラジャー?]以上に真実のものは何もないのです、もっともこの尻や胸は何か堅固なものを支えているのですが。建築には飾りのために盲門があるように、すでに — ひょっとしたら時宜にかなって — 記者達のフランス風戦争建築、平和建築は盲のあるいは描かれたヤヌス神の門や凱旋門で示されます。これはそれ自体模倣でして、ローマ人の高貴化された模倣です。ローマ人の許では凱旋のとき元帥は肉体的に化粧をしなければならなかったのですが、まさにフランスの新聞では打ち負かされた将軍に化粧や紅をほどこして、将軍に称賛と嘘とで勝利の穴埋めをしているのです。しかしいつでもどの外交的参事官もこれを真っ赤な語りの嘘と呼ぶ他ないでしょう」。

すでにまた太陽神の参事官が反駁心から口を差しはさんだ。「これはひょっとしたら、全権委任者殿、もっと高貴に名付けられるかもしれません、例えば賭博⁽²⁰⁾者の言葉で『新聞によって運命を訂正する』と。本当に不運のとき、羽毛除去のとき、モニトゥール紙は換羽期のときのカナリアのように静かでほとんど歌いません。必ずしも正しくない作品[仕事]の正書は、フランスでは間違っ⁽²⁰⁾て書く作家達の正書法が植字工や校正者に任されるように、正当にもモニトゥール紙に任せられます。告知や称賛の点でフランス人は我々には単におぞましく聞こえる独自の声高な方法を有します。しかし両民族の違いはここにあつて、詩文や処世術の点で両者の郵便の御者同様に違います。ドイツ人の御者は時に音楽的な郵便のラッパを有しますが、フランス人の御者はうなる鞭を有します。ちなみに皇帝が幾多の情報を民衆に知らせないとき、皇帝自身も自分にしばしば最も重要な情報を告げさせていないことを人々は考えるべきです。そもそもそれは、(ラングスドルフによれば)日本人の天皇に宛てて書くことが不敬罪に当たるのであれば、民衆に宛てて書くことを禁止することで民衆にある種の尊厳を与える謂であるようなものです。

一 貴方は先ほど、参事官殿、思い出してみれば、真っ赤な語りの嘘について話されました」。

「若干違うのは」と軍神の道化師は答えた、「笑ってしまう嘘、笑い飛ばす嘘です。つまりこの嘘は、民衆に、昔の自由を失ったのであれば、どんな新しい自由を自分達は得たか明らかに説明することです。更には自分達はいかに戦争中に平和を、戦争さえもまず先に送られてきた最初の出会いとして享受しているか、そもそも商業のヨーロッパでの破産でいかに商業のためになされているか、政治的隷属でいかに商人的独立のためになされているか、いかに全体ではヨーロッパが今や幸運に恵まれているか、しかしいかに大部分は先のドイツ帝国が恵まれているか説明することです。私はこのことをカムチャッカ人の自由な、単により見事な模倣と見なしています。カムチャッカ人はアザラシを頭部以外食い尽くしたら、通常頭に花輪の王冠を据えて、食物を周りに置き、食卓の祈りの代わりに次のような演説を頭に対してするのです[*11]。『我々はいかに汝をもてなしていることか。我々が汝を捕らえたのは単に汝をもてなすためであった。このことを汝の縁者に告げよ、そして彼らもやって来てもてなしを受けるようにするがいい』。この頃このような花輪を付けて演説を受けた頭部がしばしば見られるのであれば、これは不思議なことではありません。しかし注目に値するのは、未開人にさえすでに、外交関係の立派なフランスの大臣の、単に色褪せているとはいえ最初の輪郭が見られるということでもあります。

立派な笑い飛ばす嘘には、ライン同盟という言葉での、主権による侯爵達の分離がありました。侯爵達は母音と(正当なことですが)見なされていて、彼らが密接に並ぶことは政治でも詩文同様に好まれていなかったのです。しかし結合した侯爵達の破壊同様に、今度は逆に様々な民衆を一つのフランスの粥スープ法典へまとめて煮る配慮が上手になされて、誰も昔のオズナブリュックのメーザ⁽²¹⁾ーに帰依しようと思わなかったのです。メーザーはベルリン月刊誌で個々の町に独自の政治的憲法を願いさえしたのですが、それはちょうど庭師も一つの花の植木鉢に二種類の植物の栽培を禁じているようなものです。

微笑を誘う嘘に話者の私が更に数えたいのは、フランス人は何かを奪わなかったとき、通常自分達はそのようなものを与えたと書いたこととして、それ故モニトゥール紙はプロイセンの宣戦布告への注の中でこの規則を守ってしまして、プロイセンはティルジットの

和平のとき単に得ただけで（つまりその帝国の一部を）、何も譲らなかった（つまりまさにこの一部を譲らなかった）と主張しているのです。

この参事官にして話者の私は第三のフランス人の嘘に、約束しあるいは破る嘘に移りたいのですが、次の疑念、あるいは幸いにして移行点を抱きます、つまり保護者のあるいはライン同盟の記録全体は何を目指すものかということで、この記録は言葉で終わったことすらなく、ましてや行為で始まったものでもなく、同盟の教団の聖杯を侯爵達や国々に一つのトリック杯（ヘロンの彎管）として差し出したもので、この杯はそのワインを、ワインを飲もうとして持ち上げるや、隠された管で巧みに消えさせて、一滴も飲めなくさせるのです。

十分です、私どもはいずれにせよ第三の嘘、約束しあるいは破る嘘の許にいます。しかしこれは最も重要な嘘です。言葉が行為の覆いではなく、パラシオ⁽²²⁾スの絵のカーテンのように絵そのものであるのであれば、要するに男は一言ではなく、男に二言なしなのであれば、言葉好きの男は都合が悪くなり、言葉の小売商はその小売店と共に即刻破産しかねません。二人の人間が恐ろしいもの、それ故ほとんど法の保護外のものとなります、この二人に対しては他の者すべてが法の保護外にいることになるからです。一人は自殺者で、自殺者は殺したり死んだりしたいと思わない者達すべてに即刻打ち勝つことができるのです。二人目は勝手に約束を破る者、同盟を破る者です。言葉は、つまり舌の絆は諸精神を結ぶ唯一のガルヴァーニ電池であるからで、この電池が壊されると別々の諸精神にとっては橋や悪魔[の造った]橋として粗野な肉体の力しか残らなくなるからです。ある正当な、強力な、実りある欺瞞というものは単に一年生の植物で、一回以上実をつけることはありません。中立を通ってのまことに大胆な教会通行ほど有益なものはありません。 — 例えはアンスバッハやヘッセンの中立を通ることもそうですが、 — しかし二回目の通行はすでに武装した中立を見だし、三回目の通行となるとそもそも中立はありません、というのはこの種の裸のむき出しの異端の頭目は — 嘘というのは真の異端であり、間違った教義であり — 裸で押し出された手品師に似ているからで、この手品師は素手で手品を行わなければならないのです。しかし裸が許されるのは美の場合だけで[*12]、肉体的倫理的美の場合だけです。

参事官にして代理人殿、私どもはここで嘘をつくこととなります、どのようにして嘘をつくのか知らずに、またその許可も得ないままに。と申しますのは私の気高い権力者の代理人としての私の職責、委任状は、地球を太陽の封土としてすべてのその島々や港、海、泉、法、税収、人間、人でなし、動物、森林、本、紙、証書、国債、殺人罪と共に、それらがたとえどんな名前であろうと、それらと共に、両高貴な相続相互契約者の間でのすべての条約や契約に従って貴方の太陽神の陛下にしっかりと引き渡して、陛下に地球を一年間惑星組織のすべての帝国法に従って支配し — この知事殿が地球のすべての特権を認め — 旧支配と新支配の間に齟齬が生じたら和解手段を見だし — 最後に新しい君主がこれまでの諸宗教の中にいる地球を守ってくださるようになることだからです。

ここで上品に太陽神の参事官は答えた。「参事官殿、宗教そのものは宗教が自ら自らを守るので、存在し得るのであれば、容易に守ることができます。しかし諸宗教は多いので保護をそれだけに一層必要としています。私はこの機会に、まだ十二時にならず、私の君主が話して支配し始めないうちに、参事官殿、貴方に私の敬意を、そして貴方の陛下、閣

下、殿下、猊下に私のちょっと遠くからの臣従を表明したい。

軍神はいつでも地上の総指揮官、要塞司令官に留まれることでしょう、軍神は地上にとって本来唯一の山岳の長老⁽²³⁾であり、私の主君は山岳の永遠の青年です。

砲撃することはいつでも最も速やかに聖徒に列することになるでしょう、そしていつも、死刑執行人のように正直に、ドクトルの学位を得るほどに上部で結球する征服者が存在することでしょう。

火薬はより劣等な王位継承者毒薬の代わりとなりましょう。 —

地球はまさに火星[軍神]と金星[ヴィーナス]の間にあって、この両天体はその中間にある、火成説者によって造られた地球の害を受けずに互いに求め、引きつけ合うことはほとんどできないでしょう。 —

多くの天文学者が火星の周りに衛星あるいは副惑星を探してきました。しかし火星は地球より五分の三小さいので、火星は地球の衛星であることが易しい。

カッシニ⁽²⁴⁾は戦いの神、天体の火星に若干の斑点を見つけたと主張しました。しかし御身はこの斑点を、私の知るかぎり、決してはっきりと証明し、受け入れようとはなさらなかった、尊敬するザリエリ殿[*13]。

以前火星も時に逆行するように見えました、この原因は他でもなく単に地球の位置の影響でした。

諸要素も勝利の際大きく作用します、特に昔の四大がそうです。第一は、寒さや飢えの他に、火⁽²⁵⁾であって、これがあればひよっとしたら自らのアレクサンドリアを建てるときよりももっと勇敢にアレクサンドリアを犠牲にするかもしれません — 次が水で、即ち行軍の際の水不足です — 次が大地で、敵が目の前に余りに少ない土地を有し、背後に余りに多くの土地を有するときです — 肝要なのはしかし空気で、空気の展開だけで火薬は大仕事をし、それで半ば窒息していた民衆が火薬を通じてまた息を吹きかえています。 — というのは戦争の創傷熱は腐っていく平和の[監獄の]悪性チフスよりも健康なものだからです。 —

偉大な民族は、すべての神々の神殿（パンテオン⁽²⁶⁾）のローマのように、ただ二人の神々、軍神とヴィーナスだけを有しています。しかし勿論年と共にこれらの神々の犠牲の司祭は単にこの神々の犠牲の動物になることでしょう。 —

単純なドイツ人は、もっと名声や力を示すためには、単に若干の不幸を必要としていました。野原は単に刈り取られたとき花畑の香りがするようなものです。 — ドイツ人は聖金曜日[キリスト受難の日]を聖木曜日[洗足記念日]よりも前に祝ったことも結構なことでした。 —

全くの十字砲火の中での十字軍によってとうとう重い、鉄の王冠で鑄造された鉄の十字架は傷ついた民衆の背中から溶け落ちて、十字勲章へと細かく高貴なものとされて、胸に掛かっています。 —

十月十二日、ローマ人は君主に馬を犠牲にした。我々も幾度かの十月⁽²⁷⁾にそうしました。

秋には蜜蜂の巣箱は通常雄蜜蜂の殺しを行います。少なくとも私どもは、子作りをして自らを増やすけれども、国家の蜜を増やすことをしなかった幾つかの外国産の盗賊雄蜜蜂をこの季節には上手に追い払って、それで私どもは葡萄摘みの言葉で、申し分のない、いや四分の五の収穫の秋について語る事が許されています。 —

外国人は通常冬にパリへ旅します。幾千人かのフランス人がこの真似をしましたが、外国人が時にそこから去るときよりも、より健康になることはなくて到着しました。

シュルツ⁽²⁸⁾ ヲがおよそ十五万人のすべての諸国からの外国人の数をパリで数えているのであれば、同じく十五万人の数の満足した外国人が突然馬や馬車やすべての祝砲のために必要な大砲と共にパリへ出発し、そしてこれらの射的クラブが驚を射ながらこの大切な町で、自分の金ではないけれども、若干の金を消費するであろうことが考えられることでしょう。

しかしこのことは次のことを前提にしていましよう、つまり（時に血筋のいい皇太子達がパリから汚れた血[梅毒]の皇太子として帰ってくる代わりに）ここではより高い意味での力強い侯爵達が大陸旅行をし、再生した自由の聖なる墓地への行軍を行うであろうということです。

このことを前提とするためには、また次のことを前提としなければなりません、つまり話者の私は私の至高の親方アポロンの予言的神託能力の若干を日直での長い奉仕によって吸収しているということです。

どの家も看板を有するカールスバートでは、ある家で『不可能亭』という看板を出しています。この家に私ども — 時代の湯治家は快適に住んでいます。モニトゥール紙はそれが理解できないし、理解させようとしません。 —

いやはや、私は多くの鉄十字勲章に接して、化学でさえ（これは単に無機の戦術ですが）天体の火星（つまり貴方の天の心）を鉄の印と署名とで記していること、それに勇気と鉄とはまさに北方で最も頻繁に最も堅牢に見られるということをおぼろげに忘れることができたでしょうか。 —

舞踏会場全体の中に、太陽神の道化師と彼の神話学、天文学、国政学の混淆に驚かなかった者は一人もいなかったことだろう、しかし話者は単に、様々の思いつきの収集箱をぶちまけようとしているだけに見えた。両道化師が、自らの外交官的性格仮面、役割から外れてしまったと見てとるのに、現筆者のように外交官的性格を有するまでもないことであった。私はこのことを圏[円]の書き手 — これはカン⁽²⁹⁾ペの数学的道具をドイツ語化しているときのようにコンパスという意味ではなく — 圏[ドイツ帝国の諸圏]の書記に注意を促して、請われないまま告白することにした、外交官として私なら私の性格を別様に解し、別様に振る舞っていたであろう、と。「十二時以降に支配する七弦琴の髭を剃った君主が直に何かを話さなければならないだろう、そのとき拝聴しよう」と初老の商売人が言った、彼は思想よりも商売を詰め込んでいて、しかし決して踊り手の中に数えられもしないし、加わることもないのであった。

しかし髭を剃った君主は話し始めず、太陽神の道化が続けた。「まさに私はまず驚いたことに貴方らの驚きから、私がこれまで大晦日での舞踏会場で余りに機知豊かに跳躍をしてしまったと感じます。この会場は全く別のより落ち着いた跳躍のために板張りされ、照明されているものです。道化よりは退屈な外交官的参事官でありたいと思う参事官にとって跳ねることはふさわしくなく、機知の跳ねは全くふさわしくありません。しかし私のような太陽神の使節、話者には許されるべきことです、その主君はすべてのミューズやすべての思いつきの父親⁽³⁰⁾でありますから。

もっと身近に私の主君、君主に関連しますことは、主君のミューズの息子達が戦闘の気

象境界でこう証明したということです。つまりミューズの山も火を吐く山となりうること、以前書物執筆、書物取引の困窮の年、収穫封鎖を通じてマルシュアス⁽³¹⁾ [Mars-yas]がミューズの父親を苦しめたとすれば、本年はミューズの父親が詩心のないマルシュアスをまんまとだましたということ — それも自らのミューズの息子達を介してそうしたということです。参事官殿、詩作と思索とが、光が凝縮して火となるように、容易に別の立場で凝縮して勇敢さになるということ、あるいは平鏡のように焦点へと定められた数によって火鏡となるということは快い現象であり、幾つかのミューズの座によって剣で証明されたことです。

詩作と信仰は行為となりました。歌は戦いとなり、吟唱詩人は戦いの混乱の中に進んで行きました。賛美の歌人としてではなく、傷の関与者としてでした。軽やかな詩的花々は、ユーノは単に一本の花によって戦の神を宿し生んだという昔の伝説を、再生させながら、思い出させました。

ほのめかすのではなく、単にこう述べることは許されましよう、つまりすでに以前神話学で日輪は軍神あるいは戦の神を闘いで打ち負かしたのであれば、洞察は結局いつも強さに、執筆の指は拳に、要するに静かな遠くからの絶えざる光の侵入は炎の一撃に勝利するであろうことで、それ故私どもはしばらくの間単にフランスの革命的悟性に打ち負かされたのでした。以前ガリア人は（プリニウスによると）白いキンポウゲを自分達の矢に毒として塗って、勝利したようなものです。 — 戦場では亡くなった目は見開かれたままで。若者の死体は私どもを虚ろに開いたまま見つめています、あたかも私どもの生きている目を決して閉ざさないようにと警告しているようなものです。 —

この偉大なヨーロッパの同盟の年、高みと平原と谷のより高貴な連邦の中で、勿論花と咲く青年達が十分というほど倒れざるを得ませんでした。しかし落下する花びらは単に果実と夏を意味し、明らかにするだけです。ただ古びて落下する果実の葉のみが終末と冬を意味します。青年達の上に世界は休みその上で生長します。天が日ごとに生き終えた生命に対して新鮮な若さ、新鮮な精霊の朝を新しい汚れない諸力と共に恵まないのであれば、どの未来も民族と時代のいかほどばかり厭わしく腐った混淆物へと発酵してしまうことでしょう。というのはどの青春も、少なくとも以前は、朽ちて害する以前に理想的に純粹に作用し働くからです。かくて古い曲がった木にも新しい枝が真っ直ぐに天の方へ育つのです」。...

太陽神の道化師はこのような話をどう収めるのかと広間の誰もが自問した。

しかし彼はかまわず続けた。「詩人の神はすべての隷属したピュトンの竜に対する自らの引き絞った弓を外すことはありません。彼は葉とリラの神であると共に矢の神でもあります。 — 熱狂した心はどれも将来間近な雷雲、蝗の雲を告げる警鐘となりましょう。...

さて各人が来たる偉大な年月にその諸力を誠実に発揮し、それでいて他人の大小の諸力の邪魔をしないでいて、さながら時計の文字盤ですべての指針が、月針から秒針に至るまで接触して妨害することなく、重なり合いながら進み、時を知らせる具合であるならば」...

ここで十二時が告げられた。新たな、世界を孕んだ年が始まった。音楽の歓声が偉大な年の夜明けに向かって響いた。人々は喜びに酔って混乱した様で熱い願いを懐いて抱き合った。しかしそれは昨年よりももっと信心深い願いであり、より神聖で強い希望であり、現在と未来への双方の賀詞であり、神への感謝であった。

音色と人々の嵐の下、仮面の二人は一瞬忘れられた。二人はその間に大きな魔法の煙を出現させた。煙は二人を覆いながら次第に濃く広がって行って、空の控えの間に充満した。魔法の煙が二人の王座の上に分散すると、王座と仮装の二人は消えていた。日中の神はずっと話さないままだった、その神は我々にはその夜、単に仮装の余光を手がかりに見えていて、太陽が月を手がかりに見えるようなものであった。

しかし控えの間では白い霧が一層濃くなり、私どもの背後では明かりが消された。今や私どもは（多分幻燈画の技術によって）前世の多彩な影がゆっくりと霧の間を動いて行くのを目にした。英雄達や賢人達で — ルターにグスタフ — クロプシュトックにヘルマン — フリードリヒ唯一王 — 最後にベールを被った王⁽³²⁾ 妃であった。 — 最後にただ雲だけが残った、しかし雲の中から一人の覆われた形姿が歌った。その形姿の周りの雲は歌声の間にベールのように持ち上がられて揺れた。そして心の憧れは薄くなったベールの背後の高貴な形姿の下、また歌声の魔術的ラウテの下、こう思い描いた、あたかもベールに覆われた女王がその天蓋から大胆に神々しいヒロインのように地上の者達に語りかけているようである、と。その形姿はこう歌ったからである。

「新しい年に栄えあれ。新たな諸国と民と崇高な戦争に栄えあれ。御身ら若者に栄えあれ、御身らは死すべき青春の犠牲によって永遠の青春を得ている。

御身ら父親に栄えあれ、御身らは地上の自由のために喜んで息子達の後を追って死に、地上を天国のより自由なエーテルと直に取り替えることになる、そして地上にはただ孫達のために御身らの血の滴で自由なエデンの種を蒔く。

偉大な民族同盟、侯爵同盟に栄えあれ。未来に輝き続けるがいい、すべての同盟と戦争の最初のものよ。これまで通り、勝利に酔うことのない勝利のみが汝には残って欲しい — 轟く戦場での汝の力の隣では血を流す戦場での汝の穏やかさが残って欲しい — 恣意の世紀では昔からの法への汝の崇拜が、節制のなさに対しては汝の節制が — そして大胆に拒絶しながら汝の思慮深い侵攻が残って欲しい — 暴君のメドゥーサの頭が血と心を石化したことはなかった、ただ武器と手のみが硬化させてきた。

御身ら侯爵よ、御身らに栄えあれ。未来は御身らの周りに戦火が聖像の後光のように漂うのを目にすることだろう。歴史は初めて編んで捧げる月桂冠をその葉を散らすことなく保って欲しい。 — 報復の火の輪が、血の奔流、涙の奔流に押されて、音を立てて進んで行く — 時代の夕方の雲は血のように赤い、この赤は青い朝を知らせる、それ故最も重いもので重いものの上に、最後の勝利で最初の勝利の上に、平和で戦争の上に立つがいい — すると世紀の暴力的な、すべての王座の高みを圧倒する血の大洪水の後、ヨーロッパの上には平和に虹がかかる、虹は神々しい同盟の印で、世界の平和を誓約するのだ。

それに私の周りの御身ら、それに私の思っている御身ら、御身らは皆偉大なこの新年に幸せであることだろう。しかしどの声が霧の中から話しているか尋ねないで欲しい、御身らの胸の中の声なのだから」。

ここで声は消えた。その雲も飛散し、霧消した。今や人々はまさに夕方の山の端に上弦中の月が純な鋭い明るさと共に沈んで行くのを目にした、さながら朝の反照、出現であり、日中の保証であった — そして太陽あるいは日輪は天文学によるとまさにこの夜、近日点にあった — そして私はこのとき多くのことを考えた。

*1 筆者はこれらの惑星の君主の大方に対して誓忠式の演説や就任式の演説、離任式の演説を、あるいはその他の演説を、様々な暦や週刊新聞紙上に載せてきちんと対応しており、筆者は一八一五年の金星と一八一八年の土星に対して然るべく述べるだけになっている。土星の大鎌が生命と演説の糸を同時に断ち切らなければの話であるが。そんなことになれば、時の神そのものが私の歓迎を無にしまい、その上、自らを（あるいは生命を）生き尽くしたけれども、まだ書き尽くしていない作家を倒してしまったことの原因を負うことになる。

*2 ウルトルの名前と神殿をアウグストゥスはカエサル⁽⁴⁾の殺害者への勝利を祝して軍神に与えた（スエトニウス、アウグストゥス 29）。ビスルトルの名前を彼は軍神に、パルティア人によって奪還されたローマの旗を祝して与えたとされる、オウィディウス『祭暦』V. 595の異文による。 — ちなみにカンネ⁽⁵⁾の豊かで輝かしい『インドの神話の体系』（彼は機知ある者の中で最も学があり、学ある者の中で最も機知がある）では427頁に思いがけない語源学的発生が載っている。「アックスは（その前に王の名前アックス・マルティウスが言及されている）はびつことも近い、跳ねるサリーを軍神は神官に有していた、軍神は自らビ・スルトルと言った」等々。

*3 このN. B. は喜劇『未亡人』を一五九二年フィレンツェで出版した。彼はシエナの聾者風喜劇協会に属していた。バウターヴェークの『芸術と学問の歴史』第二巻。183頁。

*4 ヘロドトス IV. 57 [61]

*5 ヴォルテールは彼の『哲学辞典』の責め苦の項でこう言っている。外国人はフランスを芝居や、小説、気の利いた詩、はなはだ穏やかな品性を有するオペラの娘、優雅なオペラの踊り手、酔わせるように詩を朗読するクレロン嬢で判断する。彼らは実はフランス国民ほど残忍な国民はないということを知らない。

*6 『ユダヤ人、あるいは古今のユダヤ人気質』第二巻。486頁[491頁]。

*7 サド侯爵、厭わしいジュスティエヌの著者は（目下パリの精神病院にいて）ペトラルカのラウラの末裔である。ヨハネス・フォン・ミュラーの作品参照。第六巻、415頁。

*8 周知のようにショットゲンとピティスクスによると、鶏（雄鶏と雌鳥）に食べ物を与えて、その食う様から神々に民の安寧を頼んでいいか判断するときの占いはこう呼ばれた。

*9 ライプニッツやニュートン、カントが学問のために結婚生活を犠牲にして良かったか — プラトンのようなギリシアの哲学者が、共和国の官職を逃れて良かったか — ひよっとしたら二度とは地上に現れないような精神、例えばシェークスピア、クロブシュトック、スピノザ等が、これらの民衆や世紀のより高貴な従者達が、より上手ではなくても同程度に、重要とは言えない精神が務め得る官職の従者として消費されるべきか、火薬以上のものを発明する頭脳が火薬を詰める手の代理人となるべきか — この問いには短い論考では答えられない。しかし同様にはっきりと、論考の必要がないと言えることは、セルバンテスとかダンテや他の偉人は、自分達の心にとって神聖で心が要求する戦争に自らとすべての未だ生まれていない傑作を犠牲にしてはならないかという点である。というのは天才は神の摂理に違いなく、しかし心は人間の摂理に違いがないからである。

*10 Simon による『ドイツ語の基本概念』

*11 文字通りシュテラーの『カムチャッカ紀行』より採られている。

*12 私は新聞記者や歴史家の偉人についての不法卸売買に抗してまたヴォルテールの一箇所を引用する、この箇所は多分 — 彼の自由な情緒を彼の怒りの爆発として従来混同して — 注目されずにいる。「世界中が認めている、クロムウエルはその時代の中で最も大胆な将軍、政治的に最も深く、党や議会や軍を率いるのに最も能力のある将軍である。しかしその間に彼に偉大な人間という称号を与える作家はいなかった、目覚ましい資質を有しながら、何ら偉大な徳を有しなかったからである」。『哲学辞典』、偉人の項。

*13 ザリエル達は軍神の司祭であった。

ドイツの受難週の
間の
政治的四旬節説法 (一八一七年)

序言

私はこの小品の数年前に印刷された分冊の小史を(というのは五番目の分冊は新しく、それに序言もそうで、両者は将来になって一つの歴史となるからで)一分間で伝えることができる。I.『その後の薄明』はペルテス社の『ドイツ・ムゼーウム⁽¹⁾』に一八一〇年印刷された。II.『ツィービンゲンの包囲』は『ゲッセン社の戦争カレンダー』に
III.『スフィンクス達』はシュレーゲルによる『ドイツ・ムゼーウム』に一八一二年
IV.『二重観兵式』は『ゲッセン社の戦争カレンダー』に一八一一年印刷された。

これらはかの煩わしい年月に執筆されたものであり、当時は兜の羽根飾りの他に大胆に気位高く動いてよい羽根ペンはなく、また狼を挑発しないよう羊の服で行かなければならなかったので、私がこの本で狼と共に吠えないまでも、狼のことを怒っていない箇所があっても立腹しないで欲しい。また私が、他のより世故にたけた頭脳同様に、我らの聖なる檜の木を倒した第二のボニファティウスについて相変わらず希望を棄てようとしなかった別の箇所も見つかることだろう、もっとも我々ドイツ人はこのボニファティウスのお蔭で — この者は第一のボニファティウス同様我々にやはり自由の島から送られてきたのであり — 彼の意志に反して自己分裂と利己心の倫理的異教から改宗することになったのである。かの箇所は改正せず粉飾せずそのままにしておいた。後知恵を遡及させたり、現在の勇気を挿入したりして新たな偽の光輝を自分に与えることはしない、昔からの光輝は十分に有するのだから。ただ言葉の変化は古いものに挿入されることになった。更にはせいぜいどの時代であれ妥当する、例えば $a=a$ であるという命題のような考えが挿入された、一方 $a-a=0$ というような考えはそれに特別に有利な時代を要するものである。更に私は「現在」もまた耳に届くように配慮した、最近 — 特に「現在」を求めて呻吟されてきたのだから。

そもそも作家は、J.J.ルソーのように、新たな版の中で旧版の告解をすることを恥じてはならないだろう。なぜ作家はまさしく印刷本の中で有限性の傷や創傷バルサム、変わりやすさを隠そうとするのだろう、あたかも自分達の意見のそれぞれは最終の意見であり、どの意志も遺言であるかのようなものだ。学者の書斎でも学者の信念はしばしば変わり、脱皮し、繭を作り、幼虫になり、蛹になって行かなければならず、かくてこの信念がようやく繭を破って出て飛び立つのであれば — そしてどの露地でも知られていることだが、学者は絶えず(ほとんど信じられないほど)自らと自らの信念を変え、別様に考えたということ、まずは第一級生徒として — 次は学生として — 私講師として別様に — 助教授として更に別様に — 正教授として新たに別様に — その後学長として全く別様に考えたということがどうしようもないのであれば、 — なぜ男性は自分が、蜻蛉が脱皮のときそうするように、飛行中にも試みている自分の新たな脱皮を戸外の世間の人々に見せようとししないのだろう。 — いずれにせよ、時に意見の歴史は、通常の町の歴史がそうであるように、意見そのものよりも成果の多いものではないかという疑問が生じよう。

ちなみに私の政治的論考のすべてを通じて、最初の執政の圧力から最後の皇帝の圧力に至るまで、私が今もっともそこに立ち続けているのを見たいと思っているものが — つまり希望が、屈することなく屹立している。希望、この神慮のスポークスマン、保証人は、どの雲の上にもより高い雲が重なり、この高い雲の上にもまた雲が上がるというかの時代を

通じて私の伴をしてきた。希望はこれらの雲を通じて見抜き、まだ太陽が見えることを請け合ってきた。今は誰もが、希望は正しかったこと、いまだに太陽が輝いていることを知っている。

ヨハネス・フォン・ミュラー⁽²⁾ [*1]は言っている。「人間は進む道が分からなくなると、神慮の道が始まる。二〇〇年以上前から大いなる舞台ではほとんどいつもとても有りそうにないことが起こった」と。それにフリードリヒ・ヤコービはまだ先の世紀の八〇年代にこう言った。「人々は（諸国家）はまもなく起こりそうに見えることを決して不可避のものとして恐れたり、我慢したりしてはならないだろう」と。

国家の不幸の際のこうした希望 — 並びに国家の幸福、つまり高度な自由の際のこうした不安は — 夢に似ている、夢はカントによれば睡眠中の精神的活動として、普通眠りのとき消えている生命の火をかき起こさなければならないものである。自由な国家スパルタが恐怖を崇拜したように、希望の女神[*2]が硬貨に見られるのは、劣等な皇帝達、例えばカリグラの治下のときほど頻繁なときはない。

人間はただ余りにしばしば忘却し、絶望する。さもなければ、偉大な世界進行への神々しい法則への洞察と信頼は大抵の個々の政治的知識の豊かさよりもより容易に目標を教えてくださいと人間は気付くことだろう。敬虔な詩人は時に、すべての内閣の冷淡な事情通よりもより良い予言者である。

偉い実力者の真似をしてささいな作品に長い序言を付すことが余りに大胆なことでなければ、ここで文を展開し、四旬節[断食]の説法のタイトルの弁解を短くし、釈明していいだろう。この論考は即ち本当にドイツの四旬節に書かれたのであり、四旬節は大抵精神的断食として我々や我々の説法を兵糧攻めにし、我々に余り本の楽しみや自由な演説、心の踊りや音楽を許さずに、単に苦患を眺めることに限定してきたものである。その上上述の四旬節は正規の肉体的断食でもあって、この時には源ガリア教会[フランス革命以前のフランスカトリック教会の別称]は逆に肉の代わりに魚や、海のもたらすもの一切を禁じて、その違反者の歯は、十世紀にカトリックの断食違反者に対してなされたように、叩き折られたのである。ただ公平に知らせておくべきであろうが、ここでは一五三八年のパリでのように、違反者は焼き殺されず[*3]、単にそれらの品そのものが焼かれたのであり、いやその上断食赦免の十字軍教書、つまり特許状が十分に売り出されており、それで断食は、断食のせいで教皇選挙や陪審員は — イギリスや大陸は — 選挙や判決の全員一致に至るのであったが、十分に用意された精進料理でよりしのぎやすいものとなっていたのであった。

この四旬節の説法とそのタイトルはただこのような贅沢な暗示には値しない。そうでなければ容易に更にこう暗示されるべきところであろう、つまりドイツの四旬節では以前のキリスト教の四旬節同様に、我々は異教徒やユダヤ教徒からもっとキリスト教徒や教理受講者となった。それ故以前キリスト教徒が日曜日から日曜日にかけて別様に名付けられたように、我々は戦闘から戦闘にかけて別様に名付けられることになった、最初は初心者で — 次に聞法者で — それから請願者 — それから覚醒者 — 最後が「さながら新生児」であった、と。

しかしながら — 肝要なことで、執筆者達のすべての受難の説法あるいは四旬節の説法がドイツ人の苦難の秘かな歴史の中で指摘していることは — とうとう再生と復活が

やって来たということ — 復活祭の蠟燭が点され — 復活祭の霊水が浄め — 復活祭の菓子が美味しく、いや所謂「キリスト教徒の復活祭の笑い」あるいは「復活祭のメルヘン」がすべての本の中で見られ、いやこれらの復活祭の説法ではそれどころかもっと以前に冗談が言われていたということである。

まだ我々の前には復活祭の後の日曜日が、つまり同盟の日が体験されるべく控えている、あるいは所謂 *Quasimodogeniti* の日曜日で、これは初期のキリスト教会では「さながら新生児」の日と呼ばれていたものであり、この日新生児は洗礼服を脱いだのであり — あるいは（まだそう呼ばれたように）使徒達あるいは使節達の日曜日で（彼らの前にまず蘇りし人は現れたのだから） — あるいは更にトーマスの日[十二月二十一日]で、この日にトーマスの改宗が朗読されたのであるから — 最後には反復活祭まで控えている、この日で八日間の復活祭は終わりになるのであったからである。 —

しかし同盟の日は最後の添え名を得る必要はなかろう、我々は皆むしろ復活の祝いはずっと続けて祝いたいと願っているからである。

バイロイト、一八一六年 秋の昼夜等分の日

ジャン・パウル・Fr. リヒター

*1 その作品。第一六巻。196 頁。

*2 ベッカーの *Augusteum I* .

*3 *Sleidan* によるとある若い貴族は肉食そのもののせいで焼かれた、三人のオランダ人はただ逃亡することによって同じ火刑を免れた。

I.

ドイツの為のその後の薄明
あるドイツの皇太子とその妃への献辞と共に⁽¹⁾
献辞への序言

ドイツの薄明をドイツの侯爵に捧げることは希望を捧げることであって、薄明で考えているのは単に朝方の薄明かりで、これは日中に移行するものである。私は次の四つの多韻律詩を高貴な方々にその許しを得ずに捧げるが — これはそのお名前を言いさえしなければ、立派に躊躇することなくできること — このお名前が明らかになった場合、ご本人は、ただ称える場合、画家は本人とはっきり分かるように描くと御自分のせいにしてお考え頂きたい。ただこのような場合、私よりもむしろ世間が捧げたのであると、私は主張していいだろう。

殿下と妃殿下に

1.

松明舞踏[ポロネーズの一種]

私は結婚式の短い松明舞踏よりも素晴らしい侯爵達の松明舞踏を知っている。私はある小さな明るい国を知っているが、そこでは天才達が住んでいて、侯爵達に松明を作って差し上げる。侯爵達は松明を美しい、軽やかな、何も傷つけない動作で持ち運び、 — それで遠くの余所の国々まで明るくなっている。二人の天才とその後見の女性⁽²⁾が今は亡い。しかし現在は実り続けており、未来は歓迎して花咲いている。

2.

美

薔薇のように赤い鏡のある部屋ではどの顔も花咲き、至る所に曙光の赤みが見られるように、美は自らを取り巻く一切を美しくし、若返らせる。美は — 社交の春であって — どの力をも開花するように暖めて、社交の演説を孤独な詩文へと暖める — 高齢は若々しくなり、青春は真面目になる — どの心も新しい喜ばしい力と共に鼓動し — ドイツの王笏は優しく引き出された磁針として北の方⁽³⁾を指している。

3.

真珠と白薔薇の諍い

真珠、「私は妃にもっと似ていて、あなたよりももっと妃にふさわしい。だって私は穏やかに清らかに輝いているから」。

白薔薇、「でも私はもっと明るく無垢の色を身につけていて、私の方がもっと似ている」。

真珠、「でも私の価値は枯れることがない」。

白薔薇、「でも私は穏やかな西風に命の春の息吹を寄せるわ」。

真珠、「私は時に妃の頭に触れる」。

白薔薇、「私は時々妃の胸に触れるわ」。

突然赤い薔薇がすべての若々しいアウローラの魅力を解き放って、鮮やかに誇示して言った。「美しい方々、無駄な張り合いはしないこと。私だって妃に似ているのだから」。

4.

薄明のお二方への献辞

「二種類の薄明を、夕方の薄明と朝方の薄明を汝は殿下と妃殿下に捧げる。お二方に同じ言葉を使って。どのように自分のなすことを弁解するのか」。 — 両方とも天のなすことである。一方の薄明では宵の明星が支配する、これは愛の星とも呼ばれる。もう一方の薄明は明けの明星が支配する、これは明かりの使者とも呼ばれる。そのように私の薄明にも（と願望は述べる）二つの好意的星が現れて欲しい。

「でもお二方に同じことを言うのかい」。 — 空では宵の明星と明けの明星は単に一つの同じ星である。

第一のその後の薄明

ドイツの混沌の精神的沸騰

ドイツ民族ほど目下、詩的、哲学的、政治的教養のはなはだしい根源の戦闘に陥っている民族はない、他方我々の周りの他の民族は満ち足りた統一の中に、あるいは疲れた出歩の中に、あるいは利己的な冷淡の中に静かに横たわっている。我々は哲学や詩文の面で、一部には政治の面で指導者を甘受しないが故に首領なしと称した昔のエウティケス主義の異端に似ている。我々の新たな多面性は単に我々の昔の多面性の親類にすぎない。歴史家ならばこの親類の母親なる者は十分に見いだせよう。これは単にドイツ民族ほど（ヘルダーによれば）⁽¹⁾ 頻繁に移動する民族はないからばかりでなく、それ故「さまよう」から Sweven という名前が、「遊歩する」から Vandalen という名前が生じており — というのはユダヤ人やジプシーが存在するものの中で最も長い大旅行をしたといっても、ただ原初の習慣によって化石化した姿としてであるからであり、 — 主に次のような理由による。つまり旅するドイツは同時にまた大元帥や貿易隊商によって縦断された国であるからであり — ヨーロッパのこの心臓はすべての民に血管として注いでいるからであり —

ドイツは諸民族の集まった一民族であり、小国で一杯の一つの国、諸気候の一つの遊び場であるからであり — この多面的帝国はロシアやイタリアやフランスの更に多面的境界圏を有し、その上間近にはスイスやオランダ、エルザス、北方の国々、ハンガリーといった二分の一あるいは四分之三の血縁の多様性を包含しているからであり — 最後に、ドイツ人はほとんどすべての外国の王座にしばらくの間座っていたことがあって、この王座がドイツ的精神的植民地、商品の植民地として我々にまた余所の商品を送ってきたからである — すべてのこうした影響や更に多くの影響によってすでに以前ドイツは例の石に似ざるを得なかった、その石の上では植物や海の動物、陸の動物の不揃いの対象の外型が同時に出現しているのである。

さて今や我々の多面性を覗くべきであろう、まずは我々の文芸の多面性である。クセーニエン⁽³⁾ 以来すべての文学上の権威は失墜している。失墜させた者の権威そのものも失墜している。誰もが力で存在感を示し、名前で通用する者はなく、名前に対してどんなに小さな批評家も恐れをもはや抱かない。今のドイツほど若者と高齢者が文学的評価の点で対立している所はないし、時もない。ドイツでは老人は青年とは全く別のドイツの傑作を

評価している。これに対してパリやロンドンでは彼らの古典作家の名声の神殿は若者と老人の合同教会であり、同時共通教会であって、ちょうど我々の許でもゲレルトやヴィーラントの時代当時の詩人のランクについて、またメンデルスゾーンの時代哲学者のランクについてかなり一致していたようなものである。

マドラスでは二十三の言語が話されている[*1]。ただおよそそれ程の数の正書法を同一作家が⁽⁴⁾様々の時代に使用してきた様々な正書法は数えることすらしないが、いや更に多い散文の文体と更に多い詩人の文体を我々は指摘できる。誰もがロシアの狩人の音楽のように、自らの唯一の音色を吹き鳴らして、ただ拍子にのみ注意を払い、他の共演者の音色には耳を傾けることさえしない。それぞれの音色の中で全体の音楽が構成されると知っているからかもしれない。

フランス人の散文とドイツ人の散文の違いは、そのようなドイツ人の散文家同士が互いに違う程度のものである、つまり次のような具合で、ヘルダーとヴィーラント、ゲーテとシラー、ガルヴェとハーマン、ヨハネス・フォン・ミュラーとシュパルディング、Fr. ヤコービとエンゲルの違いで、これに更に加わるのがクロプシュトック、ヒッペル、シュライマー、マッハー、フォス、それにアーダムとフリードリヒ・ミュラー、フィヒテとシュトルツである。それでもこれらの多様性は詩人達の間ではるかに広がっている多様性と比べれば何でもないのである。我々は今やすべての国々のすべての歌の種類、音色の種類を、スペイン風、インド風、ギリシア風、ローマ風、ガリア風、ゲール風⁽⁵⁾、古代ドイツ風、最新ドイツ風のを歌い響かせているので、かくて我々は実際肉体上の人間の声に似ていて、これはすべての母音を歌うことだけで吹奏楽器の演奏全体を突然出現させてしまうのである。つまりホルンは単に a の音に似て聞こえ、オーボエは単に i の音に、クラリネットは単に e の音に、それぞれの楽器が別の母音に似て聞こえるのである[*2]。勿論両見本市に見られる支配的詩作と詩人のこの生物の連鎖は、不快な点があつて、老いた桂冠の詩人は年に二回も丁重に遇されることはない、たとえこの詩人が腋まで垂れる月桂冠と共に混じってもそうである。詩人は名声の神殿にしながら、懲役囚の未来を大いに苦いものとする展望といったものを有する、懲役囚は半年ごと⁽⁶⁾に現場で所謂「手荒い」歓迎を受けるのである。いや、多様な詩人達の数を余り感じないようにするために、批評は詩作品に対してパリの警察がポスターに対してするようなことをする、警察は每晚新しいポスターのために古いポスターを剥がすのである。それに詩作する大量品、多彩品に対する最良の解毒剤、つまりドイツ人の記憶を考えてみるといい。この記憶を人々は洩れ落とすのである。[モイゼルの]学的ドイツはミネルヴァの素敵な神殿で、ここでは忘却は独自の祭壇を有していた。

それでも若者らしい厚かましが忘れ形見を混入しているからといって、未来に対するこの継承戦争を無視してはならないだろう。以前我々の言語は深みから光輝と黄金を取ってくる見栄えのしない坑夫服であったとすれば、現在この言語は自らこの黄金で飾られ、輝いている。すべての言語形式、詩文形式への我らの言語のこの自由な加工、この溶解、注ぎ足し、鍛え延ばし、繊細な引き抜きが後わずか次の五十年間続くならば 一 政治的状況が窒息させるというよりは鼓舞するドイツ人の言語への勤勉さが続くならば、一 この言語はあらゆる種類の仕事道具、製図器具で一杯のとても豊かな小売店を開くことだろう。そして第二のクロプシュトックやゲーテが現れて、第一のクロプシュトックやゲー

テが貧しい言語を活用しているように豊かな言語を活用するならば、新たな詩文はひょっとしたら第六の創造日[人間が造られた]を迎えるかもしれない。

ドイツの哲学を覗くことにしよう。目下我々はこれを数多く有していて、腹ペこの折衷学者ですら新たな哲学をもはや欲しないほどである。ヨハネス・フォン・ミュラーが述べていること[*3]、つまり一四〇九年突然出現した三人の教皇は互いの非難によって教皇の神聖さという評判を落としたということ、これと同じことを、三人の次々と素早く就任している教皇達、カント、フィヒテ、シュレーゲルに対して、無謬性という評判に関して主張できよう。そしてある者が私同様に多くの体系を読んで、単にそれで自らの体操の練習をしたり、また冗談を言ったりしても、それに悪気はないのである。ズルツァ⁽⁷⁾が頌歌を拡大された感嘆と説明しているのであれば、この者は体系を拡大された疑問符と述べるであろうからである。しかしこのことはキリストの少数の哲学的代官達には気に入らない。彼らは自分達の作品を、詩人なら自分の作品をそう見なさないだろうが、永遠の作品、最良の作品と見なしている。フィヒテ⁽⁸⁾は全ドイツを前に慄然とすることに誓い、呪って、敢えて印刷して言った、自分は意見を変えるくらいなら、地獄に行きたい、と。それ故彼はシェリングのような重すぎる敵対者を読んでいないのかもしれない、自分が改宗したら劫罰を受けるであろうから。どの体系家も — 私が懸け離れた暗示を引き寄せてよければ — 自分の木綿と共に早速所謂木綿製造器を持参してきている、これは木綿をすべての核から上手に浄化するのである。

しかし誓って、核はまさに新たな木綿に育つべきであろう。そしてカントは、彼の体系全体さえもが彼の後を追って亡くなっても、ドイツの光を放つ刺激的な慈善家に留まるであろうし、体系は彼同様に単に神々しくなるとまた蘇るであろう。もとよりフランスには一つの哲学しかない、百科全書派の死んだ哲学、殺害する哲学に哲学という名前を許す場合の話であるが。しかしその代わり我々にはすべての哲学的方向を求める時がある。そして誰もが周辺の自らの点から出発して、中心に至ろうとする。アテネの唯一の哲学的オリンピック競技の我々の反復を真似たり、それに追いついたりできる外国はない。外国は我々が哲学的発明のために要する時よりも長い時を哲学的習得のために要する。それに我々はすでに久しくカントを卒業している、一方外国はすべての書物にもかかわらず彼の中に入ってさえもないのである。

今では短期間に、哲学的商取引はその積み荷の最高の条件を、つまりこれまでのドイツにはなかったような海上貿易の自由を得た。我々がこの自由を得てもギリシア的ソフィストやラテン語的スコラ学者を将来積み込み、陸揚げすることはないということ、このことを保証しているのは、ドイツ人がいつも頭と心の間に維持している共同体であり、今でもその哲学の中で神秘主義との混入やすべての知識の細部への浸透で自らの存在を示している共同体である。

自然哲学によって活発化した滴虫類的混沌というものに関しては、我々の民族ほど均一化や対極化、結婚化のこのような豊饒さ、広大さ、乱暴さを示した民族はない。この軍にはすべての学問が例外なくその精神と肉体を差し出しているからである。薬学、天文学、博物学、地理学やすべての学問の途方もない一気の混在である。しかし天地万物のこの代数学はまさにその方程式部分の無数化によって無限に難しく長い計算を容易なもの、様々なものになっている。誰もがその部分の中で選択するからである。それ故自然哲学の平行定

規論者達はしばしば福音書のレッシン⁽⁹⁾グによって論駁された調和主義者達の新たな舞台を見せている。時間のある人は、冗談で調和主義者達自身の間に見られる不調和を数えることができよう、例えばシェリングやオーケン、シューベル⁽¹⁰⁾ト、シュテフェンス、ヴァルター⁽¹¹⁾、トロクスラー⁽¹²⁾、ゲレス等の間で調べることができよう。しかしまさしく量器検査官達のこの不調和、この不揃いは不幸というよりは単に目標への道の長さにすぎない。愚かさは、それと共に英知が終わるが、平和と共に始まる。その間に戦争がある。

政治的発酵桶は — 周知の洞察力のある棟梁[ナポレオン]はそれを前にしているが [*4] — それ以上に混沌とざわめいている。一八〇九番の家の男はそれをドイツの昇天と見なすであろうが、これを一七八九番の家の別の男は地獄行きと見るだろう、もっとも両道行きは水平な小道と飛行なのであるが。今では両党派を傷つけずにはほとんど党派については書けない。ドイツの変化の中で一方の者が腐った発酵と見なすことを、『ヤーゾ⁽¹³⁾ン』の著者は精神的発酵と見なし — 三番目の男はワインの酸味の発酵と — 四番目の男は、私のように、どの民族も常に一度に同時に経験し耐えるこれら三つの発酵とまで見なす。ちなみに、新たな、より正しい政治的精神というものは、大抵は時代精神に対する無定見な不信仰が硬化する宮廷においても、また抑圧と夜とで一杯の最底辺の身分においても、中産階級におけるほどに純粋に発展することはないであろう。中産階級においては時代の正しい見解というものはまさに対立する諸見解を知ることによって結局形成されるであろう、拡大するレンズと縮小するレンズの組み合わせで望遠鏡が生ずるようなものである。しかしどの対立する党派にも祖国に対する高められた愛を抱く共同体が残っており、祖国についてはわずかに廢墟のみを見たいと思っている者達にとってさえ祖国は今やより偉大に見えることだろう、パルミラの廢墟は(ギボン⁽¹⁴⁾によると)周辺の空虚な砂漠のせい目により崇高に映ずるようなものである。

哲学や詩文、政治のこうした同時に働く刺激の兵学校の中から — それに刺激剤で一杯の発砲するというよりは絶えず鼓舞する偉大なフランスを相手にして — ドイツの形姿は将来高い強度と完成を得て出現するに違いない。ただ我々は仕事始めの日を善悪の仕事の点で、市民法が有利に定めているような具合に[*5]、すでに仕事仕舞いの日と見なしてはならないだろう。というのは諸民族はしばしばダニエルの長い週⁽¹⁵⁾年からなる日々を有するからである。我々はただ(ビュフォンによれば)時に實際生きた雛が卵なしに生まれてきたからといって、それ故我々の卵を孵化するのを恥ずかしく思う必要はない。フランス人は現今のフランス人に上述の革命あるいは転覆よりも長い革命を通じて形成され固められたのである。我々のんびりした冷たい者達により短い革命を要求してはならない、もっともフランスの革命のせい目で我々の革命はその展開を短縮することができるだろうが。外国の諸形式の通常のドイツ人の消化はこの諸形式から、素材にはほとんど注目していなかった新たな価値の樹液や血液を仕上げることだろう、ちょうど我々がフランス人の化学や哲学や詩に関してなしてきたような具合であろう。ちなみに、まだ少しも考察されていないことだが、時代の中で過大な有毒な刺激が健康な刺激を上回るとしても、ヨーロッパの中世を君達は考えてみさえすればいい、明らかな夜と抑圧の優勢の中でいかにイギリスとドイツの政治的自由が、フランスと最後には全ヨーロッパの教会の自由が蘇ったことか — そして当時のいかなる哀れな発端と偶然の中から広大な光明が流れ出てきたことか — そしていかに教皇達はまさに専制のせい目でただ自らの反教皇となったこと

か、考えてみればいい。――すると君達は、いかにわずかな生命力で単に生命のために生まれた人間達が厄年の間に若返るすべを心得ているか追感し、予測することだろう。まさに個々の人間が大気の中で、大気の単に四分の一のみが酸素で、四分の三は有害であるけれども、健康に息をし続けているようなものである。

それ故ドイツの新たな――建設ではないが――改築、増築の際には、誰もが実直に、臆することなく振る舞うことだ。モンテーニュ[*6]が、自分の脆い高齢の時が同時に祖国の脆い時に当たっていると若干自己中心的喜びを述べているとすれば、今は逆に各人がその若さを――この未来の婚約時代を喜ぶがいい、――若ければ新たな建設により長く、より丈夫に助勢できるからである、そして死への臆病な憧れを恥じることである。というのは一度は働く必要があるからである。しかしより熱くなって働くのは誰か、新しさの炎のないすでに習熟し慣れた子孫であろうか、文芸よりも高い目的のためのドイツ社会という現今の新鮮な協会であろうか。すでにヘルダーは他の組合、例えばイエズス会やアカデミーの場合、その仕事の熱意が最高になる時はその結成の時であるとしているのである。

私はここでこの高貴なヘルダーを呼んだ。――勿論彼とかクロプシュトック、グライムや他の若干の老人は、先の時代のために十分に働いたのであって、その弟子達が働くべき新しい時代からは身を退くことが許されよう。――月桂冠を戴いた御身達の白髪の頭は、塚で覆われ、戦火と悲惨の叫び声の下、静かに休むがいい。多くのことが御身達の末期の年月に御身達に辛すぎるものとして降りかかってきたことだろうから。――しかし汝、まだ若く、あるいは若返ったヨハネス・フォン・ミュラーよ、汝は逃げるべきではなかろう。汝は新しい時代に古い時代を継ぎ足して、悩みつつ同時に創り上げてきた。――

そして後世に先の世を求めた。汝のセンスの縁者は誰もが汝に倣って、先の世で一杯の自らの心の他には何も求めず、希望すら求めず、ましてや恐怖を求めずに、立派なこと最善のことをなすがいい。

一八一六年の朝の光

ひょっとしたらドイツの混沌という表現は消していた方が良かったかもしれない。しかしそもそも単に比較的な混沌があるだけで――うってつけの混沌は一つの矛盾であろう――それにどの過去も未来にとっては一つの混沌である。思考の争いは永遠の平和を結ぶことはできず、未来のより高い争いのために単に休戦を結べるだけである。六千年に及ぶ戦争がまさに今日、この戦争より長く続く平和を締結すると期待するのは妙であろう。哲学的戦争はますます神学的戦争に解消していくように見える。というのは我々は目下自由なキリスト教徒の他に中世キリスト教徒、古代キリスト教徒、超キリスト教徒、ローマ・キリスト教徒を有するからである。そもそも――好意的表現が大胆すぎるものでなければ――ドイツ人は生まれながらのキリスト教徒であるように見える。そしてすべての宗教の中のこの宗教がドイツ人の名誉正しい、誠実な、温かい、静かな心から去ることは決してないであろう。ドイツ人はその真面目さを空想の熱情で詩作しながら揮発させないし、単なる分別で敬虔さを氷結させることもない。すべての面における、つまり気候、精神、心における我々の全面的な中道は、実際、徳操やキリスト教界の要求する中間の道を行くのにふさわしい。

混沌、即ち論考が話題にしていた詩文における諸要素の戦争は、ますます生気なく、平

和的に戦いながらではあるが、長く続くに違いなくて、そしてようやくどこかの新たな精霊がすべての方向を一つの方向へ解消するであろうが、この一つの方向が最初は[後には?]また敵対する方向と友好的方向へと分裂するだろう。ただ、どの詩人も、北アメリカの多くの村々ではどの家もそうであるように、自らの独特の言語を有するからといって、何人かの者達のように、文学的な民族の独自性を欠いていると見なさないことで、むしろまさにそれ故一つの独自性を有すると認めることである。というのはまさに美学的リングワ・フランカ[レヴァントの混成語]が全ヨーロッパの中で我々を分かつものであるからである。その最大の証明は、我々は綺麗にどの外国語にも翻訳できないということである。ドイツ人の頭脳はドイツ人の顔と同様である。ドイツ人の飲食店の食卓ほどに観相学的ピクニック、多種多様が見られる食卓はない。これには多くのことが寄与しているだろうが、三〇年戦争来あらゆる民族が我々の下で父親となったという事情ばかりのせいではなからう。 — それでも世界中でドイツ人の変転する顔は変わらぬイギリス人やイタリア人、ロシア人、ユダヤ人の顔同様によく分かるものである。少なくとも、いつかドイツの詩文はその多民族的放射線を一つの中心と一つの最大へとまとめて、詩的賢者の石を形成する — そしてすべての民族の詩作の独自性を最高の詩作へ溶かして神々しいものにするということはそれ故可能であり、そこへの道はあろう。

最後に一八〇九年の論考はまだドイツの政治的混沌について語っていた。 — しかしこれは今も存在する。分裂は解消せず、また分裂し拡大した。しかしながらサルタンや中国の皇帝の治下を除いて意見の画一性があるだろうか。両権力者の国家でのみ精神的血液、意見は動かず、固定し、腐って、ただ自壊する。数百人の論駁の匠のいない民主制は考えられない。ドイツは他ならぬ肉体的諸君主制と一つの精神的民主制の一国家連合ではないか、あるいは印刷紙上や飲食店の食卓での一つのアンフィクティオニア参事⁽¹⁶⁾会の下にあるのではないか。分裂に伴う錯誤や闇でさえも諸身分の底辺では霧であって、これは単に露で濡らし、楽しませるだけである。ただこれらが諸身分の高みを訪なうと、それらは昇る霧となり、これは雨や稲光をもたらした後でしか快晴とはならない。そのように偽善、吝嗇、憤怒、軽薄、性急、怠惰も王座にあって初めて有毒なものとなる。谷では害とならない植物が山々では毒を形成して、それでトリカブトは山の上で単に手にしただけで害するようなものである。

*1 ニーカンフ、『東インドの伝道の報告』からの抜粋。第一巻。

*2 ネーゲリによる『ペスタロッチの音楽の教え』。

*3 彼の『歴史試論』の中で。

*4 つまり一八〇九年。

*5 『ローマ法大全』 仕事始めの日は完成の日と見なされる。例えば未成年の遺言は、未成年の最後の日に作成されていても、有効である。

*6 III. 9.

*

薄明かり

1.

単一性と多様性

ドイツはこれまで大きな、小枝の多い藪であった。 — しかし通り抜けようとする者は誰でも藪を曲げつけ踏みつける。フランスは突き倒されたり折ったりされない木の幹であった。今ではフランスはインドの蔓植物[リアーネ]の木となっていて、これはその枝を下げてまた根としたり、上げて梢としたりするもので、小枝が多くまた同時に幹が多いものである。

(一八〇九年の多くの幹の代わりに一八一六年は単に多くの小枝を目にするのみであるが、しかしこれは一層密に絡まっている。復讐と貧困と不毛の絡み合いはひよっとしたら多くのより素敵な同盟よりも破壊に対してより強く抵抗するかもしれない)。

2.

ドイツ人の社交性

社交の場でドイツ人はめったに人間として、つまり社交人として見えず、立派な官吏や教授、兵士に見える。桶屋の職人が職人組合の掟に従って、木槌やハンマー、籐切りナイフ、その他の道具を持たずには三軒先までも外出を許されないように、我々も社交では我々の法学的あるいは医学的、あるいはその他の木槌やハンマーを手にしないうで現れるのを好まない、さながら自分の手職は何かそれで示すためである。それ故教授達にとって、教授より快い社交人はいなくて、法学者が — 法学者達にとって最良の愉快な人の一人であり — かくて各人が自分の生業の開いた櫃の前でそうなる。 — それ故青春の自由と限定性、執筆における我々の多面性と世俗性は長い仕事を通じて遂には人生の一面性へと成熟する。ちなみに目下我々に我々のクラブや協会、会館で共同体的調子を与えているものは、政治的居酒屋政談であり、第二にすべての諸身分からなる会議としてのクラブそのものである。

3.

我々

ドイツ人の魂は、ターレスによると人間の魂がそうであるように、水からできていないし、デモクリトスによるとまた人間の魂がそうであるように、火からもできていない。そうではなくて、ヒポクラテスによるとそうであるように、この両者からできている。炎と冷たさのこの混淆が — これに私は南北ドイツの地理学的混淆を加えるが — 我々をとて発展させ、高く成長させることができよう。

4.

ドイツの野党

ドイツほど自分自身に対して多くの真理を告げる国はない。というのはドイツの様々な小国家はその分裂のせいで自由な、互いに対立する諸野党を形成しているので、理由があって自分の臣下に真理を言って貰いたくない侯爵でも、このような真理を容易に近隣の国で印刷して貰える。この利点を私は結婚生活の同様な利点と比べている。というのは上品な年配の独身者は、唯の一つも非難の言葉を耳にしないまま、何年にもわたって欠点をか

かえてすべての社交の場をわたって行くのに対して、結婚生活ではどの女性も、最も美しいレディーですら、たとえ町中が男性のセイレーン達として自分に媚びようとも、少なくとも自分の夫は全く別の調子となって、いや時にはきつく説教し、怒鳴りつけるという幸運に恵まれるからである。これにはしかし妻も感謝で答え、彼女も夫に同じように非難して取り入る。かくて身分ある夫婦あるいは中産階級の夫婦は週のうち、独身者が年のうちに耳にするよりも多くの腹藏ないことを耳にすることになる。

5.

高貴な行状

ギリシア人の彫刻家達のサテュロス⁽¹⁷⁾はしばしばその内部に小さな優美女神を隠していた。目にとって益のないことではないが、時に今日の女達やフランス人は、いやドイツ人もこれを逆にして、その内部によろやくサテュロスの見られる優美女神となっている。

第二のその後の薄明

市民的レジオン・ドヌール勲章あるいは民衆の貴族

単に自らの意識の中だけでなく、他人の意識の中でも完全性を有したいという願望や衝動は、これまで他のすべての衝動を集めたよりも大きな奇蹟を戦い取ってきた。愛と同じように孤独な自我達をすべて外部の一つの精神同盟へと結び付け、そして自らの頭目あるいは良心のために第二の良心を求め、そして倫理同様に生と死を越えて死後の名声を欲するこの衝動の神聖さは、その期待のせいでこれまでこの衝動に付与されてきたよりももっと深い、もっと敬意を払った調査に値しよう。いかにこの名誉心はすべての衝動の中で倫理の間近な隣人であり、さながら外部への良心であることか、別の箇所であればもっと強く明らかにされよう。この名誉心は、内部への第一の衝動同様に、単に倫理的長所のみを称賛の陳列のために選んでいるのである、たとえこの見解に対して美や、分別、金、幸運の誇示は逆らっているように見えようとも[*1]。しかしこの源泉を更に調べなくても、この源泉が全歴史を通じて奔流として流れていることを見さえすれば、この源泉が大きな重い国家の機械を動かすためにまだほとんど導かれてこなかったことに驚かざるを得ない。考えてみるといい。軽蔑は内部の人間を下の方から車裂きにして、自らの軽蔑が加われば、生き続ける頭を車裂きの刑にする。一 決闘の名誉や戦争の名誉のせいで民衆は死ぬ、無実の災難であっても乙女達が恥を感じて即刻死ぬようなものである。一 ひょっとしたら、何らかの魂が温かいささやかな督励を通じてはなはだしい自己冷凍（自己炎上があるように）から救い出すことのなかった人間ほどにより暗く冷たい不名誉に沈んだ者はいないだろう。自分の公然たる名誉の破産を静かに耐えるには、ほとんど非人間的な深みか、あるいは超人間的な高みを前提とする。要するに、通常の人間の声の届かない、通常の人間からの二つの彼方である。それでも高みにいる神々しい人間は神人あるいは神そのものを自分の内部に有していて、この神が外的曝し台にいても内部の王冠で慰めてくれる。

最も長い民衆のこの梃子がなおざりにされていることへの驚きは、この梃子の力の時を考えてみれば、増大する。というのはこの梃子はほとんどなおざりにされていることを知らないし、すべての利己心を打ち負かさずばかりでなく、利己心より長生きをしているから

である。

財産欲でさえ時間をかけた豊かさで遂には山のような金の堆積の上に立っていると感じて、その堆積から長い黄金の川のカナン⁽¹⁾の地を眺めることができる。しかし名誉欲はいつでも新たに始まる。 — 一つの言葉の侮辱を受けると長年の光輝や名誉の宝は沈んでしまう — いやこの空腹は胃の死後も更に養分を求める。ヴォルテール⁽²⁾はミューズとの銀[金]婚式の五十年の記念祭のときに、それは彼がパリにいて身罷ったときだが、この凱旋将軍は自分の『イレーヌ』の上演中に、つまり彼の最後の悲劇（残念ながら彼と文芸にとって第五幕という次第になったが）の上演中に、各段ごとに良い意味で何が気に入ったか悪い意味ではどうだったか知らせをもたらすように手配をしたのではなかったか。

— そしてこの現象は侯爵達にまで見られ、彼らは自分達の宮廷や民衆の月桂樹の森に住んでいるけれども、それでも新たな外国での月桂樹を求めて手を差し出しているのである。

それに誰もが名声への志向を自他に認めるけれども、利益への志向を認めることは少ない。啓示そのものが自足している無限のものにとってそれでも我々の崇拜に対する喜びを与えている。

しかし名声のすべての効果も強力な尊敬の炎の魅力に比すれば何ほどのものであろう、愛する国家から、他の市民、愛好者にまさる国家の市民、愛好者として得る尊敬に比すれば。国家のすべての金も、国家が一人の人間を自己の貨幣に改めるより高い名誉の刻印に比すれば何ほどのものであろう。 — オリンピアの競技やローマの凱旋を見れば、国家の称賛の分配は何という効果をもたらすものか。 — すべての民衆に翼が生じた。軽やかに揺れるオリンピアの葉の冠は頭と足にメルクリウスの翼を付けて一民族全体を持ち上げた。

国家は目下、ドイツ人の多数、民族の名誉を掴むために、利己心の薄汚い操作の他に何をしているか。 — 悪名の処分である。月桂冠の代わりに首枷であり、オリーブの枝の代わりにはたきであり、死後のギリシア人の崇拜の代わりに不名誉な埋葬であり、曝し台が、自らの記念碑、恥辱の彫刻として立たせられる台座である。最高の政治家達は、高位の聖職者達のように、黒い礼服を着てより高度な煙突掃除人として目に見えぬ箒と梯子を持って通りを行き、国家を掃除して掻き落とすためにはたきと絞首台梯子をもって登る。要するに下剤が民衆の名誉の食料品である。すでに他の者達が国家に市民の中からは冷たい背の曲がった彫像しか残さない、あるいはもっと頻繁に、這いつくばった有毒な敵しか残さないこうした魂の破壊について十分に語ってきた。より高い身分の男は自分の位が奪われた後、少なくとも低い身分の中へ這い入って、そこでまた新たな同等の者達と生きていくのができるのに対し、名誉を奪われた卑俗な人間はもはや自分がまだ人間として歩けるような、人間で一杯のより低い地を見いだせず、垂直な人間の許での横たわった虫として留まる。

ローマの凱旋将軍に対して凱旋車には鞭と鐘があって[*2]、将軍はまだ一人の人間であるということ思い出させていた。この逆の目的のために多分説教者は顔を垂れて恥辱の柱に結び付けられた不幸な者に呼びかけたらいいであろう、そなたはまだ一人の人間である、と。名誉剥奪が勧められるのは単に、一軒の家で丸ごと不名誉な会議や民衆の部分をもとめて捕まえる、幸い刑務所を一杯にするように捕まえる希望のあるときに限られよう。というのは、そのときには、民衆の転覆によって諸党派の嘲りの名前は結局その党派の名

譽の名前、ワインのラベル、商標へと成熟し、例えばフランスのサンキュロットやフェリペ二世治下のオランダのグー[ゴイゼン、貴族同盟(乞食の意味)]の場合がそうで、(この両名前は今では党派はなくなっていて、名誉ではなくても流通する名前になっている)、それであらゆる種類の悪漢の閉じられた(いやつなぎ合わされた)社会、山鶉の列、あるいは民衆の中では、名誉の汚点は結局名誉ある句読点やアドレスに繁栄していて、それで鎖と鈴のこのようなサークルではまさに最大の悪漢がその不面目を通じて偉大な不名誉携帯者に代わり、会議はそもそも消極的貴族を形成するという見込みが生ずる。

しかし非の打ちどころのない民衆は国家にどのような処置を受けているか。 — 私が耳にし目にしている限り、国家の代理人達でさえ — 特に底辺の代理人、つまり警察や村の役人は — 市民に呼びかける際、名誉感情よりは名誉厚皮を前提としていて、所謂並の男に(しばしば並々ならぬ男に対する何という呼び方か)対して時に呼びかける様は、あたかもどの市民の顔、百姓の顔も、彼らにとって恥辱の絵や恥辱の言葉のための空白を有する古代ドイツの手形のようなもので、彼らはただ巧みにその空白を恥辱で埋めさえすればいいかのようなのである。かくて善良な市民は官庁や裁判所で、これらはただ市民の建築税や建築助成金でできているのであるが、自分が舗装道路上で仕返しをするであろうことをまさに甘受しなければならない。まさしく役人達は例の教授達に似ていて、この教授達は、自分達が最も略奪した本に対して、そのことを隠すために、最もものしるのである。ローマとフランス革命の下での高貴な言葉市民は我々の下では平民[*die Bürgerlichen*]という言葉に退けられている。

一体他に善良な哀れな民衆は国家の榮譽として何を得ているか、より高い身分の下では日々すべての肩書きがより高いものになっていき — 百ものリボン機械が勲章の綬のために稼働しており — どの高い身分も、至高の身分であれより低い身分であれ、同時に敬意を受けていて、貴族は誰もが平和時でさえ戦功を称えられ、学者ときたら学者共和国全体から書評で持ち上げられ、いや天文学上の年報で星空の金の本や銀の本の中に月の永遠の斑点⁽³⁾として記入されるのを目にするのに対して、まさにより大きな、より重要な民は名誉の刺激として、価値への鼓舞として何を得ているか、我々は皆尋ねたい。

差し当たりはまだ — イギリスの褒賞の羊、褒賞の牛の他にはない、と答えざるを得ない。というのはこのような動物は刀で屠殺され、早速銅版画に針で象られ、分冊のロイヤル・フォリオ判で出版され、その体重と脂肪が示され、かくてこの動物は紋章の動物として、自分を肥やした小作人を民衆全員の前で褒賞人間として高貴化し、自分同様に高く引き上げるからである。民衆は国家の榮譽を受けるが、短く後からのもので、それは単に亡くなって村で埋葬される時である。トラヤヌス帝が死後すぐに凱旋したように(彼の彫像が主要人物として行列で運ばれた)、あるいはタッソーが桂冠の一日前に亡くなったように、市民は通常弔辞の数日前に亡くなり、この弔辞が村の中の国家を体現する小さな集まりの前で説教壇からこの市民にオリンピア競技の月桂冠や榮譽の銃、すべての公の名誉を捧げて、かくてこの市民は、生きていた兵士でさえいつも、辞職すると、より高い位に上がるのであるから、それだけになおのこと「昇進」するのである。ただこの鼓舞の成果や長所はかくも遅れた称賛なので残念ながら現世よりは別世界で見られる。この怠慢によって国家が失うもの、これは計算できないほどである、まさに顕彰によって民衆は、別の、すでに月桂冠の下で育った身分よりも、熱く駆り立てられるのだから。学者の身分で

さえ例外ではなく、この身分は、学のない身分とは違って、称賛の考察で称賛の力を殺ぐ術を心の中に備えているのである。

民衆は顕彰に逆らったり顕彰を諦めたりしない、これは時代や世論を越えている精神と
いったものならばできることであるが。それ故この精神は、ローマ人が建築学的に有して
いた道、つまり徳力の神殿を通じて名誉の神殿に至る道をとるのに対して、民衆は逆の道
をとり、かくてまず民衆には仮象から実在が生ずる。それは残念ながらしばしば偉大な人
間にとって実在がまた仮象になるようなものであるが — それでこう言えることになる。
学者は時にその宝石に関してイタリア人⁽⁴⁾に似ている、イタリア人は宝石を目の前で
褒められると、国の風習に従って宝石を差し出し、贈るのである、と。これに対して民衆
の理想は称賛によって民衆の現実のものとなる。それは例えばルーブルが — 一七〇〇
年までは単に記念硬貨であつたけれども — ピョートル一世によって本当の長続きする
硬貨となったようなものである。より高い身分の者から特別な顕彰を奪っても、この身分
にはいつでも一つの顕彰が生まれついている。しかし民衆に顕彰がなければ、民衆はより
低く這いつくばったままである。 — どのような梃子で君達は一体貧しい大衆を汚れた
利己心から引き離し、太陽に向かわせようとしているのか、この大衆は祖国の名誉心から
離されると、外国の沼地ではどこであれ存分に釣りをし、捕まえようとするのである。高
利貸しに対しては紙幣は役に立たない、しかし爵位証は別である。称賛は穏やかな音色で
あるが、これが、脅迫が単に通常の荷を強いるよりも、もっととてつもない荷を運ぶよう
励ます、ちょうど重すぎる荷のラクダが最後にはもはや鞭ではなく、単にフルートの音に
従うようなものである。

民衆をさながら踊りの際の音楽のように、拍手して熱い動きに導く必要性を察すること
は、民衆を我々の絆のない疲れきった諸国家の中で導く手段を挙げることよりも易しい。
戦争のときフランス人はレジオン・ドヌール勲章で我々に先んじているように、以前は平
和な時例え(5)ば周知の薔薇祭やブザンソン近郊のサン・フウリウでの最良の乙女のための
道徳的祭りを通じて — またエルザスのブロッツハイムの牧場伯爵の選出を通じて等々
という具合に先んじていた[*3]。しかしこのような道徳的祭りの打ち立てる名誉の記念柱
はひょっとしたらより華奢な徳操、その報酬は自らの居場所であるもの、つまり心を暗く
し、冷たくするかもしれない。しかし国家が公に報いるべきものはまさしく公の功績であ
り、従ってまず国家に関する功績である。

ここで登場するのはとりわけ侯爵である。侯爵の王笏は、触れようとするものすべてを
月桂樹に変え、そのことで月桂冠を一つの収穫祭花輪に変えることができる。侯爵は町々
の全体に個々の功績に対して新たな民衆貴族を与えることができないだろうか。 — 日
本では一人の犯罪者のせいで路地全体が共に処罰を受ける、我々の下で戦争のとき個人の
過失のせいで村落が責任をとらされ処分されるようなものである。こうした一人の者の全
員への転嫁を報酬や称賛の場合にも応用するのがはるかに正当ではないだろうか。侯爵が
ある町全体あるいは村全体にただ一人の高い国家への功績を有する男性のせいで位と冠を
授けて、かくて一人の生者から貴族化された生者達の先祖を、つまり月桂樹園の栽培者を
造ったら、何という体や心が我々の下に集まることだろう。しかし諸政府は残念ながら大
衆の処罰を大衆の報酬よりも許されて益のあることと考えている。全員の顕彰は無顕彰同
様、役に立たないと反論しないで欲しい。ロシアではある戦いに勝った後、全軍に名誉の

綬が贈られる、しかしこれは国家の利となる。というのは綬を受けた者や勝利者は常に、綬のない者達に比して少数なので、彼らは十分に顕彰されていることになるからである。ポーランドではしばしば出征の際全軍が貴族化された。しかしこの貴族の多くの数、貧しさにもかかわらず、この貴族はそれによって名誉心を得て、この心は自分の出自の大衆を前にして、そして自分の加入した大衆を前にして残ったのである。このような位の褒賞や影響が多数のせいであつた下で、彼らは負ける以前すでに打ち負かしたのであり、勝つたのである。結局これらの紋章の価値が下がった後でも、昇進した大衆の中では、這いつくばつた大衆の中でよりも、効果は絶大である。それにこのように顕彰された町や路地、村落等の周りには、表彰されてない近隣や外国がまだ十分に残っていないだろうか。それに例えば貴族は貴族だらけになつても自負心が少なくなるだろうか。

ここでは貴族化を紋章学的意味で考えて欲しくない。 — 一人の侯爵が王冠をある町の市門に置くとか、毎年決まった日に町を訪れるといった約束をしてみるといい。すると月桂樹がすべての頭を越えてお辞儀をすることになる。 — 侯爵は名誉の宝角を手にしており、名誉の一滴のインクは侯爵と祖国にとって炎となるに十分な油である。 — ヴェニス⁽⁶⁾の貴族の黄金の本に多分ドイツの市民の銀の、いや鉛の本を綴じ込むよう試みて、それに然るべく記入し始めることができよう。

ちょっと昔のドイツの時代は我々が送風で行うよりもはるかに公の名誉の熾火を鍛冶のために焚きつけていた、皇帝の旅行とか — 職人の昇進とか他の肩書き制度 — 馬上槍試合 — 記念日 — 市民権それに時々素朴な表彰を通じて焚きつけていた。素朴な表彰の中には例えばこういうものもあろう、つまり貴族の出の婚約した娘は、ある皇帝がニュルンベルクの市役所に贈った女性の王冠の飾りを身に付けて、一週間毎日二時間ほど市役所で自らを人目にさらすことが許され、「王冠の花嫁」という称号を得たというものである。

現今では王冠の花嫁はもはや得がたいものであろう、すでに王冠の新郎というものが欠けているのである。

更に民衆の名誉のパレードの場が多様に考えられよう。例えば単にいつも侯爵達への拍手のために取っておかれる舞台上、ここでは芝居の侯爵達の下、本物の侯爵達が素手の拍手によって惜しみなく与える手に対する感謝を受けるのである。舞台は十五分でいいから冠を授けるエーリス[オリンピアがある地]となれないだろうか。劇場では単にいつも過去の価値が祝われるだけで、現に生きていて見つめている価値は祝われなくていいのだろうか。

更に言うと、ちょっと昔は風紀監査官、道徳捜査官、いや本来は不道徳捜査官が指令していたとすれば、これはひょっとしたら政府が善を年中の命令、日々の命令として前提としていて、単に悪のみを須臾の夜の茸、汚物の茸として書き付けていたからかもしれないが、しかるに我々は逆に肯定的道徳捜査官を任命するのであれば、そしてこの捜査官は蠅や密偵のようにくずを探すのではなく、むしろ蜜蜂のように蜜を探し、さながらそれで民衆の輝く行動の太陽位置表、星座表を作るのであれば、どんなものであろうか。このような天文学者は、自ら名誉の男子であつて、ひょっとしたら名誉の民衆を準備するかもしれない。

我々のブリュタネウム⁽⁶⁾は現在大抵ラムフォードの徳用キッチン、せいぜい宮内大臣の

食卓であるので 一 更にまた侯爵の顕彰というパレードの場、控えの間は、村では設定しがたいので、村にこうした名誉の神殿の小さな代替物を用意したらいいだろう。村は名誉の神殿のための建物をすでに築き上げて有する、つまり村の教会を有するだけに都合はいい。これまで村の教会は倫理的緊急家畜小屋として、懺悔の説教壇は罪人の耳のための曝し台として利用されてきた。教会の扉（神殿の扉）には称賛のお触れの代わりに命令のお触れが釘付けにされてきて、教会で名誉の床を準備しようと思う者は、横になり、死んでしまい、教会の床の下で床に入らざるを得なかった。しかし説教者は何と別様に、教会を偉大な祭日の時に、例えば元旦や収穫祭の時に、褒賞の百姓達の公の戴冠室へと高め、争いの教会から勝利の教会参詣者を解き放つことができることだろうか。公の顕彰の競争が村へ次々と聖職者や国家によって導入されさえすれば、教会での処罰する懺悔日の代わりにいつか教会の榮譽の日や精神的収穫祭を祝うことができよう。

しかし村々のために、つまり多数のために我々は何もしていない。

フランスでは公の金属製の祈念碑が同時に噴水として役立っているように、公の名誉の祈念碑は精神的命の水をすべての民衆に降り注ぐことだろう。

しかし榮譽のために我々は何もしていない。

我々がカピトリヌス丘やオリンピアの代わりに若干見つけるべきなのであれば、我々は孫達自慢を導入しなければならない。

しかし我々は先祖自慢のためにすべてを行う。

たとえ一人の上司もこうした一切を実行に値すると注目しなくても、それでも私は書き付ける。

私は一切を榮譽のために書いているのである。

*

一八一六年の朝の光

一 そして榮譽のために幾ばくかのことがなされた。民衆の犠牲的卓抜さは王座の称える表彰を得た。これは少なくとも幾ばくかのことである。間違っただ目標から反転しさえすれば、最小の、向きを変えた歩みでも正しい目標に対する倍の歩みとなる。しかし戦争のみが榮譽の床を作るべきではなく、平和も作るべきである。平和はもっと永く続き、従ってもっと多くこの床に値する者達を見だし輩出できるだけに一層そうするべきである。私は、我々は希望を抱いてよいと希望する。

*1 というのは人間の倫理的性質は、人生のすべての贈り物、偶然、不運を倫理的結果で、不運を処罰で、幸運を報酬でという具合に説明するという独自の魔法を有するからである。ある人が宝石を見つけるとする。するとこの人はこの幸運の多くを自分の分別のせいにし、この分別をまた生前の自分の初期の知られざる品位のせいにする。美しい女性は自分の外的美しさを内部の美しさの印、帝国権標と見なし、そこからすぐに飛躍してまた内部の美しさの報酬、凱旋車とも見なす。それ故愚かさに対して、それがあたかも原罪であるかのように怒るのである。

*2 鞭は奴隷の可能性を、鐘は斬首の可能性を指している。斬首の判決を受けた者は小鐘

を鳴らして、誰も自分と接触しないよう警告しなければならなかった。パンキロルス『遺物論』二巻本、Salmuth 編。一五九九、630 頁。

*3 三年ごとにただ最良の青年のみが — 二人見つかったら、より貧しい者が優先されるが — 牧場伯爵に、即ち沃野の管理人に選ばれ、花冠と飾りの帽子を得る。

薄明かり

1.

侯爵の寵児

国家の肢体のリューマチ性疼痛を寵児は — 疼痛は最初単に最も外部の民衆の部分で襲うだけで、その後戴冠の胃の許に近寄ってくるので — 自らの微光を発する宮廷の氷の島ではさほど感じない。寵児にとっては自らの上部で誰が苦しんでいるのかにのみ関心があり、自らの下部で誰が苦しんでいるかには関心がない。コーカサス山脈の二人の私の知っている大臣でさえ、しばしば自分達が庶民の涙にとって — 太陽は、あるいは元来太陽の従兄弟たる者[*1]はしばしば雨を降らせるので — 生石灰で一杯の穴となったり、あるいはまた溶けた銅で一杯となる時間を有していた。

かつては何人かの皇子誘拐者⁽⁷⁾がいた。しかし侯爵の心の許の家臣の盗賊はもっと多くを奪う。

2.

オリエントの将軍の杖[権標]

これは自分を翼で載せていく象蟻どもを司令したから、不滅の兵士達の象勲章に必要な将軍の杖であることを、またこれはまさに戦場のダイヤモンド坑から上がってきて、宝石の飾りで諸大陸を驚嘆させ、眩惑させる将軍の杖であることを — またこの将軍の杖は（盲目ではありたくないの）教師階級と生産階級を自らの奉仕の双子（奉仕の兄弟⁽⁸⁾）と、この左右の予備翼を（敵の翼兵がいらないためにむしり取ることになる）、要するに両階級を戦争の支部身分あるいは（馬の類似から言って）戦争一団の前につながれた一団と、つまりすべての国家に仕える者を兵隊に仕える者と見なければならぬ将軍の杖であることを君達はどうか考えるか。 — 私は、これが将軍の杖であることを君達はどうか考えるか尋ねた。 — 答えなさい。

3.

民衆の極性

民衆の運動や革命の際には政治家は、個別の力の男、炎の男の運動や革命の際よりもっと次のことに留意したらいい。つまり民衆はいつもコルクに似ていて、決して水の容器の中央に浮かぶことはないであろうということである。政治家は、一撃で引きつける極を反発する極に変える稲光の力を自分は民衆の極を反転させるために有していると知っている。

4.

ドイツ人の貧しさ

我々が若干また真の古代ドイツ人になったとしたら、この古代ドイツ人についてタキトゥス⁽⁹⁾は、「彼らは金や銀を有しない。神々の怒りのせいとか好意のせいとか自分は知らないが、陶器が銀の器と同等なものであって、彼らの取引は小さいので金よりも銀が好まれている」と述べているが、この類似性が見られるとしたら、これが証明しているのは少なくとも、一つの国で、スウェーデンに似て、この国がスウェーデン同様ソルボンヌのように最も貧しい家と自称しても、古代ドイツ人を支えられるということである。従って、一民族全体がかのちょっと昔の歴史的諸民族に昇格しているのを見ることになるとしても、つまり(歴史によると)常にかかなりの革命や征服を行ってきて、遺産として残すものが少なくなるにつれ、多くを[心豊かに]相続することになり、所謂最も貧しい民と称することになった民族の一員になるとしても、さほど余りに異常に嘆くことはなかろう。我々が古代ドイツ人よりも何か良いものに、つまり自分達の財産の断念によって世界と世界の財産とを征服した古代キリスト教徒にさえなるということは不当な要求と言えなくないが、それでも中世人の力と見解にすら達しないということには我々は恥ずかしく思うべきであろう。この中世人はその精神的軍隊を、つまり修道会を単なる無所有ということに武装し、それも前代未聞の無所有であり、その中の多くの者は金する触ってはならなかったものであり — これは今日我々が有するとき、誰も禁じないことで — それに大抵の者が何も自分のものと呼ぶことを許されなかった、すでに胃の中のものさえ自分のものと呼べなかったのであるが — 他方我々は我々の食べたものをすべて勝手に我々のものと呼んでいるのである。 — それでもこれらの裸足の軍は世界を支配した。我々はこれ以上のことをなすように要求できようか。

*1 周知のように東洋の君主達は太陽の従兄弟と自称する。

第三のその後の薄明

将来の学問の蛮行の恐れについて

我々が現在、(ダヴィンチによると)頭をいつも若干傾けている古代の彫像に似ているとすれば、少なくとも彼の述べた別の特徴とは似ていたくないものである。つまり我々は右側を覗いているように見えてたくない。言わんとするところは、我々は少なくとも他人の影にのみ恐れを抱き、我々が我々の冥府の先駆けの影であるかのごとく自らの影に恐れを抱きたくない。ヘルダー⁽¹⁾の述べていること、つまり「自由がギリシアでなくなると(言葉と気候、民族の守護神、能力、性格は残った)、学問の精神は消えたようになった、このことを我々が我々に関連付けようとするれば、第一に自由を民主制と、第二に国々を諸地方と取り違えることになる。勿論真の専制の王座は磁石の山で、これは人間を結び付けるすべての鉄を国家から引き抜いて、かくて自らは釘で覆われて、船をばらばらにするものである。 — しかしまず自由は本来学問と芸術の神的母ではない。スパルタはただ一人の詩人、アルクメネス⁽²⁾を生んだ。アッティカはペルシア戦争の下ではなく、ペリクレスの下と三十人の僭主⁽³⁾の下で最も頭脳が豊かであった — ローマが最も頭脳豊かであつ

たのは、その最盛期ではなく、皇帝達治下とその直前であった — 北アメリカやオランダ、スイスはその共和主義的自由からドイツや以前のフランスほどにすぐれた思想や詩文、絵画の作品を生み出さなかった。

イギリスにおける所謂革命は本の世界にとっての革命ではなかった。更にこのより自由な国が発見しているのは単に海上だけであって、より定められた国ドイツほどには芸術の内部で発見していない。

ヨーロッパにおける学問の再生は新しい自由という気付け酒精によって目覚めたものではなかった。ルイ十四世から十五世へと続く王座の周りではより自由なドイツや後年の束縛のない革命時よりも多くの天翔る天才達が飛んでいた。これは自由が学問を生むよりも、むしろ学問が自由を生むのであると証している。

要するに学問や芸術は花であって、これはそれ自体 — 奴隷制のひどい霜の夜は例外であり — 我々には未知のそのための条件が満たされるとき、どのような別の統治形態の季節の中でも思いがけず花咲くのである。我々は花粉の飛行や花粉を運ぶ蜂の飛行や別々の雌雄を受粉させる風の動きを計算できないからである。例えば一人のカントが生まれると、新しい哲学世界が続いて生じて、それぞれが相手に最後の審判を下す。イギリスのアンナ女王⁽⁴⁾の下ではどうしてすぐれた頭脳のこれまで例をみない同胞共同体が生じたのか。 — 何故ナポレオン一世の下では同様の共同体が見られないのか。 — このことを説明しようと思つて、単にこう言うだけではすまない。つまり行為は言葉や詩を窒息させ、穂[実]は花を窒息させる、勝ち進む行動的民族は、現在に酔って、穏やかな芸術形成に必要な距離や冷静さを有しない、そしてそれ故稲光し雷鳴の轟く現在は単に雄弁さを鼓舞するが詩文を鼓舞しない、と。多くの真実がたとえ含まれていようと、単にそう言うだけではすまず、もっと事情を説明のために斟酌しなければならない。例えば全帝国に対する首都の利己的關係である。というのはきっと最良の詩はいつかパリからではなく、田舎から生まれるであろうからである。造形芸術に関しては、それらに欠けているのはただ平和だけで、これはアミアヌス・マルケリヌス⁽⁵⁾ (X X IV.6.) がペルシア人について言っていることを若干それらに応用してみたときの話で、つまりペルシア人はただ戦争に関する作品のみを作ってきたので、造形芸術では若干遅れをとったというものである。

フィヒテ⁽⁶⁾も、この一つ目のポリュフェモスで、その上ほとんど回らない目の持ち主も、 — 蛮行の可能性に対して恐怖を抱いている。他の作家達も、侵攻してくるタタール人やロシア人がヨーロッパの学問分野でまき散らすであろう蛮行に対して、不安の余り狼狽して立派な紙に印刷している。しかしそんなのが人間である。大きな見知らぬ出来事の際には人間はいつも自分の最後の審判を恐れる。メキシコ人がヨーロッパ人の上陸のときに世界の終末の先駆けが来たと思つたようなものである。例えばドイツへのフランス人の上陸の際には例えばこう考えたら良からう、つまり我々は共和主義的自由を — これは存在しなかった — 専制的隷属と取り替えたのではなく — この隷属は自らがそうでない国から来るはずはなくて、 — そうではなく、単に多かれ少なかれ適当な君主制を多かれ少なかれ適当な君主制と取り替えたのである、と。この支配者の交換はヨーロッパでは何としばしば見られたことか、それに文化が殺害されることはなかった。というのは — 例えばギリシアでのような — 統治形式の交替は — 単なる支配者の交替、逝去の場合と同様に戦争の和平条約締結で定められる支配者の交替とは幾らか違うからである

[*1]。

タタール人に関しては — ロシア人については言うまでもなく、 — 彼らの征服が続いても、その侵攻は単に昔からの歴史的命題の[オペラの]下稽古となろう、つまり無教養の民族は常に教養ある民族によって吸収されてきた、教養はいつでも最も強力な、民族の分解手段だからという命題である。というのはこれがそうでなかったとすると、世界史は圧倒的数の野蛮人で始まっているのだから、何故圧倒的数の者が最後に少数者の者に負けずに勝たなかったのか、何故持続的に教養ある民族の代わりに無教養の民族が征服し、自分達の像を刻印していないのか知りたくなるからである。ここで私は古代人が有しなかった梃子、つまり教養の永遠の鉛錘、即ち製本機の締め木のことは一顧だにしなかった。その上目下ヨーロッパではまさに教養ある民族のために多数の者が、そしてこの多数の者のためにまた圧倒する芸術の力が戦っており、この圧倒するものそのものでローマ人達は勇敢な数の多い西南ドイツ人に勝利を収めたのであった。 — しかしまず巨大な国ロシアに君達を手本とさせて、巨大さを教養と全能的に一致させて君達を襲うようにさせるがいい — と言われるとしたら、...私はこう答えよう。その場合ロシアは教養を持参することになって、従って教養を奪わない、と。光が（幸運や商業同様に）民族から民族の間を行き、次々に渡っていても、しかし少なくとも薄明を痕跡として残さずには一つの民族から去っていくことはないとしたら、どこに大きな不幸があろう。

ちなみに、君達ドイツ人よ、我々は学問の最も悲しい場合にさえ、我々より何か別のものを当てにできるのである。粗野な蛮行や繊細な蛮行で学問のすべての栽培地が踏みつぶされたとする、そしてその硬直した根の上に厳しく鋭い冬の夜がのしかかるとする、しかし別の半球では一つの太陽が昇り、新しいドイツを照らし、結実させ、この新しいドイツが古いドイツに種子と春を返すことだろう — つまり北アメリカのことである。北アメリカは、我々に地理学的位置や温暖さで似ているように、自由の感覚や人間の種類で似ていて、いや部分的には我々自身が移民しているが、我々の歴史的芝居を再度行うことになろう。つまり向こうの半球でまた北方は南方を次第に攻撃して、若返らせながら蘇らせ、遂には北方が十分に力強く古い世界を自分の植民地に変え、しかし自らは富に囲まれて、ヨーロッパがこれまで植民地に対して行ったよりももっと穏やかに古い世界を扱うだろうというものである。

そもそも北アメリカは奇妙な国である、すでに地理学的予兆に満ちている、我々と同じ緯度にありながら晴雨計はいつもより高く示すし、その木々や花の生長は我々の許よりもっと盛んである。 — その高い自由度を象徴していることとしては、例えば、北アメリカでは余りに大きく育っていく田舎はどこも自らの立法権を強いられて独立するし、最近では⁽⁸⁾諸都市は署名して、イギリス製品の断念を自発的に定めたものである。我々は断念を、困っていても力でもってしてもほとんどできない。

民族の落下は個々人の落下のようにはいかない。個々人は地面に落下した後、死の塵へと消えてしまうが、民族の滝はしばしば奔流の落下に似ていて、奔流は途中でしぶきとなっても、下の方では新たな河床の中で再び新たな奔流にまとまるのである。

*1 この箇所の穏やかさは皮肉ではなく、余りに大きい希望と、フランスのトップによつ

て穴を開けられ搾り取られたドイツの国々について知るところが余りに少ないことからきている。ちなみに一八〇九年とそれ以降になおナポレオンの同盟の文書について最良の法学的公法学的論考が書き続けられ、有効な結論が導かれたが、その結論は文書そのものが実現しなかったためにそれだけに論駁しがたいものである。かくてリヒテンベルク⁽⁷⁾は、夙に消えているが、しかしその輝きが我々の許への長い途上にある恒星に関して、天文学者は多分何年も計算し観察しながら仕事を続ける可能性があるとしている。

*

ドイツ語についての補遺

先に述べたポリュフェモス[フィヒテ]は更にまだ、ドイツ語に関して、副次的不安にかられている。この点でも、恐怖に対する私の嫌悪、つまり恐怖は希望よりも大きな嘘をつくのであって、ただ恐怖の嘘はこの嘘についての喜びの故か新たな恐怖故に余り記憶に残らないのであるが、オルガン同様に人間の声には顫音を響かせるのが最も美しいと考える向きの方々に私の嫌悪を一言語るのを許して欲しい。まだどの言語も単に征服者達の命令で持参された言語に席を譲ったことはない。このことはすべてに打ち勝っているローマ人や — ノルマン人に征服されたイギリス人 — それにドイツ人の歴史が証明していることであり、ドイツ人は以前すべてのヨーロッパの国々にあふれるほど押し寄せたのであり、征服者達は皆、攻撃された国々に言語以外の他の荒廃をすべて残したのであった。戦争上の優位さによってではなく、単に精神的優位さによって、兵士によってではなく作家によって一つの言語は別の言語を圧倒するのである。我々ドイツ人が、そう見えるように、若干の正当さをもって、自らをホメロス達やプラトン達と見なすことは許されなくても、当世の現今の芸術や学問のホメロス主義者、プラトン主義者と見なすことが許されるならば、そして我々は惑星の水星や金星に単に小ささの点で似ているばかりでなく、我々の(ミューズの)山々の険峻さの点でも似ているのであれば、我々の言語は、たとえフランス人達が急進的改革者としてそのミューズの丘を段々に積み上げようとも、フランス人達に圧倒されるという心配を実際抱く必要はない。彼らの文学ですら我々の文学に屈服して退場することはないのであるから、ましてや我々の文学が彼らの文学に敗北して席を譲ることはない。彼らの文学は — ヴォルテールや両ルソー、ディドロ、メルシエ、スタール夫人、それに革命以来 — 我々の文学が彼らの文学から離れた分とほとんど同程度にイギリス・ドイツの趣味に近づいているだけに尚更である。ただ近隣の者達のみがお互い代わる代わる言語を偽造する。例えばフランス系やイタリア系のスイスやエルザス等々である。中世においてラテン語が国家言語、祭壇言語、講壇言語としてドイツ語を追放せず、 — ポーランドではどの役人も使う[*1]ラテン語の他にポーランド語が、ハンガリーで他にハンガリー語が残っているように残っているのであれば、更に数百のフランス語や国家の事務が、かくも強情な強力な言語に花火のごとく投げつけられようと、この言語をもっと頑なに、もっと荒々しいものにする代わりに破壊してしまうことが考えられようか。何年もフランス人が舎営してもドイツの町や村でドイツ語を滅ぼすことがなかったようなものである。我々是我々の熊に言語を[*2]、我々の性質に反して戦争音楽に合わせて若干のカドリルを踊らなければならないからといって、忘れてしまいかねないと案ずるには及ばな

い。我々は森がなくなっても熊のつぶやきを続けるであろうと私は期待している。

*

一八一六年の朝日

この考察を私は、当時フランス人の締め付ける空気の中で強引に自らの窒息から自由になろうとしていた働く胸に対する思い出の溜め息と共に行っている。森は、小枝を動かすことなく、ざわめく。当時ドイツ人にはその程度のことが許されていた、外的動きと声を欠いた内的なそれである。それでも苦しい希望の中でさえ私は正しかった。というのは冷たく熱い理念のモロク[子供が犠牲に捧げられた]の絶えず続く強制的な人生はたとえ古い収穫や新しい苗床を踏み潰してしまうとしても、種子そのものを潰すことはできないであろうからである。モロクが死ねば突然雪の覆いは消えよう。ひょっとして一世紀早かったら、それはドイツ人の文学的葉芽の時で、その霜の被害はもっと大きかったであろう。しかし詩作し花咲く言語は、数十年程度では、ギリシア語がかくも長くかくも嫉妬深く低頭するローマ達からされたほどにも圧迫されることは少ない。 — かくて全く摂理がすべてを父親らしく導いたように、我々の言語の危機はその一つの新たな幸運となった。というのはベルリン⁽¹⁰⁾でも — ここはドイツの自由のより気高いフリーメーソンの母胎のロジであり — 古代ドイツの詩文の復活を仮死ドイツの蘇生のために行い、その火を点したのであるが、かの復活そのものがかつては悲しい諸時代の解毒剤としての一作品であったからである。最古のドイツ人はいわば、キリストの死の許、自らの墓地から出て行って説教する復活者達であった。かくて民族にも園丁の規則が適用される。つまり花咲こうとしない木々は強く傷つけると花咲くように強いられるのである。

*1 ソビエスキーの『Coyer 神父の話』。

*2 ベルリンの『アカデミー年報』の中である匿名の者がこう主張している、我々の言語は大抵熊の声調から借りられていて、馬の声調からとは最も考えにくい — カール十二世は馬からとの意見である⁽⁹⁾が、と。Steeb、『人間について』1078 頁。

薄明かり

1.

民族の卒中

ドイツの国体は卒中に襲われたと人々は叫ぶ。結構なことと私は言う。それでは肢体は、卒中者達がそうであるように、単に動きを失っただけで、感覚は保っている、と。君達には短い麻痺の方が民族の無感覚の穏やかな冷たい焼却よりも好ましくないか。

2.

外部への叫び声

まず外部への叫び声は、代わりに一層大きな、内部への叫び声を起こすために止めるべきであろう。外部への叫び声は決して収穫はないが、内部への叫び声はひょっとしたら幾つかの点で収穫があるかもしれないからである。第二に、より穏やかに小さな声で叫ぶた

めに次のことを考察すべきであろう、つまり現在はまさに、敗者に対して余りに大目に見るという不作法を有する、過去に勝者に対して余りに寛大であるという、例えば勝利の抜け道を許すという不作法を有したようなものである、と。かくて勝者の軍紀も敗者の軍紀よりも厳しい裁きを前にすることになる。第三に、必ずしも墮落した首都をより純潔な田舎町と混同しない、そもそもパリ人をフランス人と、いや新聞記者をまたパリ人と混同しないのであれば、はるかにより公正で穏やかになることだろう。第四にこう考察しても何の害ももたらさないだろう、つまりある君主は現在 — 本来は単に一つの同胞国家にまとまるべきである地上の諸国家という互いに敵対する立場にあって — 自国のためにはなはだ多くを、少なくとも諸国を犠牲にしかねないが、この諸国はまたその君主を犠牲にしたがっている、と。そもそも戦争と、従ってまたその講和は二つの犠牲の祭壇の間での一つの籤引き以外の何ものであろう。 — これらの真実に見られるその古い年齢を許されたい。というのはまさに青春は確固たる情熱としてすべて年齢を見誤るからで、しかしまさにそれ故一層年齢を必要としているからである。

3.

著者達の男らしさ

目下ドイツ人でないことを恥じるドイツ人はほとんどいない、そうではなくインク瓶として涙瓶を置いて、それにペンを浸して、世間に対して(それどころかすでに表題紙上に)、自分があれこれの「人生の最も恐ろしい年あるいは瞬間に」搾り出すことになった不安の汗の玉を披露している。君達は一体 — 君達の女々しさよりもむしろ — 女々しさを公然と告白することを恥ずかしく思わないのか。古代ローマでは男ならこのようなことを決して告白しなかったであろう。スパルタでは愛する死者に対してすら公の場で泣いてはならなかった、例外は国王の死体の場合であった。毅然とした初期のキリスト教徒や — 古代の哲学者 — ローマ人は(更に力強い北アメリカの蛮人も)カルトウーシ⁽¹¹⁾ユの原則を有していて、この者は拷問に耐えられない者を自分の仲間に入れなかったのである。英雄は多分自分の傷跡を見せるだろうが、ただ乞食だけが自分の傷を見せるのである。

4.

我々の発心

すでに長いこと我々に対してもはや教会は説教せず、せいぜい教会の墓地が説教している。しかしそれでも我々がいくらか帰依するように、運命は、最初の司教や聖職者をドイツへ送り出した同じ国 — つまりフランスから、軍の教会パレード、喪のオルガン[発砲機]、聖堂内募金と共に戒律派説教師、十字軍派説教師、名誉の勲章を有する教団の人々を送りつけていて、 — それで教会はまた容易に説教をし続ける教会墓地となっている。さながら最初のキリスト教徒の地下墓地(カタコンベ)での更新された礼拝である。

5.

ドイツ人の筆力

実際羽毛[羽根ペン]は — 書齋同様軍務局でも会計局でもそれで飛ぶために、これまで我々に欠けることはなかった。しかし飛ぶためには羽毛は翼骨に収まっている必要があ

ったであろう。

6.

ドイツ人の軍司令官の年齢について

我々ドイツ人は残念ながら、次のことは否認できないとしても、つまり我々の将軍は、灰色の髪になるまでの奉仕という蝸牛のステップではなく、功績という鷲の飛行で昇進するというフランス人やそれどころかローマ人の将軍とは似ずに — 老人達の参事会から選ばれ、それで彼らはあたかもかの山岳の長老^(1.2)に似ていて、その長老の殺害の命令はいつでも、いかに離れていても実行されたという具合であるとしても、他面ではまた次のことを否認したくない。つまり我々はより下の方で、即ち下士官達、つまり中隊将校から連隊本部までは勿論、フランス人達のはなはだしい勝利を得る原因となったのと同じ、戦闘的若者に対する敬意と選出を昨日今日になってようやく得ているのではないということである。というのは市民出身の者を除けば、否認できぬ事実として挙げられると思うが、我々は実際頻繁に若造の貴族を重要なポストに就けているのである。いや時には何の知識もない青年貴族を、必要な年齢に達しさえすれば、任用している。というのは普通法学者の場合意地悪さが年齢を補完するように、ここでは逆に若さが戦場の意地悪さと知識の代わりとなるからであり、かくてこれは我々の軍服、その外套、甲冑を生来の子羊の皮の襟飾りや縁飾りで飾るようなものである。

貴族を戦闘や兵士のために用いたいのであれば、勿論その巢から取り出すのにどんなに若くてもほとんど構わない。今日の生活様式の暑い気候の中では貴族は卑俗な人間の半分ほどの時間しか元気でおれないであろうからである。いやまさにこの早期の凋落で貴族の大部分は目にとって、曲がった木々や倒れた家々、類似の廢墟で一杯の中国の人工庭園の景観を呈しているのである。それ故若い貴族は古い時計に似ていて、これはいつも「昇進する（進む）」のである。しかしまさにそれ故これは、若い時から更に老年にまで多くを要する勇敢な市民階級の者とは事情を異にする。それ故刑吏がまずその処刑の数によって名誉を得、ドクトルとなるように、市民階級の者は死者で一杯の多くの遠征によってまず爵位を得、将校へと育ち、彫られるのである。ここでもまたその理由は若さを軽くみているからではなく、先の理由のせいであり、それにまた貴族の数の多さのせいである。貴族は市民階級の者のように、自分の生存の糧となるものをめったに学んでこなかったし、貴族の生活様式は必ずしも糧食を供給するものではない。

筆者が時に、打ち負かされる前の若い将校達と話したとき、将校達のこの上ない戦争の雄弁さと敵への軽視に気付いて満足したものである。さながら真のヘラクレスであったが、もっともダイダロスの作ったような[*1]ピッチで出来ていて、従って戦火では容易に走り去っていくものである。本物のヘラクレス^(1.3)も周知のように火の中で遁走してしまったのであった。このような炎に満ちたまことの雄弁、このような勝利の予言は年輩の者や卑俗な人々の場合風に稀であり、それ故若い人々の場合得がたい。

ギリシア人は以前ガリア人とドイツ人を同一に見なしていた、少なくとも戦闘的若者をこのように評価する点で我々はガリア人と混同されてよい。我々は（ただ述べたように将軍達は例外であるが）彼ら同様古代のカッティー人[古代ゲルマンの一部族]に似ていて、タキトゥス^(1.4)はカッティー人が勝利への信頼を軍に置かず、司令官に置いていた点を珍し

い洞察として称賛している。これにはタキトゥスの別の箇所がよい説明に適していて、つまりドイツの侯爵達あるいは司令官達は自らの名声のために、一方軍隊は自らの司令官達のために戦ったとされる。フランス人達は正當にまた幸運に、最大の分別はきっと一人の頭脳の中に収まっているであろうが、勇敢さはしかし数十万の拳の中に収まっているという前提に従って行動している。

勿論我々は、たとえ多くの全く若い貴族を前面に配置していても、これまでのところ、フランス人が若い市民階級の将校達や將軍達で勝ち得たものすべてを必ずしも勝ち得ていない。しかしそこから得たものとして我々は小さな理由や諸力によって — ここではまさに力のない疲れ切った将校達のせいで — 最大の出来事、つまり敗戦と諸国の転位とが生じているという経験の他に、ある種の希望を挙げることが許されよう。つまり最良の侯爵達は単に災難によって育てられたとするならば、同様に多くの将校が戦場での強い災難によってたくましくなって帰還し、この者達からもっと期待することができるという希望である。

7.

慰め

帆を失った国家の船は、だからといってまだ錨まで失ったわけではない。

8.

兵士達の苦痛

本物の兵士達よりもこれは長く続くだろう、歯よりも歯痛が長く続くようなものである。

9.

民族の糸杉

糸杉の下に滞在すると、癒され強壯にされると古代人達は信じていた[*2]。それでは古いドイツの墓の、いや新しいドイツの墓の糸杉の下へ行くがいい。

10.

人類

地球全体が魂の夜に包まれたことはまだなかった — すべてが転倒したら地球に救いようはなかったであろう、 — そういうことはなく、教養の天の太陽は、長い一日の後、北海の海に本物の太陽が沈むように、波のところまで沈んでいくと、脅威にさらされた夜から思いがけず昇ってきて、新たな朝が真夜中の後、花咲いて出現するのであった。

11.

災難の価値

時に民族も一人の人間同様に、自分は幸い災難に遭ったと言えたらいい。不運な民衆は奔流に似ていて、これはその泥土をせき止める角張った岸辺の間を通り抜けるときにのみ落とすのである。

12.

静止の違い

火山の噴煙のように偉大な男は青春の間天の方に昇る、それから噴煙のように単に水平に進んでいく。そのように諸民族も興り向きを変える。しかし人類はそうではない。横たわる民族の上により高い民族が重なる — 巨人ども⁽¹⁵⁾は火山で覆われる — 塚は次第に高くなる、かくて個別の沈下から一般の隆起が、沈殿から山脈が生ずる。

13.

偉大な行為の人間の誤認

彼らは時代の前の青いエーテルの中に崇高に山脈として立っている。しかしまさにそれ故、低い民衆の床から彼らへと飛んで行くすべてが彼らの誕生と見なされる。そのように高い山々は煙を出すように見える。しかしその見せかけは、下から山の方へ移り、横たわる雲から来ている。 — ただ谷に霧が生ずるのであって、山ではない。

*1 レッシング著作集 十巻。

*2 プリニウスによる。

II.

帝国城塞ツィービンゲン包囲の間のネーポムク教会への私の滞在

帝国都市は小さくなるほど、一層秘密を好むようになる。全く小さな帝国村となるとその存在することすら白状しない。ひょっとしたらツィービンゲンも — これはクロッセン圏のツィービンゲンとは別なのであるが、 — 敵に対して手遅れの画策をする者は、容易に余りに早く敵に動揺して逃げると信じていたのかもしれない。要するに、単に記念の年にのみ開けられ、すぐに閉められるローマの記念門⁽¹⁾同様に、国の内外に対して元老院や軍人がかくも閉鎖的でなかったら、私は門が閉められる前に、差し迫った包囲について若干知り得ていて、馬で去っていたことであろう。しかし私は各旅行者同様に留め置かれて、そこでこの論考だけを得ることになった。

すでに公の新聞で知られている発端⁽²⁾というものは次のようなものであった。帝国小都市のディープスフェーラは — これはマイセンの村とは違うが — ツィービンゲンと共に境界に共有牧場を有していて、そこで両町は鷺鳥の放牧を許されていた。不幸なことに五月四日この境界沃野、共同牧場に強い霰が降って、四十羽の雌雄の鷺鳥が亡くなった。これには稲妻に倒れたディープスフェーラの鷺鳥番は数にさえ入っていないのである。ツィービンゲンの鷺鳥番は愛国者としてすべての死せるものをそのままにしておき、いつもと同じ数の生けるものを城塞に追い入れた。ディープスフェーラは、一五〇人以上の住民の町であるが、放牧同権のこのような侵害に黙って耐えることができなかった、これまでの権利を守ろうと思ったのである — 外務担当の大臣が最強の全権と表現を携えて城塞に送られた — 鷺鳥の半分あるいは同権が主張された — 慰謝料が要求され — 突撃兵の脅迫がなされた。 — しかしツィービンゲンの人々は、城塞で弾と剣に備えていて、彼らに共同番の次の陳述の記録だけを送ってきた。つまり霰は単にディープスフェーラの鷺鳥にだけ当たったのであり、これは、と彼は添えていた、亡くなった鷺鳥番も幽霊として裁判に立ったら、誓って言うことだろう、と。更に町と地方の物理学者の一通の物理学的証明が同封されていて、霰の雲は地上全体を襲うことはなくて、いつも単に線條をなしており、従ってその横では鷺鳥の足の幅の分当たらないものは倒れる必要がないのであって、この点から、なぜ問題の雲は単に敵側の鷺鳥だけを撃ち尽くしたのか明らかになるというものであった。

両国の間の戦争が決定された。そして亡き鷺鳥は、かつてカピトリヌスの丘の生きた鷺鳥がそうであったように、戦火を焚きつけた。というのはディープスフェーラも軍の数ではツィービンゲンに勝っていたけれども、ツィービンゲンは一つの城塞を有し、更にその頂点に大胆で有能な司令官「日々死を迎え我が生は」を有していたからである。これは敬虔な、かなり短縮された[*1]、それでも長い名前であるが、この名前を彼は分離派⁽³⁾[ドナトゥス主義者]や長老制主義者の習慣に従って、その長さにもかかわらず、上手に称することができたが、それは司令官の言葉は簡潔を要するが、司令官の名前は簡潔を要しないからである。包囲された者達も門を閉めさえすればよくて、そうなる誰も少なくとも — 外に出られなくなった。単に秘密に徹するために — すべての城塞の原則に反して — 更に一頭の象と一人の書籍商が閉じ込められた。

後者はペーター・シュテックライン⁽⁴⁾と言って、一五一三年ライプツィヒの最初の書籍商であり、一〇二歳のときようやく身罷った周知のペーター・シュテックラインの末裔と

称していた。ひょっとしたらライブツィヒのドイツ人社会はドイツに関して、あるいは当地の書籍組合はその最初の所有者、書籍商のアダムに関して、これらが即刻彼の出来事や子孫についてもっと詳しく発掘し、継続的研究でそのほとんど地下で化石化した系図を明るみに出そうとするならば、若干の功績を立てることになるかもしれない。そうしたら新たなペーター・シュテックラインが本当に自称するように系図の頂点に梢として存在するか分かるであろう。

さて新たなシュテックラインは見本市の後、最良の執筆町、商業町を歩いてちよつとした遊山とビジネス旅行をしようと思った。金や作家、買い手を仕入れるためであったが――そのとき悪魔が永遠の自然科学者として彼をクワガタ虫のように城塞に木釘で留めた。シュテックラインは真に教養ある男で、印刷の知識を大いに有し、よく選んで原稿を出版し、著者達を通じて学問をすべての見本市分だけ自分より先に豊かにしてしており、確かに博識家で、書籍商兼書籍取次業者であった。彼は、私に関しては、――書評紙で私について言われたことのほとんどすべてを読んでいたので、喜んで私に接近してきて、一緒に閉じ込められて幸いであると言った。それに彼はこう付け加えた。一面では確かに短い包囲を自分の『包囲雑誌』のために利用できるが――（彼はつまり現在ファッション雑誌、棺桶雑誌や他の雑誌があるように、そして書籍商の許ではほとんどどんな雑誌も手に入るように、包囲雑誌を出版していた）。――他面ではしかし、旅の途中で引き留められている初心者、馬と共に、自分の雑誌の最良の包囲の記事によっても値引きばかりされてほとんど腹一杯になれない初心者として――自分は私の記事を欲している、と。私はポケットにも頭にも記事を持っていなかったもので、頭を振った。その後で和らげるために冗談めかして言った。私が話の中で何か重要なことを述べたら、それを拾って、売りつけたらいい、と。しかし後に私は、彼が本当にポケットの中で右手⁽⁶⁾を働かせて、自分の包囲に味付けをしようと思う機知を書き留めようとしているのに気付いた。

さてこの包囲そのものが始まった。ツィービンゲンの秘密委員会は、城塞は五月八日正午に包囲攻撃されるであろうと明確に知っていた。この周知徹底によって、このディープスフェーラ人は例の者達よりもより純粋にドイツ人的であったことを示している。というのはサモイエード人女性は小鐘を身に付けていて、両親がこの女性達の歩みや滞在のすべてを知るようにしているように、ドイツ人は同様に自分達の行軍を敵に鈴で知らせ、敵が最初に速やかな和平を講ずるようにするからである。いや大司祭達が鈴を上着の縁に付けて至聖所に行き、その歩みをまさに披露するように、同様に音高くドイツ人は会議に入り、会議から出てくる、もっともそれは自分達の歩みよりは事の進行を告げるためである。

――今や真面目な防止策が講じられた。そのためには滑稽な対策もまことに役立つものである。愛国主義が蔓延した。――夜警人は辞職した、彼の言うには、爆弾のお蔭で自分の仕事は邪魔されて、飛んでくる爆弾で盗人は萎えた夜警人の場合より早く追い払われるであろうからというものであった。――極めて危険な、しかし戦争では許される槍が求められた、つまり鈍いさびた槍で、これには突かれないものである――すべての、大昔の包囲で建物内に眼球のようにはめ込まれていた砲弾が取り出され、新たに発射されることになった――城塞のすべての射的の火薬はカルタウネ砲の火薬に混ぜられた、カルタウネ砲用がもっと必要であったからである――厳寒の冬であったならば、金属製の⁽⁷⁾大砲の欠如故に容易に氷製の⁽⁷⁾大砲を、穿孔して作っていたことだろう。というのは若干

の予備の大砲をその直前に司令官が、抜け目ないことに、ディープスフェーラ人達にだまして押しつけ、大量の樽の小麦と引き換えに売っていたからである。城塞では矢は欠けても、食い物が欠けてはならないのである。― 最も弱い門の上に（別の門は上手に隠されていた）急いで小さな犬小屋が敵に対して一つの扉を、町に対して一つの扉をつけて造られ、その中に半ば狂った一匹の犬が一群の健康な犬と共に入れられた。この犬達は包囲の間互いに怒ってかみ合い、それで狂ったこの副守備隊が扉から出て突撃してくる敵に飛び降りる手筈であった。アメリカではスパニエルの健康な犬ですら曲解されるので、これが戦時国際法にかなっているか、私は決しない。― 舗石は幸い引き剥がす必要はなかった、一つもなかったからである。それに肥料も運ぶ必要がなかった、それはすでにあったからである。どの市民も家の前にそれを置いていた、消化された干し草で春を思い出すためであった。― 司令官は最高度に鼓舞しようとして、守備隊を目の前に揃え、守備隊に将来の勇敢さに対する榮譽の報酬を前もって与えることにして、各人からその銃を渡してもらい、それを自らの肩に置いて、それからこう述べながら返した。「ここで榮譽の銃を受けるがいい、間もなくしてからも同様に勇敢であれば、そなたのサーベルも名譽のサーベルに加えよう、するとそなたは身に榮譽を帯びることになる」― 彼は勝利に満ちた勇敢な夢にささやかな称賛をして（かつては暴君が殺害の夢に処罰を述べたようなものであるが）、夢想で現実を鍛えようとした。― 彼自身は最新の戦場を買い求めて、つまりティービンゲンの町の地図を求めて、地図に精通しようとして、それで出来事が錯綜した場合、敵がどこを攻めようと、いつも勝手を知っていて、どこに人々を誘導すべきか心得ているようにした。最後には新聞記者さえもが町の要塞や稜堡の下に現れ、敵の弱点の描写と勝利の保証によってすべてのティービンゲン人を筆舌に尽くしがたいほど感奮させた。祖国愛や帝国城塞愛は胎児の心臓の中ですら母親を通じて鼓動しており、皆が最後の男に至るまで戦うつもりである（最後の男が最初の男とそれほど離れていないのであれば、信用できることである）と彼は書いた。― ただ新聞記者が遺憾に思っていると言ったのは、敵の勇気をすべて奪いかねない自分の新聞が、まさに敵によって共に包囲されているということであった。

要するに最良の防御のために欠けているのは攻めてくる敵だけであった。敵はしかし律儀に五月八日午後に出現した。

その発端は我々をほとんど皆びっくりさせたことだろう。つまりあるただの偶然によって― まだ攻囲する軍が揃って構える前に― 生じたのであるが、まさに風が町の方に吹いて、気球が（とても大きなものではなかったが）弓状に沈んで飛んできて、ちょうど城塞の上で止まったのであった。我々は皆その気球を、とんでもない追い払いたい不吉極まる爆弾の一つと思った。最も勇敢なティービンゲンの顔でさえ、冬の鶏冠のように白くなった。しかしこれらの鶏冠はこう言っていた。「しかし普通の爆弾で攻めてくれば、目にのみせてくれよう」。従って確かに多くの者が立派なキケロに似ていた。彼は偉大な雄弁家であったけれども、最初はいつも震えて、その後よりしっかりと話し続け、最後には他の者達を、例えばカエサルを震えさせたのであった。

それだけに「日々死を迎え我が生は」といった司令官が守り、堡壘をめぐらしてくれている城内の人々は幸せであった。確かに彼は鼻が、起こされた撃鉄で、鼻穴が銃眼である粗野な男なんかではなく、また、畜生、皆が、兵卒に下士官、市民に百姓、女に子供、皆

が貴族であればいい、そうしたら対等の者として斬り合えるし、撃ち合えるのと言うような男ではなかった。 — むしろ逆にとても穏やかな乳のような性質の男で、それには中に骨や刀の見られる粥、ねばねばした粥ではなく、大きな、骨のない髓のスープで、たとえ多くの傷跡を見せるとしても、それはすべて瀉血針の残したものであった。 — しかし彼の勇氣は単に弱められ、然るべく限定された。自分の近くで火薬筒が、地雷のように躍って、それで稲妻に打たれたルターのように、神学的存在にしたからである。カノヴァが料理少年として作った単なるバターのライオンでも、それを見ればこの芸術家の偉大さが分かるように、司令官も柔らかなバターのライオンとして全くどの線にも真の戦争ライオンの輪郭が窺われ、それもはなはだしく十分に窺われた。彼は戦時要塞令を、一二〇〇の皮に書かれたセントアヴェスタ[ゾロアスター教の経典]のように、ただもっとくたくたく、もっと粗野に、しかしもっと読みにくく、というのは短いペンはい長い籐の杖であったので、自分の守るべき傭兵の中隊に書き取らせ、伝えた。大きな城塞の中で彼が小さな城塞処分で罰しないような小さなミスはなかった。 — 犬どもも逮捕されて見張り所に連れてこられた。犬どもは番兵小屋で見張りの突撃を断って、放尿していた。大事では多分彼はこれよりも厳格さと力強さに欠けることはあるまいと察せられよう。

いやようやくもっと大きなことに話を戻そう。偉大な將軍達が卑俗な義務に手ずから関与すると何と下々の者の心に全能の力を及ぼすか計算したことがある者ならば、なぜ司令官が自ら最初の大砲の発射のために壘壁に赴き、七つの大砲学士技術[*2]を指令したのかその理由を容易に察知するだろう。「拭って — 弾薬筒を砲身に — 装填 — 爆管を中に入れ、構え — 点火」 —

しかし丁重な礼砲の場合は弾を入れずに発射しなければならないと多分信じていた敵はこれで侮辱されたと感じ、今や遠慮せず包囲を始めた。

始まった。すでに最初の敵の榴弾が十字架状塔の鐘塔の穴に入ってきて、恐ろしい音を立てて洗礼の鐘を路地に投げ飛ばした。最初の爆弾が落ち、炸裂して、曝し台とそれに傷病兵の木製の唯一の脚を引き裂き、若い貴族の（はなはだ冗談に聞こえることだが）蠟製の鼻⁽⁸⁾を引き裂いた。そもそもディープスフェーラの爆弾は、彼らが複数の臼砲を有していたら、すさまじいことになっていたことだろう。彼らは爆弾をおそるべく取り扱ったからである。しかし城塞は少なくとも装填の安息[日]の間は若干息をつき、準備することができた。最初の爆弾ですぐに町は三つの部分に分かれた。瓶詰めビールを有する最初の部分の者はこのところに降りて行った。第二の部分は呪い声の旅行者達と共に爆弾に対して丈夫な教会へ赴いた。職人達の第三の部分は余りに多くの道具や子供達を抱えていて、自分達の居場所に留まっていたが、ただ、窓の前の古い堆肥を大いにもっと窓に近づけた。いや窓に鎧戸や狩猟小屋の壁として近づけたが、それで一種ふざけた逆の温床となって、窓が下にくることになった。

教会へ行った最初の者達は、私と書籍商と象であった。

象使いはかわいそうであった。苦勞して彼はクリストフェルを（そう彼は自分の巨大な動物を呼んでいた）狭い門を通過して入れたのであるが — 今や外に出ることすらまもなくなくなっていった。すでに然るべき見物料で見せていたので、町では一匹の猫並に平凡なものに色褪せてしまった家畜では一文も稼げなくなったのに、クリストフェルは更に世界の奇蹟であるかのように途方もなく食らい続けたのであった。さてこの陸の鯨は地下室

に収まらず、家畜小屋ではどんな爆弾にでも当たってしまいかねないので、象使いは（もじゃもじゃ髭の、モンゴル人風眼差しの、平たい鼻の男であったが）元老院の前で二十回以上の外国風な誓いを述べた。自分のクリストフェルを教会で飼うことが許されないのであれば、すぐさまこの象に三小樽目の火酒を飲ませる、するとこの象は（保証していいが）行き当たりばったり市門に走り込むことになる、と。

クリストフェルは内側のドアの番人として教会の扉の奥に置かれた。私と書籍商は全く小綺麗な祭具室で寝ることになった。彼は私の側で寝た、ひょっとしたら夢の中で使える話を洩らすかもしれないと彼は考えたのであった。「ここでようやく」と私は言った、「書籍商殿、冗談と結構な一日のために時と所が得られましょう。古代人は」（と私は洩らした）「ペストや敗北や同様なとき、贖罪の日々の代わりに歓喜の祭典を定めました。なぜ我々近代人は悲しみを悲しみではなくむしろ喜びで制圧し、外的悲劇に対して内的喜劇で対処しようとしないのでしょう。なぜ貴方は、シュテックライン殿、逆の意見の方を主張されるのですか」 — 「そんなことはありません。国家の危難のとき陽気な者があるとすれば、それは私です」と彼は真面目に言った。「結構」と私は言った、「一体人間は魚に似ていていいのでしょうか、魚は横隔膜を有せず、従って笑いで震撼されることがないのです。製紙工場はただ快晴の日にのみ稼働します。しかし内部の快晴は、紙を二度目に加工し再留する私にとって、そして紙を三度目に精製する貴方にとって、実際製紙工場よりも必要なものです」。

私は少しばかり祭具室から出て行った — 優美な眺めがあった。すべての女性用の教会の席は男性達によって占められ、すべての棧敷は貴族によって占められ、すべての聖堂二階席からは女性の頭が見下ろしていた。女性陣は意図的により高い二階席を占有していた、男性の観察する軍団を自分達より下に置くためであった。かくて教会は沢山で — 同時に紡ぎ部屋 — 床屋 — 楽屋 — 化粧室 — 書斎 — 奉公人部屋 — 食堂 — 寝室それに一切のものとなっていた。

夜にまだならないうちに敵は怒り狂っていた。絶えず大砲と榴弾を撃ってきたが、必ずしも我々の被害とはならなかった。敵の弾の多くを我々はまた敵に放つことができたからである。敵は滑稽なことに避雷針を撃ち落としたが、あたかも地上の戦いの雷雨のときに、下から射殺されないのであれば、上から惨殺されるかもしれないと大いに案じているかのようであった。

教会の集会のためにと幾つかの梯子が教会に仕舞われていたが、これらが家族を案じていた人々によって立てられ、外はどんな具合か見てみることになった。つまり長い教会の窓は幸い遮るものがなく、二階席が邪魔になることもなくて、梯子は快適に差し掛けられた。私は自分の梯子を掛けて登っていった。 — シュテックラインは私の後を付いてきた、私がひょっとして梯子から洩らすかもしれないものを受け取ろうとした — そして私が通りを覗くと、ただ路上での武勇が目に入ってきた。ちょうど爆弾が一つ落ちてきて、一人のその爆発圏外の立派な貴族が何も恐れぬ勇気を示して、自分の部下に同じ勇気を持って走って水を爆弾にかけるよう命じた。しかし人々は、ひょっとしたら彼より勇気がなくて、あるいは着くのが遅すぎることになるかもしれないと思って、少しためらっていると、幸い一人の脱走の狂人が、身を縮めて隠れていた隅ですべてを聞いていて、飛び出してきて、長いこと爆弾に小便をかけて、それで爆弾の威力をなくしてしまった。その後爆

弾を掘り出して、飛びはねながら叫んだ。「破裂弾はわしのものだ、わしのものだ」。守備隊と祖国のこの闘士は、その爆弾を、さながら自ら得た名誉のパリスの林檎として手にして、永遠に歴史の中で輝くことだろう、そして彼の狂気はむしろまさに彼の賢明さの称賛となることだろう。「あの貴族も」 — と私は梯子を降りながら言った — 「自分の職務を果たした」 — 「どうか」とシュテックラインは降りながら言った、「また下で初めから言ってください、何も聞こえません」。

「私は」 — と私は下の梯子の基底部のところで言った — 「勇敢な者を夙に見分けていた、それもその匂いで分かる。若い守備隊の将校達は十分に芳香で満たされていて（匂いがいい）場合、真の波紋状の鋼を見分ける基準となるもの、つまり消えがたい芳香を放つという特徴を有する。金属では何か唯一の特徴だ。自らには刻み目をつけずそのまま鉄に刻み目を付けるという波紋の[ダマスコ]サーベルとのよりありふれた類似性を — 匂いのいい将校は戦争に持ち込むというよりは戦争から持ち出して、戦争はこの将校を鋼のように交互に冷ましたり熱したりするもので、それでこの将校は平和のときにいつでも役立つ男となる。他にその気があれば、私はこの比喻を更に意味深い格言に昇格できよう。立派な男は攻撃に対して鋭く強い、それでいて同時に十分に優美である。ダマスコ・サーベルのように鉄を砕きながら、花の香りを放つ、と」 — 書籍商は右のポケットから手を出すことができなかった。

夜になると我々の多くがうんざりした。単調な撃ち合いのために我々は最初の眠りや二番目の眠り、三番目の眠りを妨害されたからである。「睡眠という神の平和は包囲の際少しも尊重されないのだろうか」と私は尋ねた。寝ぼけて、またはなはだうんざりして、私は祭具室から教会の内陣とその目覚めている一同を覗いてみた。しかし若干、祭壇の蠟の明かりからと洗礼盤の天使の代わりに中央に掛かっている劣等なシャンデリアからの照明を見て楽しんだ。何人かの逃げ込んだユダヤ人は煮立ったお湯の中の魚のように陽気であった、もっとも彼らは我々の教会への一時的避難に対してもっと良い目にあって然るべきであった。突然一個の爆弾が我らの弾よけの楯[屋根]に落ちて当たった — 寝ぼけがすべて消えた — 皆が教会の天井を見て思った、天井に描かれた預言者はすべて落下し、爆弾がその後続くかもしれないと。宿営のユダヤ人達はネーポムクの教会を臨時のユダヤ人教会堂に変えて、シオンとか類似のことを叫んだ、私は彼らの叫び声を祈りととらえたからである。しかし日中は彼らは幸い神殿で若干の仕事をした。

それに中隊の様々の乞食ユダヤ人達は、僧院の競売や破壊のときに幾つかの状態のいい告解の椅子や祭壇を競り落としてきた金持ちのユダヤ人から教会のために椅子や祭壇を賃借していた。一つには祭壇をまた聖職者達に貸し出すため — 全般的な死の危機と瀕死の床に接して多くの教区編入すらされてない魂が最後に、それも毎日聖餐を受けることを願っていたからであり — 一つには自ら告解の椅子を使って、その中で、比較的小さいユダヤ人路地にいるときのように、ユダヤ人らしくより小綺麗に身を保つためであった。

教会で身を養い、身を守ろうと思っていた乞食達でさえ、幾つかの少しも馬鹿にできない仕事をしていた。彼らは自らの教会寄付金袋運搬人として集金しながら、常に真のキリスト教徒を、つまり自らを見守っている一同の前でキリスト教徒として証明したがって、殊に大変な不安の中にいるので日々ペニヒを差し出すキリスト教徒を見いだしたからである。ただこの教会の乞食団は昔からの乞食の夫婦にははなはだ面白くない敵であつ

た。この夫婦は、数年前から大きな教会の扉の前に座っていたのだが、今や内に入っていて、それ故教会内陣での喜捨の積み荷に一種の権利を主張しようとしていた。しかし私見によればここでの夫婦は権利よりもはるかに利己心を有している。

朝方私は少しばかり教会での拘禁を離れて 一 隣に付いてくるシュテックラインと共に 一 路地をぶらついた。我々はイタリア人の地下室へ行った。そこで城塞での最も陽気な男を、つまりイタリア人を見いだした。彼の地下室は弾よけの楯であると同時に彼の客達のための神与の食物で一杯の天国であったからである。私も客に加わって 一 ただシュテックラインは主人からも私からも何も頂くことをしなかった。 一 数杯飲んだ後、私は侯爵達を犠牲にしてツィービンゲン人を称えた。というのは私はこう言ったからである。「大抵の侯爵達は兵士を（リヒテンベルクの非難によれば）天文学者が星々を扱うように扱っている、天文学者は星の性質よりも星の動きをもっと気にかけているのである。

一 侯爵達は金の粒で国家の実りある種蒔きができると信じている。金粉を彼らは受粉させ、繁殖させる生きた花粉と見なしている。しかし彼らはそれでも我々が推察するよりもはるかに理解していることだろう。盲目のフーバー⁽⁹⁾（自然科学者）のことを考えるといい。彼は蜂に関して最大の発見をしたのであるが、それは何の目も使わずに、ただ自分の官吏つまり使用人から、この使用人が見たことのすべてを言わせて、そうして発見したのであった」。シュテックラインは自分のポケット、即ち籤壺で幸せであった。

我々はそこから陶工のところへ行った。小室[便所]の容器を買うため、これは勿論教会にベッドを用意したときのみ教会で入用なもので、ベッドの下に置き、それ以外の場合は不要なものである。「何と綺麗な色彩と図案であろう」と私は容器の内側を覗き、花模様をしっかりと目に留めたとき、言った。「親方、このまま精進を続け、日々進化なさるといい。仕舞いには親方、バルベリーニあるいはポートルントの⁽¹⁰⁾壺を出現させて、我々をびっくりさせるかも。そうしたら気を取り直して、こんなものを造れるはずがない、エジプト人の魔術師とて一匹のシラミを造れないようなものと誓う男の顔を見てみたいものだ」。 一 ただ陶工の匠はその作品を、キリスト教徒がその装身具を単に内側に着けるように、内側にのみ仕上げるべきではあるまい。何と多くの芸術愛好家が今ではそのサワーミルクの鉢をまず飲み尽くさなければならないことか。つまり段々とスプーンで鉢の絵あるいは花の絵の描かれた図を一つずつ明らかにしていって、それで腹一杯にならないと全体を楽しめないことになっている。しかし私がこの芸術家の最新の作品の幾つかを見回してみたとき、花の絵がすべて地獄[を描く名手の]ブリューゲルの手になるもののように歪んでいて、器は曲がっていたので、この件を彼に尋ねた。「いやはや」と陶工は言った。「忌まわしい撃ち合いのせいで人間の腕と足が震えてしまいます。それで勿論だいなしにしてしまいます」。それで、いつも戦時下に、例えばアテネの場合のように、芸術は特に花咲くという見解は一般的真実とは言えないことになる。

玄関の所で私と書籍商は、誰が尿器を公然と路上で運ぶかということで友好的な競い合いをした。結局彼が奪い取った。

私どもが堆肥のない窓の前を通りかかったとき、中で一人の役者がモデルとして座っているのを見た。彼はフォールスタッフの役で描いて貰いたくて、それで劇場年鑑のために彫られることになるよう、即興で最も滑稽な顔の一つをなすべく努力していた。しかし 一 爆弾の恐怖のせいで 一 彼は十字架に掛けられた者のように、あるいは仮死の者の

ように、あるいは鉛毒痴痛者のように、あるいはまた痛風者のように見えた。しかしこの方法でさえ彼は滑稽に見えるという目的を達成していた。

我々がネーポムク教会の緊急家畜小屋に戻ってきたとき、策略家のシュテックラインは
— 一つには私が笑っている気分であり、一つには彼が尿器を運んでいたのも、
— ひょっとしたら今なら出版物を交渉できると思ひ、懇願を繰り返した。私はやむを得ず、彼が書評機関を準備するなら、私の作品の自己批評でできるだけ支援することにしようとして約束した。

十二時にヨブの郵便が教会に届いた。司令官は、自分は敵が二つ目の臼砲を探し求めて配列したという確かな情報を得ていると口頭で知らせた。「今や厳しい戦いになる」と彼は言った。食事の後、こっそりと従軍牧師が自分の昔からの考えを彼に告げた。「一度夜中に打って出たら、片が付くと思います」。

世間では一般に次の事情は知られていないかもしれない。つまりこの牧師は良心の顧問官、聴罪司祭として多くの自由を得ていて、餌を貰っていながら嘴でその賄頭の夫人をつつくカナリアに似て、自分の嘴で司令官をつつくことが許されていたのであった。より賢明な司令官は彼に答えた。「自分はただ晴雨計を待っていて、一時間ごとに注視している。まだ必要な雨になっていない、だって晴雨計は下がっている」。

二番目の臼砲はすでに前もって教会の内外の人々を砲撃していた。塔の音楽は単に塔の中の下の方、象から遠くない所で奏でられた。
— 煙突掃除人が煙突の外で箒の王笏を持って王位に就き、町の上に歌を響かすことはなくなった。そして不潔なアウギアスの牛舎を所有する者は、そこで取れたものを運んで火に対する鎧戸として賃貸した。

今や教会全体を通じて歌う行列がなされ（外では死の危険があったろう）そして男性の行列は（席がなくなってきて）階段を上がり、女性の行列は下がってきた。

シュテックラインは兎の心臓を恥じるに及ばない兎唇と見なして、あけすけに言った。「荷をまとめて帰りたいものだ。悪魔の穴から出られるのであれば、包囲雑誌の最新分冊を諦めてしまうのに」。

「でもまさに今面白いことになりそうだ」と私は言った、「火災や事件、突撃は物の数に入らない、雑誌の分冊をはなはだ飾ることになるとしても。というのは今から両都市は運命によって途方もないフェンシングに駆り立てられるのであって、それで小規模にはコフキコガネでの冗談のときに見られ、笑いものになることが大規模に見られることになる。つまり二匹のコフキコガネがパンの中、半分ほどまで張り付けられる。
— それからそれぞれの両前足に二つの長い麦わらがはめ込まれる。それからがお楽しみとなる。早速、拘禁され、パンで押さえつけられたコフキコガネは、自由な前足をばたばたさせて、その大きな細身の剣で互いに猛烈にフェンシングを始めて、そしてはなはだ風車の動きをして長い槍で空をきるの、それで人々は高笑いの最中になおこう尋ねることになる、これがコフキコガネか、と」。

シュテックラインは側を離れた。ポケットの中で完全に私の後をたどるのができなかったのである。

夕方頃すべてに思いをめぐらす司令官が現れて、こう告げた。自分は毎晩数時間祈りを捧げさせたい、さながら戦争の雷雨に対する天候の祈りである、と。「教会には以前から負傷者や戦争捕虜がやって来る、我々哀れな罪人は宗教的意味でこの者達と異なろうか」。

更に彼は、自分は自分の例で示したいと請け合った。何という男か。このような「日々死を迎え我が生は」氏は幾つかの城塞で望まれることだろう。

彼は彼の素敵な言葉を守って、いかなる砲撃にもかかわらず夜我らの緊急家畜小屋、避難港に現れた。アゲシラオ⁽¹¹⁾ スがいつも宮殿に宿を取って、自分の生活がどの目にも隠されることのないようにしたように、彼も教会に詣って、すべてのツィービンゲン人に自分の志操を明らかにしようとしていた。彼はどんな爆撃を受けようと礼拝に耐えた — ただ時々副官を通じて命令を送らなければならなかったが — いやネーポムクの屋根に爆弾が飛んできたときでさえ彼は祈りの部署から去らなかった。

朝聴罪師は再び攻撃を提案した。しかし相変わらず晴雨計は突撃[Sturm]に味方しておらず、ようやく嵐[Sturm]を示していた。

日中はほとんど撃ち込まれなかった。退屈から私は、活発な夜の発砲を期待して、作家の最大の、その限りでは最も重要な部分についての、つまり惨めな部⁽¹²⁾分についての私の考えを自分の中で声高に展開させようとした。しかし声高な語りは、それに耳を傾ける者がいると活気付くので、私にとってシュテックラインはまことに都合が良かった。およそ次のようなことを彼を前にして私は展開した。

「すべて公の図書館はこれまで単に立派な作品のみを後世に残してきた。しかし後世が先の世の精神の内奥を知りたいのであれば、この知識を、いつでもその時代精神を飛び越えている天才的作品から、より正しく汲み出せるものか、それともむしろその時代の模刻、孵化としてそしてその数の多さで最も強力に時代のイメージを、殊にその影の側を描いている全く惨めな作品から汲み出せるのではないかという疑問が生ずる。例えば何と熱心に我々は宗教改革の間の激しく争う両党派の駄本に目を通すことだろう。同様に私は例えばゲーテやクロプシュトックの模倣の図書館を望む。劣等な本は永久に雲のように消えて行く。しかし私は心の中で、すべての印刷された草稿は少なくとも一冊が残って欲しいと思う。将来モイゼ⁽¹³⁾ルは、もはや住んでいる全地球上で手にすることのできない数千の本のタイトルを紹介することになったら、何と飢えた後世をけしかけ、苦しめることになろうか。幸い、我々がおり、そなたがいて、我々は多くの惨めな本をまだ求めている。しかし私は単に一つの駄本図書館が全ドイツのためにあればいいと思う。

ここでは更に、多分パラドックスに見えることが願わしいこととして考えられよう。つまり書籍商達の協会が団結して、単に惨めな作品の出版に当たる必要があるというもので、それは現今のように単にあれこれの書籍商がそのことにのみ専念するのでもなく、またよく見られるように劣等な作品が上等の作品と混じり合うというのでもない。我々の文学は、十八歳から八十一歳の初心者の作家達の、いつもは永久に失われる作品のせいで何と一層豊かになることだろう。シュテックラインよ、いずれにせよ劣等な本は、それを売るが読むことはしない者にとって、不名誉とはならない。せいぜいそれを買って読む者に不名誉になるだけだ。豚や粗悪なものを、騎士領領主は自分の紋章を汚さずに商っている。それに貴方のような分別のある者ならば、著者がダースの[ありふれた]書籍商に（これはダースの画家やダースの時計の類似で言っているが）一人の書籍商に断られたものを送りつけることを恥ずかしく思うかもしれないと案ずることはない。ロンドンではクラブ通りは哀れな著者達の囲いとしてすべての本の中で貶されている。しかし次々に恥と思わず引越してくる。しかし誰もが正しいのである。誰もが心の中で微笑みながら、五つの階段

を登って、満足げにこう言えるのである。『服で男の価値は決まらない。路地で著者の価値は決まらない。それだけに隣人の作家達が正真正銘の阿呆であることは情けないことだ』。同様に、著者はその原稿をダースの書籍商に送るとき、いたずらっぽくこう考えるだろう。『阿呆が本気で惨めな本を求めているのであれば、私は圧倒的にだましてやった。作品は神々しいのだ』。

シュテックラインよ、ここで私自身がかつて有していた偏見を、貴方は棄てなければならぬ。劣等な著者というものは劣等な読者に、しばしば田舎全体に、真の価値を置いているのだ。しかし二千人の劣等な読者に対してほとんど二人の劣等な作家しかいない。しかし読者がアリストファネスのコーラスに、これは雀蜂や雲や蛙から成るものだが、これに似ているとしたら、必要なことを真面目に考えなければならない。それに天も、若干、比較的数の少ない卑俗な著者達を助成するために、それだけに一層大きな多産性を付与しているように見え、それで彼らは大市のたびに三つ子の作品、五つ子の作品、六つ子の作品を分娩している。それでヤーン博士は『子供の病気について』の中で、まさに貧民や虚弱者の下で双子は最も頻繁に見られると述べている。

実際貴方も作家の下のクラスでは上のクラスのすべての見本が、ただ縮小化されているのに気付かれよう。小さな可愛い、平易なクロプシュトックやゲーテ、ヘルダー等々で、所謂飛び鹿、飛び雄牛、飛び雄山羊、飛び子豚が甲虫の中にいるようなものだ。しかしこのことはひょっとしたら、このような劣等な作品から多くのより上品な読者が過大な享樂を得ている理由かもしれない。ちょうど少なくともそれらの読書の後の反吐が証明しているようなもので、この反吐は通常過度な快樂に伴うものである。というのはすでにキケロが言っているからである。いつでもまさに最大の悅樂は反吐と嫌悪によって限定され、終結される、と。[*3]

シュテックラインよ、私は承知しているが、貴方は駄本のすみやかな消滅、消失に少しの痛痒も感じられないことだろう。しかし貴方は正しいのではないか。ヘブライ人は現在形を有せず、書籍商は未来形を有しない。というのは出版者自身が棺の店ざらしとなったとき、出版者の死後に出版物が生き返ったところで何の役に立とう。多くの作品はその性質上カレンダーと同じく当てもなく生きてはならない。例えば日誌はテルツィエ針[六十分の一秒を示す]時計に似ていて、これはより繊細に時を分割すればするほど迅速に進むのである。それは — もっと明確な比喻では — ロバの乳のように、ロバから搾られたまま、温かく味わわれなければならない。

貴方が一度ならず腰を下ろして、こう考えたことがなかったのであれば、結局私は不思議でならない。つまり駄本はある特別な特許状を得ていることについてだ。つまりどの重要な町にも一人の男がいて、この男はその特許をすこぶるつきに楽しんでいる。毎日この男は自分のを印刷しては、それで数千の読者を得ていて、それでいて批評家から（これがまさに特許状なのだが）非難されたことがない。どれだけこの男が文字通り反復しようとするのである。もっともまさにこの反復を読者は望んでおり、この男が日々単に自分の宿場の名前だけを、彼はそこの — 郵便局長なのだが、印刷[スタンプ]するよう読者は要請しているのである。明らかに私が話しているのは手紙の上のスタンプされた町の名前である。しかしながら駄本作家はこの特許状に関与しており、この作家が批判されるのは短いか、ほとんどないか、しばしば余りに遅くなってからである。つまり批評家がハタキや曝

し台、車裂きの刑車、絞首索と共に騎馬の郵便で新聞紙上に現れて、駄本作家に生きた毛髪や、いや白髪を許さないようにするとしても、いずれにせよこの作家はもう髪を有せず、すべてはすでに穏やかに深く埋葬されているのである。これに対して不滅の作品の場合は悲しい。いつもは鋭い匂いのタマネギから穏やかな香りの花が育つけれども、逆に詩的な花からは噛みつく批評が飛び出してくる。功績はただ罪を求めての家宅捜査を刺激するだけである。そしてまさにプロイセン法とは逆のことがなされる。プロイセン法では功績メダルを有する下士官は鞭打ちの刑を赦免されるのである。私はしばしばまだ多くの者が神々しく書くことに驚いている。プリニウスが神々を人間よりも幸せでないと見なしているとき、それは単に人間は自殺できるのに神々は滅せず残らなければならないからであるが、この命題は死すべき定めの人間にとっては根本的に間違っているけれども、しかしその不滅の作品にとっては根本的に正しい。友なるシュテックラインよ、試みに単に冗談で不滅のイリアスを起草してみたまえ、あるいは貴方のユーモアにもっとかなうのであれば、アリストファネスの喜劇を起草してみたまえ、誓って貴方はその得がたい傑作を腋に抱えたまま — その傑作は我々皆がどんなに称えても十分ではなく、それ故私はきちんと貴方の前で跪きたいと思うのであるが — 諸世紀、諸民族を通じて批判の鞭や路地を歩いて行かなければならないのだ — 新たに生まれた批評家が皆新たにその稀有な作品に何かけちをつけるのだ（私はその悪漢の手や髪をつかんで、ただ貴方のような不滅な者の復讐をしたいところである）。貴方の書店作家のように、貴方は一度だけ批評されるなんてものではなく、数千回批評され、筆の存在する限り、刺され続ける。それ故私は良き友人として貴方に不滅性を求めることを勧めない。

彼は本当にその提案全体を — 冗談の部分は別にして — 自分の専門著作にとっても重要なものとみなして、それで腰を下ろして、私の眼前で枢要なことを書き留め、自分の記憶の補助を私に頼んでいいと思っているかのような振りをした。しかし私はこやつが話を単に冗談と解していて、印刷したら上手に利用できるものと見なしていることに気付いていた。

夜に爆弾の炎は — 二つの臼砲で行われたので — 最高齢のツィーベンゲン人も思い出の中にならぬほどのものになった。司令官さえもその敬虔な行を邪魔されて、教会から出てこなければならなかった。殊に教会の向かい側の助祭の家が燃え始めただけにそうしなければならなかった。私は梯子を登って立派な消防活動を見守った。しかしもっと重要なことに私は惹かれた。助祭夫人が最高に着飾って家から出てきた。彼女は、自分の両手は空にしなから、それでも衣装箆を救い出すために、箆を一度に着用していた。彼女は同時に自分の花嫁衣装 — 喪服 — 聖餐式の服 — 白いレース付き着物 — それから炎の色の絹の服を着て、頭には羽根飾りの付いた堂々たる帽子を被り、両手にはすべての自分の上品な肌着を持っていた。しかし彼女はもっと救出しようとした。彼女は自ら柵としてこのドレスの腫瘍の中でほとんど身動きできなかったけれども、それでも危険の迫った豚小屋に近づき、ここで宝を危難から救おうとした。彼女は肌着を豚小屋の屋根に置くと、両手で母豚を求めて、母豚を小屋から連れ出そうとした。遂に彼女は母豚を尻尾で捕まえて、(何とも無茶な試みで羽根飾り付きの堂々たる帽子とはほとんど似合っていなかったが)、母豚を尻の部分で引っ張り出そうとしていた。しかしこの家畜の後ろ足を言い難い苦勞の末に引っ張って敷居のところまできたとき、豚はまた小屋に、劇の刀が

その柄に収まるように戻ってしまった。彼女はまた尻尾で掴みとめ、不安の余り残酷に引っ張って動物の前足を持って敷居まで運んだが、動物は突然また中へ帰ってしまった。とうとう一人の肉屋の従僕がはなはだしい嘆き声を哀れに思っ、動物の両耳を掴んで、前に行く夫人のところまで引きずって行った。

朝になると勇ましい「日々死を迎え我が生は」氏は、二つの臼砲と一つの火災を経験し、雨となり、晴雨計は嵐の下にあるというのに、今夜出撃するという要請にとうとう応じないのであれば、正気でおられず、狂うところであったろう。城塞全体がそれに備えて緊張した。実際に出撃がなされた。人々は下の門から忍び出た（上の門は別にあつた）。しかし敵は見つからなかった。一步ごとに、出撃の部隊の勇氣は高まっていった。部隊は勇氣を示すことができず、そのことを恐ろしげに呪った。ようやく部隊は上の門のところで騒ぎ声を耳にした。出撃は立派に選択されていた。というのはディープスフェーラ人はまさに上の門から侵入しようとして、市門の鍵、あるいは市門の合い鍵を作ろうとしていた。ツイービンゲン人は城塞を半分回っていた。すると突然月の光で敵の姿が敵に知れた。恐るべき光景である。 — 歴⁽¹⁴⁾史は伝えている、ギリシアの偉大な將軍アラトゥスはいつも戦闘の前は激しい下痢に襲われ、下痢は戦闘が開始されるまで続いた、と。あるツイービンゲン人の変わり者はこの無邪気な逸話を乱用して、この逸話で、それに暗い雨の夜をいいことにして、自分の冗談をより信憑性の高いものにしてている。つまり、この変わり者は主張した、両軍は、互いを目にすると、同数の数の將軍アラトゥス達に変じてしまって、早速両軍は目配せや軍使やその他の合図で（ここで蓋然性が低くなるが）七分半ほどの停戦を結んで — その間に両軍は互いに腰を曲げて対峙して、そして事がすむとようやく両軍は合意して攻撃に起き上がった、と。 — しかしもっと真面目な話に戻ろう。両軍は互いに突撃した。しかしただ、かつて村の教会の教会音楽では耳にしたことのないような、熱く、戦慄させる物音で一杯の不協和音の、混乱した軍楽を伴っていた。これは恐怖の印であるが、しかし軍楽隊の場合普通のことである。これに対して兵士達は火となって互いに向かつて行った、それで彼らは小さな、すでに晴雨計で告げられていた地震に少しも気付かず — かつてローマ人やカルタゴ人が戦いの間の大地震に気付かなかったようなもので — 単に自分達が揺れて[震えて]おり、大地が揺れているのではないと信じていた。

戦闘で走る兵士と立ち退かぬ兵士とを比べると、ラファエロは、自分の像に大抵動きを与えて、めったに静止像を描かず、それで美を知っている男であるとされる限り、その限りで立ち退かぬ兵士は評価が低い。しかし美は脇へ置こう。両軍が走り始めたのには理由があつた。そして戦いのとき法は黙するのであれば、軍法も、例えば逃亡禁止も法の一つである。つまりツイービンゲン人は、抜け目なく、何人かのディープスフェーラ人が去っていくのに気付いて、狡猾にかぎ出した、つまりこれらの少数の者達は他の者達の単なる先駆けにすぎず、残りの者達も今や開けっ放しになっている下の門の中へ侵入しようとしているとかぎ出した。ここで大事なのは決断であつた。即刻全ツイービンゲン人の出撃は一つの総アキレスへと変わった。アキレスは周知のようにホメロスがその走りを称えたものである。皆が走り、駆け、飛んだ — ディープスフェーラ人がその後を追つたが、しかし実際遅すぎて疲れていた — かくて幸いツイービンゲン人は勝者として自分達の下の門に達した。 — 一人の男を失うこともなく、あるいは一人の余所者を入れることも

なかった。人々は一晩中勝利の出撃を祝って飲んだ。しかし「日々死を迎え我が生は」氏が指揮するのであれば、出撃にしくじることはあるまい。

朝人々がまた正気に戻ったとき、シュテックラインもそうしたのであるが、しかし強力な嫌悪感が支配していた。誰もが言ったことだが、相変わらず忌々しい防御と勝利は決着がついておらず、一文の得にもならなかった。特に書籍商は胡椒の木のように見え、あるいはニガヨモギのワインで酔っぱらったかのように見えた。というのは彼は私の洩らした言葉を正確にまとめようと思っていたが、それでも結局、それが印刷されたところで、燕麦代すら手に入らないと気付いたのであった。「神々よ、無実の者をこの不幸の監獄から救い出したまえ」と彼は言って、天の方を見た。

「渴望しているのかい」と私は言って、いつもはポケットの中で働いている右手を握った。「渴望しない者がいますか」と彼は答えた。 — 「それでこそ貴方と分かる」と私は言った。「あるいはむしろ人間の美しいより気高い性質が分かる。地上での生活はどんなに豊かでも人間はより気高い生活に憧れ、飢え、渴して、それでちょうど水の豊かな海の上にいるとき、人間は乾いた陸地にいるときよりも渴するような具合になる。現世の中でさえ人間は憧れを続けて、思い悩み、銀の止まり木に飛んでは金の止まり木に憧れる」。私はシュテックラインの右手を衷心より握りしめた、その右手はただポケットに入りたいと願っていたのであるが。しかし彼はどのようにしてこのような愛の絆を上品に引き裂いて執筆に向かったものか分からないでいた。

「さて私ども、軍勢のたびに打ち負かされた書籍商に関しましては」 — と彼は泣き笑いの顔をして、何とも言えない調子で答えた。 — 「銀の止まり木といったものさえ知りません（それがあればどの本屋も満足しましょう）。^{もち}籐の枝にむしられたように掛かっているか、あるいは燻蒸の枝に怒りの余り黒く掛かっています」。

誰もこの男の機知を不思議に思わなくていい。第一に、どの論争書からも分かるように、与えられたアレゴリーを続けることほど容易なものはなく、第二に誰もが自分の専門については最も容易に暗示を用いて語るのである。

「人間とそれに貴方はそうしたものだ」 — と私は言った — 「人間は世界史と世界地図を単に自分の小さな人生の目的や進行に合わせて描き作る。船乗りがその地図ではすべての大陸を空の空間として描き、単に岩礁や海等々をしっかりと描くようなものだ。それ故人間はいつも古いものを欲する。古いものは新しいものよりもますます容易に自分の思弁に合致するものだ。どの慣習も銀婚式を迎えて欲しいと人間は言う、たとえそこから鉛婚式や砒素婚式が生じようとも。この理由で私はドイツ人の愛国心を、これは多くの卑俗な、祖国について全く無関心な者達が今示そうと思っているものであるが、むしろまことのプライベートな愛国心と見なしている。今述べた者達はこの愛国心を自らの人格と見なしている。彼らは（思うに非哲学的とは言えないが）すべてを携帯して⁽¹⁵⁾いて、従って祖国をも身に帯びているからである。確かに素敵なことだ。卑俗な者達も黒服で参列すれば、哀悼の祖国の葬列にもっと声望を高めるであろう。かくて高貴な人々の葬儀では、人々が薄物で覆われているばかりでなく、冷静で確固たる馬も黒紗の喪章で行く。 ...とここでシュテックラインよ、今晚私は、包囲が明後日には終わるようにする」。 ...

シュテックラインは尋ね、聞き出し、いや歓呼の声を上げようとした — しかし私は言った。「皆夜を待つがいい」。

私は、いつものように、ささいな戦争中の出来事を省いていた。雑誌ですべてを新たな目で述べようと思っっているけなげな書籍商にその出来事を知らせずにいることは、盗癖召使、聖物窃盗に当たるだろう。

夜、夜の礼拝の後、私は牧師が説教壇から下りると、説教壇に登った。私どもは出会ったとき挨拶し、私は上で始めた。 — しかし告解席に筆とインクと共に座っている素朴な書籍商を見てほとんど邪魔されそうであった。

「閣下におかれましては、一人の余所者が、公使館参事官ではありますが、ここの壇上で口頭の平和の説法を行うのを大目に見て頂きたい、すでに平和の説法を小生はドイツそのものに印刷物で行ったことがあり、ツィービンゲンの城塞は本来ドイツに含まれているのであります。かつてヴェネツィアでは総指揮官そのものすら外国人である必要があつて、サンマリノでは裁判官が外国人である必要があつたのではないのでしょうか。これに対して説教家が外国人であることは何と少ないことでしょうか。

私はここで平和の文書、その前に平和の仮条約を提案致します。これらは不可欠なものではなく、欠けてもいいものです。私は、勇気のなすもの、対峙や大砲による抵抗のなすもの、出撃の有様や出撃のなすものを見てきました。何とまあこれまで信じられないほどに長く城塞はその大きさに比して、最大のドイツの城塞よりも持ちこたえてきたことでしょうか。しかしまことに、あたかも勇気は最小の国々で最も密になるようなものであり — 人口に比例してペルシアや中国がスイスと同等に勇敢であることがあるか考えればいいのであり — ちょうどリンネによれば大きな器の中では葉しか繁らせない木がより小さな器に移されると早速花を咲かせるようなものです、彼はこのことを十分ギリシア語で若枝の早発[Prolepsis]と呼んでいます。それ故国々の剪定は、国々をより勇敢にするためによく見られる手段です、もっと勇敢になり得るものがまだ存在するほどに、その国々からまだ残される限りでの話ですが、ドイツのような古い活気を失った国々には剪定は最も必要なことで、庭師が秋に若い木はそうしないけれども、古い木は容赦なく剪定するようなものです。

ツィービンゲンはそれ自体敵から何も恐れることはありません。毎日十回出撃しても、一人の男も失いはしません。というのは歩兵の射撃は、いつも余りに高く行くので、単に千回に一度当たるといふ技師ボルウの言が正しいのであれば、我々は当たることはありません。敵は一度にそれほどの数を装填しないからです。

例えば我々より長く持たず、(剣帯から) 剣より剣の鞘を引き抜いたシュテティーンやマグデブルク⁽¹⁶⁾のような大きな城塞でさえ、そのより大きな守備隊にもかかわらず不名誉というわけではなく降服しました。我々の例でこれらの自尊心を傷つけてはなりません。考えてみましょう。シュテティーンの司令官達はその家に(城塞は家です) 赤い雄鶏を置くのを好みません。彼らはそれを赤い帽子とガリア人[フランス人]の雄鶏への暗示と考えています — 彼らはこう結論づけているのです、すでに劇場で、ましてや観兵式で、見せかけの戦争がたまたま本当の負傷を引き起こすのであれば、本当の戦争はもっと大きな負傷の恐れがあつて、しかしながら自分達は負傷者で一杯のすべての馬車や、死者で一杯のすべての塚、家のないすべての路地を自分達の名前のサインをする二滴のインクで洗い落とすことができる、と。彼らは城塞を固く閉ざすことを、つまり敵と同時に食物を閉め出すことを、しばしばかのペルー人の風習同様に滑稽なことと思っています。このペルー

人は、臨終の者の魂が逃げるのを防ぐために、臨終の者の口や鼻を入念にふさぐのです。

一 真のシュテティーンやマグデブルクの司令官達は余りに気位が高くて、旗手とすら斬り合いはしないので、ましてや卑小な民衆や荷造り人夫とは戦いません。一 更に彼らはかの上品なタルムードの戒律、賢人はいつも議論の半ばで、何か決着をつけずに、互いに別れて、より長く議論の対象を考えるべきであるという戒律を、更に良くもっと重要な戦争の議論に応用可能であると思い、それで彼らはしばしばその半ばにさえ達しないようにするのです。一 立派なシュテティーンの司令官達は繊細で、目に涙をためていて、火酒のランプの火が周りの者達に死者の色彩を施すように、同様なことを大砲の火がもっとリアルになすことに耐えられません。それで彼らは好んでこう言います。トルコでは死んだ敵の頭が墨壁や壁に隠されるのであれば、そこに友人の、つまり兵士の頭が並べられるのはもっと残酷なことであろう、と。ちなみに一人の司令官は一人の大使よりももっと多面的に侯爵の代理となるのであれば、侯爵の全権を通じて、生と死の支配を通じて代理するのであれば、赦す権利も有しており、従って、敵を自分の友人とすることによって敵を赦す権利も有します。

しかし私は余所の城塞を、自らが防御したよりも長く防御するつもりはありません。私どものいる城塞に話を戻しましょう。

閣下。ツィービンゲン人の名誉は救われていますが、ツィービンゲン人はそうではありません。城塞に対して猛禽が鳥めがけて鳥籠に対して襲うように襲ってくる軟弱な敵がいつかは鳥にとって脅威になるというようなことをここで言っているではありません。勝利の軍人階級の後では生産階級も少しばかり勝ちたいと思うのです。まことに和平への理由はどの教会の席でも、どの路地でも、どの地下室でも見られます。桶屋は数日したら箍踊りをしたいと思い、その二日後にはパン屋が旗振りをしたいと思っていないでしょうか。そして爆弾が飛び跳ねる中、飛び跳ねるための場所を確保するにはどうしたらいいか考えていないでしょうか。一 一週間後にはディープスフェーラの家畜市に当たっていないでしょうか。それは当地の畜産にとってはなほ重要なものです。一 アルトツィービンゲンの人々[*4]は、毎日椅子の脚で殴り合って半死半生であり、互いに弁髪で引きずり合って、このときに至るまで我らの当局を、つまり騎乗してきて、自分達をまことに粗野に殴り、罰する当局をむなしく待っているのではないのでしょうか。一 私はすべてを語ったのでしょうか。一 ほとんどまだです。玄関では薬剤師が立っていて、薬草を集めたいと思っていますが、外に出られないでいます。一 女達は神に天候を祈って、亜麻の種を蒔くことを欲しています。一 城塞の外のコフキコガネは振り落とされて、生け垣は剪定されるべきです。一 教会の塔では象のクリストフェルが猛烈に食べて、自らの主人を困憊させています。一 有能な書籍商は祭具室に座っていて、書き取っていますが、商売ができません。一 かく言う私自身はここに立っていて、説教しているのですが、一つのあるいは対の平和のパイプを詰めることを助言しているところです。しかしながらこのようにして閣下のような注意深い司令官と、夜ではありますが、知り合いになる機会を得られて感謝に耐えません。アーメン」。

*

教会の一同は叫んだ、『日々死を迎え我が生は』氏万歳　—　しかし彼ははなはだ慎重に黙っていて、教会から去った。真夜中のうちに大きな会議があった。見通しがたいヴェールが世間に国家の秘密を隠していた（ここで私は最もありふれたものとして三重の説教師の類語反復あるいは同義反復を利用している）。朝の五時頃にはもはや射撃はなくなった。

朝になってもまだ確としたことは聞こえてこなかった。しかし敵側からそれだけに一層何か重要なことを門で目にするようになった。一人のディープスフェーラの軍使のことで、（市は驚きの余り死にそうになったが）ツィービンゲンの軍使を伴っていた。「このツィービンゲン人はすでに夜のうちに去っていたと推測すれば、間違ったことではないかもしれない」と職人達は言っていた。

その後三時間して　—　私はここで四時間という者達と意見を異にするが　—　ある噂が広まって、続いていったが、つまり正午にディープスフェーラ人が城塞に入ってくるが、しかし同時に　—　後の世紀はもはやそれを信じないだろうが　—　ツィービンゲン人は帝国小都市に入るようになっており、かくて両都市はまた帝国裁判所がこの件を決するまで、その休戦の互いの人質と保証を得るようにするというものである。

しかし本当にその通りになった。十一時にすべての鐘が激しく鳴った　—　再びすべての犬が路地で吠えた　—　すべての屋根は屋根板の代わりに人々で覆われ、窓には肥やしの代わりに顔が見られた　—　ツィービンゲン人の軍隊は上の門の方へ行軍のために立って、尻をディープスフェーラの人々に向けていて、この人々は下の門から入ってくるようになっていた。下の門の上では犬の予備軍がはなはだ吠えた。犬どもが吠え止むまでには時間が短すぎたからである。

象の主人はネーポムク教会の門の前でクリストフェルに乗って見下ろし、辺りを見回していた　—　路地は見物人の藪が生い茂っていた。　—　ただ私とシュテックラインは見通せず、通り抜けられなかった。

書籍商はそのことで全く憤激していた。彼は雑誌に書くために進行が必要であった。とうとう彼は一台の空の荷車を見つけた。彼はその梯子段に立ってバランスを取ろうとしたかもしれないが、しかしもっと幸いなことに二人分の高い中身の空の砂糖樽がその横にあった。その上に我々兩人とも飛び乗った。

我々が全群衆よりもはるかに快適に樽の上に立って見回し、まさに軍樂が近寄ってくるのを見たとき、突然樽の蓋が我々二人の足許で崩れた。そして私と書籍商は下の[カルトゥジオ会修道院の]独房に立っていて、互いに見つめ合うことになった。忌まわしい罨のような落とし格子である。　—　書籍商は生きた埋葬者のようにノックし　—　下に沈没した者のように叫んだ　—　猫の歯の下の鼠のように哀れな声を上げた。　—　しかしたった一人の好奇心の強い、悪漢のような、目と耳を行列に絡ませた盗人も、私と書籍商とがこの世にいて樽の中にいると知るだけの時間を有しなかった。シュテックラインは雑誌のせいで途方にくれていた。彼は言った、「戦争や一切がもっと続いたら、仕舞いには名うての悪漢になって、このこと一切を翻刻してやる」。彼は自らを呪い、煙草の点火道具を呪った（それを忘れたからである）。ひょっとしたらその火口で樽に火を点けられたかもしれないのと思ったのであった。彼は私と自分の重さを忌々しく思った。この重さがなければ垂直な双子の棺は四本の手で転倒され得ただろうからである。彼は騎馬の音を耳

にすると、樽の中で桶屋の将来の箍踊りを荒々しく先取りして踊り、永遠に檻の中のハイエナのように、鳥籠の中で輪舞を続けた。 — 遂に彼は自らの貴賓席から自分の帽子を高く空に投げ（私はそれを喜びの爆発と見なしたが、しかし遭難号砲であった）、外で見とれている民衆に、一人のキリストが深い縦坑の中で惨めに働き疲れていると知らせようとした。しかし誰も帽子を見なかった。彼はそれを二度目にもっと荒々しく、もっと高く投げ — そして樽の外に投げ飛ばした。それにまた彼の首の最後の飾り、仮縫いのフィッティングも失っていた。

彼は自らの中に沈んでいった — 自分の陥る中で最悪のところ、沼である。 — そして自分の頭を垂れ、沈めさせた — 精神はその体の死刑執行人であり、その首を刎ねたからである。 — 彼はもはや何ものでもなかった。

私は自分である一切であり続けた、そして、砂糖樽をディオゲネスの樽とし、彼のよう(17)にレグルスの樽⁽¹⁷⁾としないのが、砂糖樽の名に一層かなっていると考えた。「何故かは分からないけれども」 — と私は彼に言った — 「しかしこの樽の中にいると本当に居心地がよく、なつかしい感じがする — 勿論我々二人はこの中ではそれぞれ一本の棒砂糖というわけだ — ただ貴方が怒りの余り黒くならないよう、あるいは我らの砂糖島での黒人とならないよう願っている。だって周りを見回して、民衆の営みの最中に何という素敵な隔離の運命を単なる数枚の樽の板で保証されているか考えてみると、ほとんどこう尋ねたくなるからだ。我々は下の海の底の潜水器に座っていて、上の波のざわめきについては何の波の音も聞かないでいる二人の幸せな男達に似ているのではないか、と。 —

すでに樽の中の一人の哲人にとって、この樽は、ギリシアの神殿のようにただ上部が天に開けられているのだが、地上とそのツィービンゲンの喧噪が滑稽に思われるのであれば、互いに私的な会合、いや閉じ込められた会合を形成している二人の人間にとってはいかほどになお一時に思われることだろう。友のシュテックラインよ、私は自分をロビンソンとしてこの砂糖島に漂着したと思いたい。そして貴方はこの下で出会った私のフライデイ[*5]、聖金曜日というわけだ。 — 答えて欲しい、サンマリノの他に我らの樽ほどに自由なものがあるかい」。

「もはや何も聞こえません」とシュテックラインは樽に耳を当てて冷たく言った。しかし彼が言っているのは私の言葉ではなく馬のことであった。この男の攻囲ノートの最後の記事が切り取られた合間の時に、この男は何と冷たく、いや無愛想になって突然私に吐露したことか気付かずにはおれない。利己的な者は常に余りに丁重であるか、余りに粗野であるかに思われる。それだけに一層利己主義者の冷淡さや温暖さには無関心であるべきであろう。

私は構わずにいた。彼は最後に火事だと叫んで、樽が倒されるようにした。私も同意して叫んだ。遂に、騒がしい樽の中を見ようと好奇心から梯子杵の馬車に乗り込んできた何人かの見習いの者達が、この樽を意地悪く投げ倒した。そして我々は這い出て、解放された。洞窟探求者が腹ばいになって、ほの白く輝く洞窟の寺院に出たようなものであった。

——

しかし感情よ。汝よりももっと我が儘なもの — もっと頑固なもの — もっとむら気なもの、革命的なものがあろうか。というのは汝の他に、私の知る限り、誰があろうか、突然私を路上で全く別の男に変えたのは、(あたかも私が鶏冠ポリープであるかのように)、

私が路上に深くかがんだままそろそろと樽から出てきたときに、まこと汝の他に誰があるかと思われたからである。「うんざり、うっとうしい、うつけで、うつろ」と汝はずっと繰り返していた。「全くその通りだ」（と私はとうとう言った）「鷺鳥のための戦争で、鷺鳥どもがやったことだ。開城について一点も経験できないことはどうでもよしい。ナポレオンが両帝国の小都市を全く要求しなかったことは正しい。私も好きになれない。去年のカレンダーと同じようなもので、本屋が安値で売りたいと言ってもいらない。シュテックラインはそのままにしておこう。亜麻色の髪の『日々死を迎え我が生は』氏は今日死んでも構わない。 — この件につき贅言を尽くさなければよかった。しかし即刻文は郵便で送ることにしよう、そしてもはや一言も吐かないことにしよう」。

しかし上述のように、以上のことすべてを言ってしまった。かにかくに感情というものはどんな冷静な男をも拉致してしまう。

*1 賛美歌集では本来こうなっている⁽⁵⁾。「日々死を迎え、我が生は絶えず塚を目指して急ぐ云々」。しかし彼はむしろ短く、それでいて敬虔に、金属鉱山のように、例えば「神は救わん」とか「そは神の恵み」と称したかった。

*2 一つの大砲は周知のように七つの衛星を — 時の神の惑星である土星のように有する — あるいはそれを操作する[七人の]人々を有する。

*3 このように万事において、最大の悦楽には常に嫌悪感が隣り合わせているのである。キケロ『弁論家について』Ⅲ. 25. (岩波文庫 大西英文訳 下巻一七二頁)

*4 アルトツィービンゲンは城塞ツィービンゲンの裁判所管轄区ある小さな村で、飲酒が盛んであるが、他には意味はない。

*5 ロビンソンの周知の友人。

III.

薄明かりの蝶あるいはスフィンクス

序言

以下のような切れ切れの想念に、人はその気になれば、私には過褒と思えるほどに、薄明かりの蝶という命名との類似性を認めることができよう。周知のように蝶には三種類ある。昼の蝶(Papilio)、夕方の蝶(Sphinx)、夜の蝶[蛾](Phalaena)である。時は薄暗くなる。―― どの現世の時も、夜明け前か、日暮れ時に、薄暗くなる。―― ただ永遠だけが明るい。それで時の中で若干の想念の短い緩やかな飛行を許して欲しい、あるいは博物館[雑誌]でのガラス箱を恵んで欲しい、その中で想念はピンに止められて輝くか、何かを表現するのである。これらの想念は物体のスフィンクス同様に垂れた翼だけは持たない。しかし後ろにはスフィンクス同様にホルンを有して、従って前の方に吹くことはない。家雀蛾とか骸骨蛾、フェニックスといった豪華な夕方の蝶がこの種類に属するけれども、私がここで飛ばしたり、ピンに止めたりさせるのは、ブルーメンバッハが彼の便覧の第五版の三五三頁で語っている小さなワイン蛾、雀蛾、コンパス蛾、タンポポ蛾に慎ましく限りたい。

*

第一のスフィンクス

未来の人間の見解について

我々が過去を数世紀遡って思い描くとき、過去は、異なる過去を我々の短い若々しい過去と取り違える目の錯覚によって、朝方のように新鮮に、青々と、老人よりももっと若者で一杯であるように思われる。あたかも我々の過去にも老人はいないかのようである[*1]。しかし我々が我々の墓の向こうの外部あるいは下部の長い未来を覗いてみると、まさに逆の取り違えですべてがもっと古く、黄昏れて、老いて見える。あたかもどの老人にも青春時代がなかったかのような按配である。この欺瞞の遠近法のお蔭で民族の過去は飾られて見え、民族の将来は醜く見えるのではなからうか。―― 例えなせばしばしば最後の審判の間近さが予言されてきたのか。この審判には全世界の頑迷さの審判が、つまり煉獄の時が先行するはずなのである。

ちなみに過誤の源泉は過誤の治療薬よりも容易に示し易いので―― 一方医学では病気の原因はその治療薬よりも見だし難いのであるが、―― 指摘された過誤の源泉に単になお周知の次の理由を付加したらいいだろう。つまり人間は自分達のわずかな市場町、わずかな瞬間を、以前から大陸や世界史と、恐怖しつつあるいは希望しながら、混同してきたのであり、そして自分達の小川を、例えばホメロスがすべての河川をそう呼んだように、つまり大洋と呼び、あるいはまた身体上の梅毒患者のように古い因果の痛みを好んで大いなる流行病や気候変動のせいにするというものである。

それ故単なる孤独な、近辺よりはむしろ遠方を見て暮らしている学者の方がしばしば、狭い時間、間近な王座に幽閉されている政治家よりも政治的予言の点で勝利を収めてきた。さながらティレシアスのようなもので、神々によって間近な周囲に対して盲目にされながら、その代わり遠方のことを真に予言することで埋め合わせをされているのである。

更に話を進めよう。摂理を信ずる者はいずれにせよ世の荒波の中で確かな慰めを得てい

る。しかし単に歴史を信ずる者でさえ歴史の中に希望の錨を見いだしている、そこにはまだ良く知られていない差異があるけれども。つまり劣等化した時代あるいは民族と不幸な目にあった時代あるいは民族の間には一つの差異があるのである。ただ劣等化した時代は不幸な時代に全面的に移行しなければならないが、不幸な時代は劣等化した時代に進む必要はない。従って一方の時代については長いスパンで予言できるが、別の時代については余りそうはいかない。つまり運命ははっきりと非倫理的民族には毒の杯を飲み干すように差し出しており、この民には毒のすべての痙攣を体験させて、自ら作り出し飲み込んだ毒のせいで、ガラガラ蛇が自ら噛んだせいで亡くなるように、滅亡するようにしているのである。―― こうしたことすべては例えば数世紀にわたってローマ帝国に対する手あるいは拳から読み取ることができた、この手は古い世界の鷲の爪あるいは狼の前足となつたのであった。

これに対して不幸な目にあった民族の未来は人間の先見を越えているが、しかし希望の許に達するものである。つまり人間は迷ってこう信ずる、転落した民族は、目の前にある救出の可能性の鎖によってのみまた高みへ引き上げられる、と。さて、その民族が投げ込まれた深みと比較すると民族を引き上げる救助の梯子が短すぎるということが分かると、人々はその民族に救いはないと決めつけて、歴史からこう思い出すのを忘れてしまう。つまり民族の洞穴の深みは―― 幾つかの物理的深淵がそうであるように―― 上の方へ退出する他に、下の平原の方、いや下の深みの方へ退出できるということで、それで思いがけず脇道を行くと突然自由な緑の野原や青空が開けるのである。それ故目に見える古い救助法で助かった民族はいない。ローマが自由も倫理性もなく魂を失って横たわっていて、健康な北方の軍を通じてさえ伝染するペストがただ侵攻してくるというので、今や腐り続ける巨大な腐肉の許でそれに結び付けられた世界全体が腐爛せざるを得ないであろうという時に、巨大な毒のローマに打ち勝ったのは誰であったか。小村のベツレヘムであった。

従って推測しようとはせず、信頼しようとするのである。

*1 かくて我々は思わず知らず、両親の古い心の中に、我々の若い心が両親の前で、そして両親を通じて体験したのと同じ魂の春を置いてしまう。

*

第二のスフィンクス

国の豊かさとし

国は外部から得るものでは豊かにも力強くもならず――むしろ逆で、そうではなく国が自らの中から生み出し、育てるものすべてを通じてのみ豊かに力強くなる。ただ健康で密な木のみが毎年蜜の花や蜜の果実をもたらす。しかし蜜蜂がその蜜を運んでくる木は空ろで腐っており、直に蜜の萼もなくなる。

*

時代に対する当てこすりの三重の乱用

当てこすりに関して三つの全く別々の党派が悩み苦しんでいる。第一の党派は当てこす

りを作成し、第二の党派は嗅ぎつけ、第三の党派は非難する。つまりエピクロス派風家畜小屋の時代には、どんなに純潔な作家も、単に慎み深く書くために慎みを忘れて考えなければならないように、そしてまたその作家は読者の不純な魂に身を置いて、それだけ一層確かに読者を自分の純な魂に連れ戻そうとするように、現今では政治的作家は自分の内奥にすべての考え得る時代の敵対者、異端者、国家の予言者を寄せ集め、彼らに耳を傾けて、しかる後にただ自分の考えを述べて、自分の意見が彼らの意見と混同されないようにしなければならない。こうした鳥占者達の予言や占星の曲解がフランス悲劇の自由な鷲の飛行をすべて奪って、糸に結び付けていたように、こうした予言で世界史の機知や考察のすべてに同様の窮屈さという運命が準備されている。私は十年あるいは二、三十年前の政治的範疇のすべての本から、立派なディオニシウスの⁽¹⁾耳を使って、現今の時代に対する多くの意地悪な不法の意見を聞き出す用意があり、かくて人々は、十七世紀にいつもは立派に監視されていたのに、十八世紀に対するかくも多くの放恣な非難が自由に許されていたことに面食らうことになるだろう。

三言がここでは分割されることになる。一つは好意的解釈者宛てのものであり、もう一つは敵意ある解釈者宛て、最後の一つはテキスト制作者本人宛てのものである。

好意的解釈者として、私は他人の本に自分自身の意見を、深く埋蔵されているけれども見いだし、その占い杖で取り出す人のことを考えている。しかしこの杖は鉞脈探査人に作用するものであろうが、しかしまた埋蔵者を打つものでもある。探査人が取り出す金を容易に埋蔵者は溶けた状態で飲み込むはめになる。かくて静かに、いや喜んで書きたいと思っている作家は、いつでも解読局に付け狙われて、作家がすべてのテキストを放りだしても、一層多くの、テキストなしの注を作られるという具合になって、ペンを自分の手から放つ仕儀になる。作家はくしゃみする者に確かに「お大事に」と言ってよいかしばしば考えこむ。こう尋ねられるであろうからである。「しかし誰にお大事になのか、悪魔に対してか、半身の悪魔に対してか、あるいは半身の神に対してか、それともどの党派に対してか」と。作家は極端なことになる、全く眠れなくなって、目覚めたまま歩き回ることになる。作家が眠っているときの言葉で怒りを買わないか誰も保証してくれないからである。それほど言うに言われぬほど不安をこの男が抱いていなくても、それでも彼は謎々から綴り字の謎[シャレード]に移り、この謎から文字謎[ロゴグリューフ]に移る。そしてこの謎から何と年代表示の二行詩節の謎へと身を飾るに至るが、これはある時代やある名前をただ大きな頭文字だけを用いて称えながら小さな想念の間に挿入して書くものである。

このような男が自らをますます崇高な者と思うならば、それだけ一層自らを隠す必要があると思うことになる。自分の弁解では、自分の書くどの文にもどれほど無限の発見があるか自分にすら分からないものであるから、と。 — それ自体本当のことである。すべて立派な作家においては、すでにポープに始まって、ポープの詩の中に彼自身の告白によるとウォーバトンは⁽²⁾ポープ自身よりも多くの洞察を発見したそうであるが、シェークスピアやホメロスといった上々に至るまで、このクラスの者達からは誰もが、立派な芸術批評家によって翻訳や書き換えをして貰えたならば、はなはだ自分自身について多く知り得たはずであろうことは別にしても、要するにこのような作家においては、動物の本能におけるように、無意識の神々しい豊かさが語り出しており、この豊かさに比すれば勿論多くのバラムは⁽³⁾単にその騎乗の家畜[ロバ]に見えるものである。

第二に 一 敵意ある解釈者は、アルゴス[無数の目を持つ巨人]であり、いつでも眼鏡をかけて構えているが、活動的（観照的でない）ドイツを本でさえ梃子として動かし揺することはないし、ましてや当てこすりの隠された茎の芽が動かすことはないと考えるべきであろう。ただ炎の諸民族[*1]にとって一つの思いつきは大衆を動かすオペロンの百合の⁽⁴⁾茎となる。革命の、その上血塗られた例で照らし出された本によって、かなり大きなドイツの国々が動かされることはなかった。そもそも、一度に大半の民衆に届く口頭の雄弁さの雷のみが、これのみが揺り動かし、実らせ、打ち砕く。しかし機知や当てこすりのロジン[バイオリンの弓の樹脂]は確かに稲光や雷を模するが、しかし別々に模しており、稲光は書き割りで模し、雷はオーケストラの低音弦で模す。それでも当てこすりの効果が案じられるというのであれば、それは当てこすりの許可によるものではなく、せいぜい禁止によるものであろう。かつてはラテン語によって神学的異端がいたずらに早く民衆に影響を及ぼすのを妨げたのであれば、なぜ同じことを政治的異端の際により上品な当てこすりに対して期待しないのか。

最後に第三にテキスト記述者あるいは作家自身の耳に一言述べたい。耳の奥に書き留めていい言葉である。テキスト記述者は、我々皆が大学にいた時分と同様に、余りに私や他の若い人々に似てくるという欠点を有する。つまり我々はこう信じていたのである、一冊の本が劣等であればあるほど、あるいはあるファッションが馬鹿げて見えれば見えるほど、我々は一層急いで馬鹿さ加減の証明や諷刺の執筆でそれに対して出動したり出撃したりして、適宜世間に対して、世間が我々よりも先に承知していて非難していることを、教示する必要がある、と。かくて多くの政治的作家が、ある出来事についての自分の確信する見解を、これについてはどの頭脳もどの良心も同様の見解であるのに、世間にとって必要不可欠であると思いついて、それを半分も包装せず、箱に入れず、砂糖もかけないうちに、世間へ送り込んでしまうのである。いや時にその者の見解は単に党派的迷妄にすぎないことがある。こうしたどうでもいい発言の全体的結果は、結局他の人々に必要不可欠の発言を難しくしてしまうことで、かくて次のようなことになるのは多くの慌て者の功績とはいえない。つまりかつてはある種の修道院⁽⁵⁾では頁をめくる音は沈黙を破ることとして処罰されているほどであったのに、読むことが声高な話と見なされなくなっていることであり、また結局、自分が黙るためにミサを捧げさせたギュイヨン夫人⁽⁶⁾ [*2]を模していないということである。

それで是非、作家の諸君 一 というのはこれは第二の結果であるからで 一 諸国を諸国に対して無用な（あるいは全く党派的）非難の裁きで怒らせないことだ。殊に君達が交互の憎悪で他者の力を増してしまうだけであるならば、そうしてはならない。論争法ではなく、教理学を選びたまえ。争議法ではなく文章論を選びたまえ。君達が何か良きものの種蒔きをしたいのであれば、ただ祖国的に高貴なもの、真理に対する熱意、神々しいものに対する信仰、純化された民族の独自性に対する誠実さを育て、高め、養うことだ。下界の通路のために坑道の羅針儀を用いないことだ、あるいは敵の損傷を目指して正しい位置を知らせるために照明弾を用いないことだ。諸君の明かりは、人間の穏やかな裸の小さな救世主が眠っていたさえない隠れ家を指し示していた一つの星であって欲しい。聖者は征服されない。

ただ個々人の中に住み得る倫理的なものの力はクエーカー教徒やヘルンフト派、初期

のキリスト教徒を通じて表現される。それは大きな洞穴の中の秘かな、時に調和的な鍾乳石液の絶えざる滴りに似ている。小さな滴りが最後には固い石の形、祭壇、不思議なものを創り出し、形象を音色に仮装させる。しかし奔流とか氾濫、ノアの洪水は産み出すものではなく、単に拉致するものである。

*1 しかしこのような民は容易に警句で点火されるとしても、同様にまた容易に警句で静められる。

*2 『ギュイヨン夫人の生涯』 I. 6.

*

第四のスフィンクス

タキトゥス⁽⁷⁾が「メテッルスとカルポの執政官からトラヤヌス皇帝に至るまで 一 つまりほぼ二一〇年 一 我々はドイツに接して勝ったが 一 しかしドイツを征服したのではなかった」と書いているとき、この奇蹟は単にドイツ人の勇敢さと祖国愛からのみ説明されるものではなく、というのは圧伏するローマ人や圧伏されたガリア人やスイス人もこの両者でもって輝いていたからで、 一 ひょっとしたら更に次のことから説明されよう。つまりドイツ人の侯爵達は、タキトゥスが表現しているように、自分達の名声のために戦い、ドイツの民衆はその侯爵のために戦ったということである。彼の別の見解もこれに属するもので、カッティ人（この最も勇敢なドイツ人）は、戦争のとき軍よりも将軍の方を頼み信頼することによって大いなる洞察を示してきたというものである。君主制の中で、さながら一心同体を作り出し、自他の力をすべての犠牲のために融合させるかの共同精神を目覚めさせ、強めるものは何であろうか。一方では喜びに高揚して、いかにも力強くすでに一つの狭い共同精神が団結心として諸団体、諸組合や諸身分の中で自己犠牲や理念に対する敬意、それに人間の品位と共に立ち現れているのを目にするのに対して、他方ではそれだけ一層痛みを伴ってこう感ずることになる。つまりこれらの小さな国家が大きな国家に融合することに頑固に逆らうばかりでなく、また個々の市民も無関心に孤立していて、孤独な船食い虫として国家の岩の中に住み、自分より他の一切をむしろ犠牲にしている、と。そして恐ろしいほどに同じ国家の中で肢体は別の肢体から、神経は他の神経から分離していて、どの血管もその心臓を欠いたまま脈打とうとしている。

さて誰がある君主制の中で共同精神を目覚めさせ、鍛え、確固としたものにすることができようか。ただそれは一人、自分の物理的諸力がいかに及ぼうとも、更にもっと大きな倫理的諸力を支配する人、侯爵本人である。青年の前では徳と英知は徳の教師、英知の教師へと具体化するようになり、そうして神々しいものが一人の人格的神となるように、人民の前でも祖国や夢中にさせる理念はその侯爵へと具体化し、密なものとなる、それには侯爵が魔術的王座の高みでの好意や洞察、力、勇気を倍加した全能の光輝とともに下々に作用し、太陽の炎ですべての春を受精させるという神聖な長所を良心と能力に従って応用することが前提になるのであるが。すべての民衆が喜ばしく美しく一人の英雄のために死に、またそれ以上に好んで一人の同時に戦闘的で倫理的な英雄の侯爵のために死ぬということは、感動的であり、人類として称えるべきことである。この面から見れば、戦争は短期間

のうちに平和が長時間の間になすよりも多くの共同心を生み出し、示すものである。多くの侯爵は外部の敵に出会いさえすれば、自分は一人の内部の敵をも有せず、まさに困窮時のときの友のみを有するという事を知ることになる。

一人の侯爵の真の立派な行動は自ずと、王座の金や銀の視線に惑わされることのない賢人にとって、いや外国人にとって常ならぬ甘美さをもたらすものである、例えば山々で採れる蜜が最も甘いものであるようなものである。要するに国家は蜂同様にその巣箱では蜜房を上から下に造り始めなければならない。真の立派な侯爵達の伝記は 一 愛と抵抗とを素敵な大きさと結び合わせ、(比喩が卑小すぎるのでなければ)、穏やかな青い目と炎の黒い目を同時に有していたアレクサンダーに似ている侯爵達の伝記、 一 要するにすべての国々や時代の精神的王座にある侯爵達のプルタークとかそれどころかタキトゥスといったものは皇太子と民衆双方にとって実りのある本となろう。そしてひょっとしたら対照的な侯爵達の 一 タキトゥスの年代記同様に厚いものになるかもしれない。

*

第五のスフィンクス

すみやかな啓蒙とすみやかな暗黒⁽⁸⁾

一つ以上の国々で、すみやかな、即ち準備のない啓蒙が立派な果実という持続も成熟もなしに過ぎ去ってしまい、余りに強力な太陽光にさらされた発光石がぼろぼろになって、暗闇の中では長く微光を放たなくなるという体験がなされてきた。しかしなぜすみやかな準備のない暗黒の作用がもっと長く続くと恐れてしまい、短い日食が過ぎたらもっと長い昼が続くと信頼して慰めを得ないのか。 一 というのはその上両事件は全く似ていないからである。明かりは、最も突発的な明かりでさえ、人々を明かりへと刺激する、物的明かりがくしゃみへと誘うようなものである。しかし突然の夜も人々を明かりへと刺激する。それ故歴史の最中では地球の友は不安を抱かなくてもいい。すべての突然の薄明かりは単に日食の薄明かりであり、従って増大する薄明かりではなく、同様に突然消滅する薄明かりである。

しかしそれ故どの政府もその最初の日、創造の第一日目の神のように、光あれと言うべきである。しかし星々は、太陽と月は、四日目によく創造された。その間の二日目と三日目には水が天と地の間に分配されて、地上に花や蕾が与えられた。その後太陽が現れて、花や蕾は太陽によって開花され、今まで保たれてきたのである。

IV.

出征を含むグロースラウザウとカウツェンでの二重観兵式 一つのグロテスク様式

第一章

ここでは一人以上の侯爵が登場する

小さな侯国グロースラウザウも同様に狭いカウツェン[*1]も中心都市あるいは首都を有していた。 — というのは首都は、村すら示せない、ましてや都市を示せない国でも有するからである。 — しかし両侯国は余計なことになお若干の村を首都の周りに示していた。これらの国の卑小⁽²⁾さから、なぜこれらの国々をその地方別地図以外の地図では見いだせないのか最も納得のいく説明ができる。しかし一般の地図ではすでに見いだせないのである。それ故神話的巨人アトラスのナポレオンが地理学的地図[アトラス]に見いだせなかった国々はまた彼の介入を受けなかったのであり、それ故周辺の国々が皆独立したとき、これらの国々は一切を自らしなければならず、自ら君主の戴冠を試みなければならなかった。しかしそのことを印刷物の中で知ったのは臣下達だけであった。

グロースラウザウの侯爵マリーア・プア[*2]は名誉と光輝の主君であったので、フリードリヒ二世のような侯爵が彼の宮殿を掠奪するとき、かのブリュール伯爵⁽³⁾の掠奪のときのように、六〇〇足の長靴、三二二の缶、八〇のステッキ、五二八の衣装それに鬘で一杯の一部屋に劣らぬものが見いだされるのであったら、彼は神に感謝していたことだろう[*3]。しかし前もって準備するには以前から彼には金が欠けていた。しかし高貴な金属なしに鑄造できるもの、つまり自己の榮譽を飾るための他人の榮譽というものを、これを君主に就任するに当たってふんだんに鑄造した。つまり彼の食卓に同席できる男を彼は三十二人の先祖を有する男に限定させたが、叙爵書で通常の四人の代わりに三十二人の必要な先祖を認定して、前もって貴族にしたのであった。およそ彼の王笏の触れるものに、彼は十字勲章を授けた。幸いその為に必要な勲章を用意していたからで、それで彼は自分の手に触れる一切を、ミダスよりも立派に、肩書きのオランダ金、金箔、金雲母に変えることができ、かくてこれらの榮譽を通じて自らに敬意を表することになった。それ故余所者を自分の食卓から派遣するときにはほとんどいつも司令官に任じて派遣することになった。彼はほとんど全国土を貴族に格上げしたかったであろうが、残りの貴族でない者達を単に参事官にするということでは満足せざるを得なかった。すべての村々そのものは実際首都の路地という貴族の身分に昇進した。大抵の村々はしばしば首都から半マイルほど離れていたもので、これらを首都の郊外と命名することで、こうした村々の単なる削除、編入を通じて彼はひょっとしたら小規模の輝かしい偉大なパリによる包囲を成し遂げたのであろう。 — そもそも侯爵達は国よりも都市を好んで拡大する。都市は人々にとって一つの植木鉢で、この中では作物は周知のように陸[国]の中でよりも強く生長し育つのである。

ナポレオンの導入した名誉職の中で、マリーアがその小名誉職の中で模倣しなかったものはほとんどない。ただしかし、彼には使用人や金が欠けていたので、幾つかの必須の名誉の騎士達[レジオン・ドヌール勲章]を一つに融合せざるを得ず、それで例えば俸給不足から下級式部官は同時に上級式部官にならざるを得なかった。しかし実直なマリーアを知らない人は、彼のナポレオンの猿真似を全くの諷刺、ドイツ宮廷でのナポレオンの猿真似

に対する諷刺と見なした。しかしこの立派な男は全くただ光輝だけを欲していたのであった。何度彼は自らを、空に星座として輝くラ・ランドの猫として夢想したことか、あるいは同様に天に懸かるハドリーの惨めな生命のない六分儀の代わりになりたかったことか。自分の何ものも、靴下や長靴すらも天に輝いていないと悟ったとき、何と痛々しく彼は自分の錯覚から目覚めなければならなかったことか。「私は有名になるのでなければ、幸せでありたくない」とそれから彼が呪って言ったとすれば、そのことは多分許されるべきであろう。

彼は自分の皇太子をナポレオンと命名させて、常識以上のものを示した。というのはこの皇太子が幹の短い王座に登ったとき、いや足をかけたときに、皇太子は他に仕様がなくてナポレオン一世と名乗ることになるからである。「そうなったら」（と父親は考えた）「ナポレオン一世が他に世の中にいないか調べてみよう」。

国境のカウツェン侯爵の場合は全く別であった。侯爵はティベリウス九十九世⁽⁴⁾といい、全く好戦的精神の君主で、すべてのマリーア的豪華ベッドや豪華馬車の敵であったが、すべての観兵式場の味方であった。

ただ残念ながら彼は好戦的な侯爵達の一人で、この侯爵達はフィディアス作の座したジュピターに似ていて、このジュピターはその神殿で立ち上がったならその巨大な体で屋根を突き破ってしまいかねないと非難されたものである。そして実際好戦的なティベリウスはその王座の天蓋を破らずには王座から起き上がれなかった。彼は導入された徴募の進行を耳にすると、およそ得られる限りの者を徴募⁽⁵⁾して、そして軍を増強して、それで一五〇人の軍勢でいつでも出撃できるほどであったが、それでも国内全部から募集できるのではないかとしばしばこっそり考えるのであった。彼は国家間では、大学人が互いに議論してあらゆる品格や講義許可を勝ち取らなければならないように、同様に以前から撃ち合い、斬りつけ合って、すべての品格や自己決定を得てきたということを見逃さなかった。それ故彼は日曜日でも自分の軍に射撃させ、打擲させた。彼は歩哨をすべての公の家や市役所、曝し台の回転板、自分の宮殿の秘密の小部屋等々の前に立たせた。平和な時でさえ彼は前哨や捨て石の兵を入念に配置して、すべての者をもっと鍛えようとした。要するに彼はすべての臣下を最も容易な方法で最も自由な共和主義者に、つまり兵士にすることしか念頭にない男であった。というのは常備軍は決して束縛されずに、単に座っている[監獄の]群を引きつけるだけであるからである。実際砲撃欲で一杯の近衛兵の歩兵隊は、監獄熱で一杯の臣下達ばかりでなくその支配者達本人さえも支配してしまうのである。 — 彼の軍は市民に対するガリア教会の自由、勝利する教会の自由⁽⁶⁾という点で、(先の)プロイセン軍に遅れをとっていなかった。

それ故彼の多くの仕掛けが多分に模倣するに値するものである。彼は彼の将校達が平和時、外国の敵と競い合うことができない時、より近くの敵を相手に練習するのが好んで見た。将校達は剣闘試合や比武のために市民や百姓を心安く相手に選んだのであった。それ故将校が、ただ自分の同等の身分の者と同じ武器で闘うという古くからの特権をすぐに断念して、ほとんど武器を有しない、ましてや同じ武器を有しない市民や百姓をそれでも斬り合いや突き合いにふさわしいものと選んだとき、侯爵はその際斬り落とされた二、三の百姓の鼻や百姓の命に対して当然大して気にとめなかった。このことで三、四人の勇敢な将校が大して金をかけずに得られたからである。村の教会堂開基祭の市の後では — 喜

びのそのラインの岸⁽⁷⁾辺では通常暴兵のラインの大蚊が刺すものであるが — それ故刺された者達が罰せられたが、それは自らを守ろうとして男達を攻撃した場合のことで、この男達は彼らに対して、単により高度な敵に備えて、ちょうど狩人がより高級な鳥に備えて燕で練習しようとするように、練習相手と見なして向かってきたのであった。

侯爵も目標を達成した。いやそれどころか、ベンツェンベルクによると嵐は冬の方が夏よりも危険であるように、彼の英雄達は涼しいほどよい教会堂開基祭の時に戦闘の暑い時よりも一層強く斬りかかってきたのであった。

しかし目下のところ侯爵には最良のものが欠けていた、正規の真の戦争である。つまり平和時救援金の欠如により戦時救援金が欠如していた。それ故彼の統治下では犯罪者の首に振りまく黄金（例えばオリエントで見られるように）が、黄金の欠如のためになかった。しかしあらゆる貧しさにもかかわらず、自分の国がもっと大きいのでありさえすれば、珍しい鳥フェニックス、つまり常に火の中で蘇る戦争を捕らえることができたであろうと（そう彼は見ていた）。それ故彼はとても金欠でありながら、より大きな国の君主達を羨望していた。彼らは戦っていない家臣達に、彼らに対し何も支払えず渡せないとき、単に行軍命令を下すのである。奇蹟を行うペトロの素敵な模倣で、ペトロは（使徒言行録第三章第六節）一人の乞食にこう言った、自分は金を与えることはできないが、しかし多分（奇蹟によって）歩く能力を与えることができよう、と。その後足萎えの男は早速歩き始め、歩いて行ったのであった。

このようにこのグロテスク風物語の両君主と英雄は、それぞれ別の特徴を持って対峙していた。

*1 自明なことだが、ここではカウツェンの民族について話題にしていない。この民族はタキトゥス⁽¹⁾が、その偉大さを単に正義の上のみ築いた最も高貴なドイツ的民族と呼んだもので、ブレーメンやオルデンプルク、東フリースラントに住んでいたとされ、それに、タキトゥス同様旅行者の言を信用しなければならぬとするとまだそこに住んでいるものである。

*2 昔の時代に倣った添え名。例えば一三五年ブラウンシュヴァイク・リューネブルクの最初の公爵はオットー・プアと呼ばれた。

*3 ドゥーテンスの『回想』。

第二章

ここでは戦争の布告と準備がなされる

かつてティベリウス九十九世は隣国のマリーアを訪ねた。ティベリウスは間近の観兵式（レビュー）について大いに陽気に語ったが、ただこう不満を述べた、自分の檻樓の兵はいたって数が少ない、と。「御同輩、我が陣営は生きた古着店にしか見えないのではないかと案ずる、やつらは大して有しないのだ」。 — 「それだけに」とマリーアは応じた、「兵の数も少ないのは結構なことと存ずる。我が方には若干の民衆がおります」 — 彼は単に謙虚さからそう述べたのであった。というのは法学によればすでに十人おれば[*1]民衆となるのであれば、彼の民衆の数は五百人であったと私が述べるとき、彼の言う民衆

の概念に合点が行くであろうからである。竹馬の上にさらにコトルヌス[悲劇用高靴]を履いている侯爵を秘かに嘲っているティベリウスは答えた、「馬子にも仕立屋にも衣装といって、調子が合っている」。

世間に昔の注を思い出させ、それに新たな注を付記するに多分ここほど適切な箇所はないであろう。つまり世間に思い出して貰わなければならないのは、フランスでは仕立屋と古着屋の間で二四六年以上続く裁判（一五三〇年に始まり一七七六年にもまだ未解決）があって、その中で三万以上の判決がなされて、どの服が古いものであるか、あるいは新しいものであるかについてできる限り明らかにされてきたということを読んだ筈だということである[*2]。さてグロースラウザウ侯国では — これは世間にとって新たな注であるが — 独自の点を有しており、つまりこの侯国は近隣の国々に衣服を提供するために、ほとんどすべて仕立屋から成り立っていたのである。例えばちょうどロシアでは同一種の職人からばかりなる村があるようなものである[*3]。これに対してカウツェン人は古着屋ばかりであった、これはそれほど奇妙なことではない、侯国自体でも近隣でも、結構な身分の者達とか、何か着飾らなければならない人々は少なかったからである。

さて両国の者達、職人達は互いに相手を打ちのめすことを願っていた。新旧の服はかつての旧約聖書や新約聖書以上に、あるいは現今の美学的古代と近代以上に熱い宗派を形成していた。古着の繕いが仕立物をする事と見なされたり、ほとんど着られない服が新しい服と見なされたり、その逆であったりした。

さて我々の物語の千もの事柄に明かりが点された。今やティベリウスは同輩の者に提案しようと思う提案を思いついた。「御同輩、今年是一緒に我々の両観兵式をしたら、どんなものだろう。各自分別をもって相手の軍に出撃するのだ。全く本物の戦争のように見えることだろう。ただ冗談と分からなければならない。信じられないほどの訓練となろう。他のすべての観兵式はこれに比べれば屁のようなものだ」。

このような自己省察の鏡部屋は輝かしい罪の愛好者としてのマリーアの心を最初法外に捉えた。しかし少し落ち着いて考えたとき、こう疑念がわいた。味方の者達が味方の者達に対して戦う劇場や観兵式ですでに時折邪悪な敵がその雑草と共に侵入してきて、互いに本物の打撃を加える敵どもを撒き散らすのであるから、見知らぬ軍が、それどころか古着屋と仕立屋とが互いに出兵するそのような場合もっと慎重に考え、案じなければならないだろう。ひょっとしたらかなりの古着屋がこの際銃床の反動で借金を帳消しにしようしたり、仕立屋が自分の割符つけを柵杖で片付けようとしたりするであろうから。

勿論彼はできるだけ上品に、カウツェン人あるいはティベリウス側の者達が自分のグロースラウザウ人あるいはマリーア側の者達に大いに借金があると分からせようとした。「ふん」（とティベリウスは答えた）「好きなように互いに殴り合って殺せばいい。ただ如才なく指揮して、正しい隊形変換をすることだ。正義は昔の言葉によれば同情を抱いてはならない。戦争は最も強力な刑法に他ならない。御同輩、貴方の仕立屋を健気に走らせるがいい、長く座っていた後ではまことに健康になろうというものだ。お誓い申し上げるが我が郎党は仕立屋の一つの肘も打ち砕きませぬぞ」。

マリーアは譲歩した。彼はそもそも、ティベリウスの軍は多くを有しないということに単にほのめかそうと思っていたのだが、そうすると意志に反して褒めることになることに思いがいたらなかった。というのは兵士が少なくとも多くを有しない諸国家ではまさに若

干プラトンの理想の共和国に、そこでは兵士のみが何の所有物も有してはならなかったという共和国に近づくからである。それで人々がしばしば乞食を罰として兵士の下に編入するように、褒美として兵士を乞食に編入するのである。アルビュウによればアラブの床屋は袖を肘の奥までまくり上げて、恋人の名誉のために彫り込んだ傷跡をいつもさらしているそうである。しかしながら自分の体の名誉の印を一日中さらすというひょっとしたら虚栄かもしれないが、しかし許容し得る願望をいかばかり国家は傷跡だらけの兵士達に対して容易なものにしていることか。国家は兵士達に意図的に、体をつまり傷を覆うものを何も与えなかったのである。

しかしながら見世物の戦争が両同輩の間で組織され、準備が始まった。マリーア・プアは早速軍事会議を開き、防御兵器について協議した。これはグロースラウザウの職人のような兵士にとって攻撃兵器よりも一層必要なものであった。とりわけせめて背中を防ぐために侯爵は弁髪を許可した、これは背中全体に尾骨まで届くものであった。この防風弁髪、錨索を有すれば駆ける者は皆不死身であった。それは傷のアース鎖で、フランスの馬の頭上の鎖のようなものであった。その上このような背中の蛇、怒りの鞭、戦争の食道を有する一軍全体は退却のとき何か壮麗な感じがして、恐怖を誘った。

プアはそもそもとても異なった意味でベルリンの弁髪説教師のシェルツェであった。つまり弁髪の説教師、弁護者であった。彼は弁髪を、教師達と兵士達を区別する下向きの印、花糸と見なしていたし、尖った髭、頬髭にかなり相当する長目の背後のうなじの髭と見なし、そもそも戦争の指針、振り子と見なしていたからである。なぜ英雄ツィーテンが少年のとき土曜日ごとに二時間かけてヴストラウからルピンへ歩いて行き、そこで一週間分の弁髪を作って貰っていたか侯爵は最も容易に理解していた。さて将軍としての彼にとって自分の部隊が同じ長さでない弁髪を下げていることは夙にどうでもいいことではなくなっていた。そこで、多くの偽の弁髪を結ばなければならず — かなりの吊り弁髪が本物の髪筒であった、 — 髪の出がグロースラウザウの女性に求められた。彼女達はこの際かの古代ローマの女性達の立派な姉妹であることが明らかになった、この古代のローマの女性達は自分達の髪を包囲するガリア人達に対する絞首索として切り落とし、より合わせたのであった。それ故禿のヴィーナスは一つの神殿を得たのであった[*4]。かくもしばしば一人の恋人が恋する男のために手に鋏を持って、自分の髪を切り、自分の髪を男の髪と弁髪リボンで結び合わされるたびに — 両者は将来教会の契りそのもので結ばれることになるが — 感動的で、改作者に値する場面が出現するのであった。

第二の準備はもっと金がかかった — 家臣達より別な者達が不利益[長い髪]を蒙らなければならなかったからで — 全軍にフランス人の大きな帽子が用意された。これは現今では何か存在を示したい者はどのドイツ人の将校であれ市民であれ被っているもので、さながら細い茎であるが、しかし無限の帽子を被った茸のようなものである。このようなものが卑小の者にさえ、殊に兵士に手配された。そして一日中徴募され、演習がなされた。いつもはカノン小砲の発射を教わるゴシキヒワの代わりに、また銃の持ち方を教わるプードルの代わりに親方や職人が訓練され、それで彼らはユダヤ人のように第二の神殿の建設にかかわることになった、一方の手に職人道具を持って、他方の手に武器を持って。しかしそもそも仕立屋の仕事は戦争の仕事とは、多くの突き刺し、穿孔、裁断、熱い鉄[アイロン]の操作を考えると対象が異なるだけではないか。全体戦争の上に築かれた国家はフ

ランス人の上陸の危機の⁽⁸⁾際、イギリスのレディー達のように結局のところ軍神的に見えたものである。女性の髪の中で銃や大砲、太鼓は何かありふれたもので、それもヘアピンとして金製のものであった。兜や小盾は耳たぶに下がっていた。そして攻城梯子は宝石商に細工されて胸にブローチとしてほの白く光っていた[*5]。後のこと、つまり城塞そのものが梯子を、登るために下げ降ろして、美人がそもそも武装するのは武装解除され征服されるためであるというのは私の気に入っていることである。

私はマリーアの幾つかの準備については触れない。それは重要性がより少ないといった理由なんかではなく、一 というのはその一つは宮廷画家が戦争画家として採用され、動員されたというもので、もう一つは菓子職人が宮廷の食卓に昔の英雄や勝利の飾り物ばかりを、一連の菓子製の戦争画を、提出して、将官の志気を高めたり、将官の演習となりしなければならなかったというものであるからで、一 省くのは、それが『すべての身分の教養ある読者のための戦争年鑑』の中でもっと大きな戦争にふさわしい場を奪ってしまうからである。

さて来る戦役のための勇気を求めた人は、その勇気をマリーア・プアの許で見いだすことができた。光輝を愛好する君主として彼はすでに青年のとき、偉大な英雄達に似ること、カエサルやフリードリヒ二世、ナポレオンのように無事に大戦役、頻繁な戦争から戻ってくることを熱く願っていた。彼はしばしば、戦争での名声を好む者は生きて帰ってきて、名声を享受することを願うだろうと述べて、生前にその名声を何も得られないまま射殺された千人もの者達のことを悼んだ。「いやはや」と彼は言った、「何人もの者が自分は戦死せず、勇敢さを自ら語ることができる」と知っておれば、何という奇蹟的勇敢さを示すことだろう」。一 「これは戦争の流儀に他なりませんな、御同輩」とあるときティベリウスは言った。「馬どももまさに騎兵の半数以上が勇敢に火の中へ飛び込み戦死する。しかし馬については戦報では歩兵同様ほとんど話題にしない。名誉は将校達のものだ」。

ティベリウス自身は、彼の古着屋達に似て、強く光輝を求めることはなかった。かつて宮廷の食卓で熊の肉がそうであったように、彼は食卓に列席可能な数少ない熊の一人であった。次の逸話は彼の創作であるとしても、私は確かに信ずるもので、一 というのはまさに創作ということが私には十分な証明であるからで、一 この逸話が生じたとされる当の旅館で私は聞いたのであるが、つまり彼が徹行で急いで髭を見知らぬ床屋に剃らせたとき、床屋が不注意の余り四分の一の頬髭を剃り落としてしまったところ、この髭剃りの男を長く殴りつけて、遂に頬髭がまた育ってくるまで続いたというものである。十分に信じがたいことである。しかし確かに彼は古代ローマ人のように槍を崇拝していて、国家を単に霰弾のみが、つまり戦争のみが立派にすすぎ、浄化する瓶と見なしていた。そのときには勿論彼は自己仲介者[賛美]のアーダム・ミュラー⁽⁹⁾を味方につけているのである。それ故今度の戦争はわずかしか、あるいは決して殺害してはならず、実った畑全体を刈り手を連れていながら刈り取らずに空しく進軍しなければならないという点で若干面白くなかった。マリーアは対照的心配事を抱えていて、自分は、かつてソフォクレスがその悲劇に対して將軍職の報酬を受けたように、逆に自分の將軍職に対して悲劇の報酬を受けるのではないかと案じていた。古着屋は信用ならなかったのである。それ故ティベリウスは一層古着屋を信用していた。彼は大胆なティベリウス人あるいはカウツェン人をほとんど駆ける点に主眼を置いて訓練させた。仕立屋達が敗退するとき、仕立屋達とこの点で競争す

ることは期待していないからだと言った。ちなみに彼は、ここでは負債者、つまり忘恩者が債権者に殴りかかり、パン種がこね粉を膨らますように人間を奮起させる怒りを携えていくことを望んでいた。余計なことに彼は更に櫛職人、ボタン職人の義勇兵を組織した。彼は彼らが皆普通の武器を手放して、それから素手で――両職人とも極めて長い指の爪を有するに違いないので――その十のピンセットあるいはガラス切りダイヤモンドで敵の顔を、即ち戦争のゴルディアスの結び目を有利に引っ掻き回すならば結構と彼らに大いに期待していたのであった。

今や我々は両軍が互いに出征する偉大な時を前にしている。

夜マリーアは出兵した。すべての臣下が、警急号音が鳴らされたとき、軍法に従って窓に明かりを点すようにするために、さながら将来の勝利の照明の前奏、アウローラであった。勇氣は恐怖の果実であるというガリアーニが正しいのであれば、グロースラウザウの仕立屋親方達ほどに一軍が市門から勇壮に恐ろしげに行軍したことは多分なかったであろう。というのはこの集団はまことに、教会での懺悔の際に一切の瀉血を禁じた一一六三年のトゥールの宗教会議の蘇りに見えたからであり、その中には多分ガリアーニより勇氣のある男でもそれを目にしたら震えていたであろう祈禱者達がいたのである。しかしながらかつてスパルタ人達は単にフルートの音の下に出兵して、自分達の荒々しい勇氣を静めたというのであれば、同じ幸運なやり方ですでに太鼓やトランペット、他の軍樂がグロースラウザウ人の勇氣を大いに沈下させていた。しかし出兵の様子を見ることはそれ自体崇高なことであった。所謂中隊将校が軍にいたばかりではない（兵卒は自明のことであった）、連隊本部も[四人の]支援部と四分の五以上の将軍と共にいた。警察長官はしかし本当に余計に見えた。私にはまだ彼ら、将来の英雄達の行軍の様子が目に浮かぶ。ティベリウスが意地悪なことをしないでいたら、勿論軍では悲しげな顔はもっと少なく見られたことだろう――

――残念ながらこの意地悪については全軍が耳にしている、――つまり彼は、数年前から自分をカウツェンの現役の陸軍中尉だと固有の観念に従って見なしている気の狂った古着屋を精神病院から出して、軍服を着させて、共に行軍させたのであった。このことは仕立屋達を混乱させた。少なくとも多くの仕立屋達を混乱させた。

その中で、より分別のある者達ははっきりと言いつつ、「まともな軍人ならこんなことは嬉しくない。陽気に大胆に出兵するというのに、狂った者がいるというのでは（そいつは理性が欠けていて）、我らの軍が瘤や殴打を持ち帰ることはない、いや人数より多くの瘤を持ち帰ることはない」と誰が保障してくれよう。その陸軍中尉は柵杖に装填し、発射しかねないのではないかと。――いやはや、かつてイタリア十五世紀の本物の戦争のときよりもっと負傷者が出るかもしれないのであれば、まことに紛らわしい戦となる。昔のイタリアではしばしば戦役で一人の男も死ななかつたのだ⁽¹⁰⁾。命の保障がほとんどできないのであれば、そんな無茶な戦争は悪魔にさらわれろだ」。

ティベリウスが猿どもの全将官を加えたことも、格別彼らの勇氣を増大させることにならなかった。このような動物は、軍紀を知らずに、勇壮な戦いを性急に真似て戦士達よりもっと害を及ぼしかねないからであった。しかし将官は一匹の狐猿と二匹の尾長猿からなり、連隊本部は巻き尾の珍しいベルゼブブ（Coaita あるいは Pani cus）と若干のヒヒから成り立っていた。彼はすべての動物に軍功のある名称を与えていた。我々皆よりも彼のことをよく知っている何人かの者はこの猿の軍にマリーアの宮廷や戦争のコピー機械に対

する秘かな嘲笑を推測しようとするであろうが、私には気に染まぬことである。

- *1 バルトルスによれば十人で一民衆となる、アプレユスによればその『弁明』では十五人の自由民でそうなる。Gundling の Otia. St.1. [正しくは Otia (閑暇) III S.292 (1707)]
- *2. 『フランスの雑録』一八〇五年、第十卷。第三分冊。
- *3 例えばラボトニカは鍛冶屋ばかりで、パヴロブスクは錠前師ばかりで、ヤメノヴァはブリキ職人ばかり等々である。ファブリの『ジャーナル』II. 一八〇九年。
- *4 ラクタンティウス『神聖な教理』第一の書、偽りの宗教について 第十章。
- *5 『フランス人の雑録』、第十三卷。I.

第三章

ここではソーセージと絞首台が戦術的意味を有する

遂に両軍が対峙した。...しかしここで現筆者は謙虚な告白をしなければならないが、それは自分は単に『レヴァーナ』や『美学入門』、『巨人』を書いただけであり、専門知識がなくで戦闘指揮を描いたことがなく、従ってその筆が戦役に取り出そうとする現在、この欠如のために、自分かあるいは英雄達を、あるいはその双方を滑稽な状態に陥らせずにいかにグロースラウザウとカウツェンの戦役を描きたらいいか、筆者にははなはだ荷が重く思われずにはいないということである。それ故筆者は両軍に対する公平さのみを約束して、遠慮なくあるときはティベリウスを、あるときはマリーアを称えることにしたい。しかし筆者は期待しているが、筆者の後、ひょっとしたら戦いに参加したかもしれない職人的何らかの筆が — さながら鷲の翼から自ら抜け出して、 — 世間にこの戦争をすべての戦術的戦略的知識と共に、それなくしてはその描写がすべて滑稽なものとなす知識と共に、描いて欲しいものである。

両軍は次の点で一致した。つまり観兵式あるいは出兵の全成功は、両軍のどちらが最初に絞首台山を占領するかによるとするもので、この山はちなみにたった一人の男によって守られていたが、この男はその上絞首台に下がっているのであった。絞首台の下にいる、あるいは下がっている者は、静かに余計な戦争を眺めていて、処刑された者同様に、単に冗談でその上揺れていた。私がそれについて会談した分別ある兵法家は皆一致して請け合ったのだが、途中で不運なことが生じなかったならば、不幸なことにこの不運をカウツェン人は幸運と見たのであるが、グロースラウザウ人がこの非常に大事な絞首台を占領するよりも早く、カウツェン人あるいは古着屋達が占領できたことだろう、と。それほどに死せる腸、しかし一杯詰まった腸は、生きていた腸、しかし空っぽの腸を圧倒し、惨めなソーセージが[蛇型の]カルヴァリン砲として発射され、全軍を引き留めたのである。つまり明々白々な事実であるが、 — この事実を隠そうとした新聞記者をすべて私は承知している、 — 好戦的で食い意地の張ったカウツェン人はその軍用道路でちょうど火事に遭った肉屋の家の前を通り過ぎる羽目になった。そのとき火勢のため煙道から中に下げられたすべてのソーセージや豚の胃詰めが鶉のように（三ポンドの手榴弾）カウツェン人に飛び出してきて、そのため空腹の軍の中核はそれで粉碎され、四散して、自分達に向けて発射されたソーセージを拾い集めて、食べ出した。煙道は飢餓の⁽¹¹⁾塔ではなく、宝角であつ

て、そこからほとんど間断なく彼らに向かって放たれた。このアントレの神与の雨ほどに、瘦せた古着屋達を食い止めた砲弾の雨はなかったであろう。それ故この隊は、すでに敵の三本の偽の弁髪を切り取っていたけれども、遅れて絞首台山に到着することになって、それで彼らが着いたとき、すでにグロースラウザウ人は一人以上のカウツェン人の勇気を奪うほどの有利な形勢にあった。まさに絞首台と共に中央要塞は陥落したからである。その上グロースラウザウ人は — 多分買収によって — 絞首台への小門の町の鍵を、つまり絞首台の脚をかなり高く取り囲んでいる環状の壁への鍵を入手する術を心得ていて、それで彼らは緊急のとき要塞の壘壁室へ自由に退却することができる状態にあった。というのは一度皆が絞首台の下に立って、この丸い壘壁の逆茂木に高く囲まれているということになれば、彼らに手出しのしようがなくなって、そしてすべての仕立屋はこの絞首台の小門から、狭いテルモピレーの隘路にあるときのように、スパルタ的に攻撃することができたからである。

作戦は合理的に計画されていたように見える。しかし古着屋達は実際狂っている陸軍中尉の指揮の下、恐るべき山に侵攻してきて、攻め登ってきた。 — 軍の両指揮官達は離れた右翼で戦っていた。 — 土塊で邪悪な火の弾が作られた、それどころか一人の婦人服仕立屋が戦いの高まりの中で両脚を掴まれて、櫓のように引きずり下ろされた。結局グロースラウザウ人は軍勢に屈せざるを得なかった。まことにすさまじい陸軍中尉が銃剣を構えて、つまり床尾を持って誰構わず突進してきたからである。カウツェン人の優勢は人数にはなく — 古い戦争観によれば攻城軍は城に籠もる軍より十倍以上いなければならないけれども、 — 力と度胸にあったのである。

実際カウツェン人は山を襲った。しかしここで彼らを待っていたのは、かのマリーアの戦術で、すでに前もって偶然を装ってヤヌスの門への絞首台の鍵を入手していたのである。仕立屋の右翼の軍はすべて小門から堅固な壘壁へ退いた、小門から一人ずつ仕立屋が出撃する決意であった。

しかしながらまた狂人が彼らの不吉の鳥として現れた。恐ろしい爆音や床尾による砲列の配置にも構わず彼は一人で絞首台の小門に迫って、取っ手を握り、小門を閉ざし、鍵を引き抜いた。軍の半分の中核が今や絞首台に閉じ込められた。というのはこの避難所の壘壁はとても高くて、徒弟の上に親方が乗っても、壘壁に乗ってそこから何かを落とすなんてことはできそうになかったのである。最初半分の翼の全員が叫んだ。「我らの要塞を開けよ。これが戦争の慣例か、観兵の習わしか。鍵を入れよ、絞首台泥棒め」。

古着屋達はこう呼ばれて穏やかではなかった。 — 何人かが — ひよっとしたら戦争と優美さや愛情とを一致させるために — 加工していない石を、加工していない⁽¹²⁾石は初期ギリシアではまさに愛と優美とを（ヴィンケルマンによると）意味していたが、一階の貴賓席へ投げ入れた。ここはとても密集していて頭の被害が甚大であった。密室内の者達は大胆にまたその柵杖を空に向けて放ち、その絞首台の囚人をほとんど旗の驚、射的の驚のように射抜いたが、外の敵に対してはただ罵って名誉を傷つけただけであった。しかし今や口頭名誉毀損や綽名が飛んだだけではなく、投げ込まれていた石もその盆地から飛んできて、これらの石がまた要塞の溝の中へと投げ返された。いや、何人かのグロースラウザウは余裕や柵杖を失って最後には銃そのものを投げ飛ばして、かくて射撃の代わりに投射することにした。

悪意の生じている戦争を描写しなければならないのは実際悲しい仕事である。これらの悪意は兵士の健康や、いや生命にとって容易に重大な結果をもたらすものである。たった一つ絞首台の梯子があればグロースラウザウの軍は救出され高く昇っていたことだろう。この軍は梯子で壁に登って、そこから下の敵に突撃降下していたことだろう。しかし今やカウツェン人は何とこの全組合、守備隊を絞首台の中央稜堡の中に閉じ込めたままにしておいて、そこから引き上げて、ティベリウス侯爵の翼に増強部隊として加わることになった。

侯爵達が自ら指揮をするこちらでは実際戦闘は揺れていた、いやマリーア・プアは数の多さで秤の針を自分の側に引き寄せていたが、カウツェン人の一員がまさに絞首台からやって来て、秤の針をかなり中央に戻し、遂にはまたティベリウスの猿の部隊が、これは猿真似の戦いに飢えていて、マリーア侯爵を前足や狼藉で取り囲み、かくて侯爵はこれらに捕獲される危機に陥った。これらは殴りかかり、飛び上がり、ひっかいて、侯爵や観兵のことを気にかけていなかったからである。 — しかしとても幸いであったことに、この補助動物に対して彼の仕立屋鉄船隊が絞首台山から救助に飛んできたのであった。

これらの船隊が彼を救い出し、両軍はまた均等の勢力になって、食事に必要な和平を容易に結ぶことができ、かくて両侯爵は同じ王侯のテントの中で全く平穩に食事をした。

第四章

ここでは戦争がより重大な局面を迎える

仕立屋の一翼が絞首台の監禁、従順からどのようにして脱したのかまもなく語ることにする。つまり翼兵あるいは鷲の翼としての自分達の上にただ絞首刑の者を見ていることに遂に飽きがきて、名誉欲が生じて、腹の空いてきた正直な一翼の者は仕舞に小門を押し破り、この浅瀬から離れることになった。彼らは月桂冠に覆われていて、つまり傷に覆われていた、それも尻の方ではなく、顔の方であった。

しかし残念ながら彼らは侯爵のマリーアにこの傷を見せて、尋ねた。このような頭部のこぶは民衆の権利であるか、観兵式であるか、と。するとマリーアは頭にきた。「陛下」

— と彼は恐ろしく丁重に、幾らか勝利とワインに酔って言い始め、大きなフランス風戦闘帽の先端をしっかりとティベリウスに向けた。多くの者が今やフランス人にこの切っ先を向けているが、さながら膨らんだ二重の黒い鶏冠である。 — 「この補償は要求してよろしいかと存ずる」 — 「そうはいかない、兄弟」とティベリウスは答えた。彼は相手の酩酊から何かを、つまりちょっとした戦争を期待していた。それ故彼は満足して兄弟と呼んだのである。というのは侯爵達は互いに親族名を与えることによって、自分達が本当に親戚に似ていることを暗示していると思うからである。親戚はいつでも大抵口論し、訴訟を起こすものである。「駄目だ、絶対駄目だ」（と彼は続けた） — 「何故貴方の民衆は自発的に絞首台の下で降服しなかったのか。すべての仕立屋の裁縫指が指先の方でやられたとしても、それは彼らが指ぬきを付けずに出兵したという失敗のせいにはすぎない」。 — マリーアは答えた、ひょっとしたら古着屋を当てこすっていたのかもしれない。「私は観兵式の軍事法に従って部下にルンペンから一つの檻樓も奪ってはならないと厳命したのです」。 — ティベリウスは答えた。「私の部下の場合そんなことを言う必要もない。どんな布きれであれ奪うなんてことは存念にないから。しかしそれだけに殺害

に対しては警告致した。しかし、御同輩、彼らが偶然にしる貴方の将校の一人か、二、三人をならず者として絞首台につないでいたとしても、それには拙者は我慢していたことだろう」。

「阿呆と猿どもが貴方の予備役にいた、しかしこれは戦争にはふさわしくない」と酔ってマリーアは叫んだ。 — 「しかし貴方の平和にはいかがかな」とティベリウスは肯定するかのように悠然と答えた。温かい酩酊の中へのこのような冷たい雫は溶けた銅で一杯の釜にただ水滴を落としたようなものである。マリーアは釜のように激昂して言った。「私は補償を要求する」 — 「御同輩のご存じのように」とティベリウスは答えた、「補償はいつでも準備している。ただ陛下にお願いしたいが、貴方が私と撃ち合い、斬り合いをするつもりか、それとも我々皆が人民の兵士と共に戦うつもりか、早速教えて頂きたい」。

全く忌まわしい事の展開である、とマリーアは考えた。しかしそれを避けるわけにいかなかったもので、栄誉欲から彼は決闘の代わりに — 決闘はすでに青年貴族や学生達によって使い古された補償であったので — 全員の戦い、戦争を選び、もっと名誉を得るために、二本の腕よりは二百本の腕で抵抗したいと思った。

「戦争だ、戦争だ」 — と彼は叫んで、食卓から立ち上がった。勿論ティベリウスはこれ以上の幸運を考えられなかった。というのは真水の中の海の魚のように彼には甘美な平和は耐え難かったからである。海の魚は通常塩分の水を求めて真水の中では往生する。彼はカトリックの司祭が結婚を取り結ぶように、好んで平和を結んだが、ただ自分自身はそれに関与せずにはいた。

戦争に喜んでティベリウスはほとんど穏やかになって、マリーアの手を握って言った。「数時間後にまた再会しよう、御同輩」。

その後彼は馬に乗って去り、まだ頬ばっていた彼の軍に、自分の後を追うように命じた。 — 今や『改訂されたアーデルスハイムの一七三四年の戦争及び殺害と死と嘆きと困窮の新しいカレンダー』があれば筆者の卓上で真の宝箱、絵の具箱となって、そこから真の戦争のための絵の具を取り出せることだろう。その観兵式はすでに勇壮な具合に行われたのであるが。しかし私は、この戦争を並以上に描くことを、並以上に描きたいとは思いますが、残念ながら余り期待しない。このような描写をするにはもとより私自身の中に指揮する将軍や師団の将軍への若干の資質を要するものであろうからである。というのは法によれば遺言の証人となり得る者は、自ら遺言を作成できる人物に限られるように、多分目下戦争を上手に描写し、証言している多くの将校達に対して、まず彼らが戦争をだからといって同様に遂行できるか証明する必要はなくて、ただ彼らの自覚に訴えればいいからである。

マリーアは急いで高級副官をマリーアの臣下に送って、彼らの耐えつつ遂行すべきことになる戦争を告知させた。その後、デザートるとき砂糖を分割しながら、短い軍議が何をなすべきか知るためになされた。会議のとき最良の将軍の一人が早速助言した、まず相手を攻撃する前に、敵の考えていることを知る必要がある、と。早速一人のスパイが準備されて敵の動きを遠くから追い、調べることになった。もとより射撃のために最も欠けているものは弾で、弾はすべて首都に置いてきていた。さながら頭に目の欠けるようなものであった。それ故鉛弾の着くまですべて可能なもの、手近なものを詰めることが決議された。つまり — かつてモスクワ人が弾不足のときに射た真珠がなかったので — 緊急時に

は砂を発砲することとしたが、しかしめったに柵杖は用いないことにした。これは武器を渡すようなものだから、と軍議では話された。つまりめったに敵の頭に銃を投げることをないようにした。せいぜい杖では時に応じて殴ったり突いたりするようにとのことだった。

真の戦争というウリヤの手紙⁽¹³⁾、ヨブの知らせについてのマリーアの軍の驚愕ははなはだ一般的なものの強力なもので、あたかも打ち負かされたかのようなもので、いやもっと強力であった。というのは打ち負かされておれば、敗走していたり、捕虜になっていたりと、かくて弾の届かぬ状態であったろうからである。「霰弾は」と老いた親方が言った、「構わない、でもただ羊毛をかすめて欲しいものだ、わしをかすめては困る」。更に人々を元気づけたのは、自分達とティベリウス人との間には違いがあつて、それは二人の友人カストルとポルックスの彫像の間に審美家達の認める違い、つまり走者と戦士の違いがあるということであった。軍が熱く願ったのは、今すぐにも敵の前に率いられて、さっさと遁走すること、オーケストラのバイオリン奏者として自らの役目をより良く演じて、かくて軍がこの奏者のように戦争劇場全体にただ背を向けて、楽器のみを奏することであった。

全軍の中で、キリスト教的哲学的に考えないもの、そして自分達は今にも死ぬかもしれないと絶えず言及されながらも、しばしば空しく説教されがちであった死の考察をしないものは三人もいなかった。このようにキリスト教徒や哲学者は罪人の厚かましい確信なしに考えるものである。一 かくて聖職者は、自らの葬儀の説教で絶えず死を思い出され、思い出して、チフスの感染の恐れのあるベッドには大胆に近付かず、むしろ自分の家のベッドに留まるものである。

第五章

ここでは戦火が盛んになって、征服が広がる

一時間半後にマリーアの秘密のスパイは仕立屋の軍の中を戻ってきて、途中部隊に、カウツェン人がグロースラウザウの首都を無血で、単に太鼓を叩くだけで征服してしまったことを上の廃墟ではっきりと目撃したと報告した。嘆きというものがどういうものであるか知っている人にグロースラウザウ人の嘆きを描く必要はないだろう。戦争の枢要な悪徳のうち、つまり殺害、飽食、掠奪、逃走のうち敵は先駆けによって先の三つを差し押さえ、なお残しているのはせいぜい四番目のものだった。人間はそもそも戦いのとき人間のようには二本足となる熊とは違って、戦いのとき動物的に好んで四本足に這うもので、それに人間の兵士は鉛の兵士同様に長く使うと容易に赤み（羞恥心）が色褪せて、それで相手に多くの血を流させるにつれ、自らの頬には恥ずかしさの血が少なくなるので、かくてティベリウス人は首都で憎たらしいほどに元気になる他ない（とどの親方も予見した）。彼らは最良の借用証書や文書を殺人罪や宣戦布告によって、神への賛美歌を[戦勝の]テ・デウムによって帳消しにし、自分達の借金を単に舍営によって禁固の代わりとすることができた

一 と定住のマリーア人達は恐れなければならなかった。しかしながら私見によれば、誰かの前額を叩きながら誰かに支払いをする慣習はスマトラ島の慣習と違いはなくて、ここでは以前敵の頭蓋骨の他には貨幣はなかったのである[*1]。勿論人が最も好んで掴むのは間近の頭蓋である。掠奪に関しては、公正であるべきで、異教徒よりはもっとキリスト教徒であるべきである。というのはギリシア人が打殺する動物に特別な勒を付けるようなもので（ギリシア語ではΚαυστικαπηと書くそうである、私はギリシア語は分からない

いが)、公正なことではないからである。神はユダヤ人達に、動物どもが打殺する間は動物どもにその収穫を食べさせるようにと命じたのであった。それ故まさにこうした打殺人はその辛い仕事で太ったのであった。

今や警急号砲が告げられ、行軍が命じられた。絶えざる、大砲の音ではないが、太鼓の音の中、人々は自らの首都を目指して、首都を解放しようとした。全軍の中で、手品師のように人工の火を吹いて、それを厭わしい敵の顔面に吹き付けたいと願わない勇士は一人もいなかった。そして誰もが敵が逃げるならば追いかけると誓った。敵がいかに勇気を失っているかもっと知ることができれば、そもそも勇気が欠けることはなくなるであろう。ロアンゴでは軍が一匹の兎に遭遇したら、軍は即刻勇壮になった。兎は（まことに有益な願わしい迷信であるが）敵の臆病さを告知するという精霊に見なされていたからである。実際敵が兎として姿を現したら、どんな臆病な連隊も多くの命知らずの者同様に敵に襲いかかることだろう。体面が介入すれば、兵士は誰も先駆けの兵から逃げようとしないうらう。

それでも戦闘的勇気は後に二件の偶発事によって消沈したものになった。つまり一人の騎兵大尉が、彼は（今まで矛盾する証言を聞いたことがないが）グロースラウザウのアキレス、英雄と見なされていたが、左右五〇人の目前で大胆に溝を越えて、幸い無事であった。しかしこの飛行で馬の尻尾が落ちた、これは余りに弱く尻尾の革に固定されていたのであった。――（馬喰は皆何という詐欺師どもか）、それも馬の尻尾の大部分であって、馬は単に短い尻尾の残りを上にはじくのみであった。惨めな短いパイプであった。しかしながら勇壮な男にとってこの不吉な喪失は、旗やパシヤの馬の尾を喪失したようなもので、特に気分のいいものではなかった。

二番目の不幸はもっと保証できない、誇張の冗談の痕跡があるからである。つまり一人の乞食が軍用道路沿いに座していたそうである。膏薬の代わりに傷で覆われていて、それも顔だったそうである。ある初心者 of 床屋の職人が喜捨しようとして、ただでこの男の髭を剃っていて、辛抱強いこの男の許でおとがめなく剃り方の練習をしようとしたのだった。実際この男は征服された国のように血を流していた。確かに乞食取締官はその先を読もうとして、この男が血を流して座しているのは、この血の流れで運河のように財貨を導くためにすぎないと敢えて推測していたが、しかし全体この男は勇敢な軍に恐血病を移してしまった。ライオンなら味方を攻撃するほどに酔わせる同じ血で、マリーアの人々は余りに醒めて敵を攻撃できなくなってしまった。マリーア侯爵は早速イギリス製の膏薬（真の絆創膏）を顎の傷に細かく用意して、少なくとも後衛が血を見ないようにしたばかりでなく、この膏薬の軍用薬局全体を参謀本部、連隊本部の最重要の人物達に配ったのであった。將軍、砲兵隊で最重要の將軍に彼は絆創膏の大部分を与えた。不屈の勇気を有する立派な男であった。彼はその勇気を長い平和の間示してきた、しかしそれだけにより短く続く戦時には彼の勇気は若干沈んだ。それ故戦争期間中の彼の勇気の空位を知っている人々はこう考えざるを得なかった、彼が軍事上の勲章の綬や騎士の鎖を胸や心臓のところまとうのは、まさにフランス人の騎兵が馬の頭に、つまり傷を受けたら最も弱い箇所に鎖を置くのとまさに同じ理由である、と。

軍は遂に遠くから自らの門の前に現れた。しかし普段門に近付くときに感ずる喜びはなかった。敵が市内の門番であった。ティベリウス人達がすべてグロースラウザウの兵器廠

から取ってきた、釘付けにした大砲の砲列の背後に立っていて、それぞれの大砲の間には町の消防ポンプがあって、これは狂った陸軍中尉が配置したもので、ポンプの上には一人の長が立っていて、その背後には七人の砲兵付従僕が立っていた。恐れを抱かせる厳しい眺めであった。一人の哀れな無垢の兵士は戦争のとき、全く平和時の罪人が鞭のならば中隊の路地を、逃げ出して鞭を逃れることのないようまことにゆっくりと連れて行かれる具合に処遇されて、つまり敵に向かわず敵から去ろうとするこの忠実な男の動きはしっかりと邪魔されて、それだけ一層剣の攻撃を受けるようにされるといふことに思いが至れば、実際すべてが一層厳しく思われるものである。むしろ逃げ出したい無垢の兵士にとっても厳しいことである。

とうとうマリーア人が火縄が上で燃えている大砲のかなり間近にやって来たとき、ティベリウス人は最良の展開の一つを示した。今や二十以上の開いた消防ポンプが火を吹いて、勇気の火を消しにかかった。思いがけない弾の雨（数百万の水滴からなる）がすさまじく荒れ狂って — 銃からの水がまさに顔と目を直撃し、カエサルがポンペイウスの騎士達の⁽¹⁴⁾顔を攻撃させたようなものだった — 砂を発射することも目を開けていることもできなかった、水の勢いですべて薬池はやられたからである — 騎兵達も後に飛ばされた。馬は目や鼻に注がれて臆してしまい、いずれにせよそれ以前に騎兵が臆してしまっていた

— 最も敏感な箇所、胃と臍に絶えず二十の開いた水の砲口が戯れ、まことの血の海というよりは水の海であった。 — 陸戦から海戦への、火の洗礼から水の洗礼へのこの思いがけない転回はそれ自体戦時公法を有するのか後世が初めて決定することであるとしても、しかし多くの健気な者がこのような水の放射によって、生命の明かりの真の消化設備によって、血よりももっと汗を流す状態に追い込まれたことは嘆いてよいことであろう。この武器はコペンハーゲンの前の火船とさほど変わらないもので、この火船の発明者はマリーア人達よりももっとひどい目にあった[*2]。

何人かは早速降服して、乾かそうとした。多くの者にとって処刑者の絞首索は物干し綱として好ましいものであったろう。誰もが古代ドイツの楯を、水平な豪雨に対する雨傘として欲した。

しかしこの時、馬の尻尾のない騎兵大尉が侯爵に大胆な提案を行った。この案はパシャの三本の馬の尻尾に値したであろうもので、即ち、敵を見下して背を向け、速歩で駆けて、真っ直ぐ敵のただ半マイル先の首都カウツェンに、そこが開いておれば侵入するという案であった。「ざまあみろと思って」 — と彼は自負して付け加えた — 「敵がその大砲で後ろから放つことができるか、追いつけるか、途中水弾薬はなくなるはずだから、見ることに致しましょう」。

マリーア・プアは男であった — 無鉄砲なことは彼の気に入って、即刻彼は作戦計画を承認した。逃走が命令された、それも駆け足で、一分間に九十歩進むもので、行軍のときのように七十五歩ではなかった。

この戦略は効果があった。ティベリウス人は無分別に長くその厳しい水を噴射し、遂に撃ち尽くして、敵は去ってしまった。今や彼らが走ることになった。しかし水瓶座の中のグロースラウザウの諸太陽、濡れた衣服の中のギリシア式彫像⁽¹⁵⁾はすでにはるか先にいて、彼らは医学的理由で冷泉浴を発汗浴にしようと思っていたので、それだけに一層早く行軍した。実際全軍が汗をかいていた。しかしただこの汗は、キケロによるとクーマのヴィク

トリアの汗がそうであるように、敗北を意味してはいず、女神の名前を、つまり勝利を意味していた。

というのは自分の国人が激しく、駆けるグロースラウザウ人の後を追っているのを見た首都のカウツェン人は急いでいたため、仕立屋達は家畜のように追い込まれるであろうと結論付けることしかできずに、門を開けたからである。しかしこれらのラクダは市の針の穴を通り過ぎるや、背後の扉を閉めてしまった。――外では追跡者達が当惑して立っていた。

仕舞に敵はどうしようもなくなって、マリーア人達が強力な門として門を押さえていたので、舎営で一杯のマリーア人の町にむしろ戻ることになった。

*1 Dorville の『旅行記』第二巻。三二九頁。

*2 彼は溺死した。(最近はその逆が言われた)。

第六章

ここでは流血の戦争は別の戦争へ移り、新聞記者が輝く、
そしてこの件全体の終わりの始まりがなされる

両将軍が征服した首都で面前に来させた最初の者は当地の新聞記者であった。ティベリウスはグロースラウザウの記者、『グロースラウザウの愛国的アルヒーフ』の編集者に――一人の意地の悪い道化師で、嘲笑家であったが、こう知らせた。今や週ごとの記事でどれほどの殴打をくらうことになるか、ただ彼自身に懸かっている、しかし少しも手出しをしないことになる――このとき記者の縮れ毛の男は半分微笑んでいた、つまり左の口の端で微笑んでいたが、――もし彼がティベリウスとその戦役を然るべく評価し、つまり十分に高く評価し、世間に言葉を尽くしてそれを称えるならば、それにちなみに彼が自分の国人に対して諷刺の青筋を立てるのは一向に構わない、と。愛国的記録課長は答えた、「喜んでそういたします、自分が将来安全であるならば、誰を笑おうと構わないのです、[打ちべらを持った]道化師や丸太詩[平凡な詩]作家は、丸太や棒を自ら肌を感じたいのであれば、本当の意味で阿呆の丸太でありましょう」。ティベリウスは彼に自分の国の検事職あるいは警部職をも約束した。――かくてシュナーベルは(そうこの話者は言った)色合い[旗幟]と言葉を守った。そして満足して、このグロテスク風物語の筆者は告白するが、筆者はシュナーベルに多くの濃い半陰影を負っており、これは嘲笑的描写のために、例えばグロースラウザウの絞首台囚人兵の描写のために、ただ彼の愛国的アルヒーフから拝借したものである。

これに対して、『カウツェンのためのカウツェンによる戦いの使者』のマウスという名の記者を呼び寄せたマリーア侯爵はこのおどおどした男を少しも不作法に叱らず、むしろ彼に期待を抱かせてこう言った、マウス自身はカウツェンの『戦いの使者』を乱用して、敵とはいえ他人の功績を貶めることはしないことであろう、また自分は『戦いの使者』の記者をとて尊敬しているので、彼に即刻グロースラウザウの陸軍参事官の身分を与えることにする、と。これはマウスにとって身に余ることであった。かくも称賛され、元気づけられて、彼は彼の足許にひれ伏しはしなかったけれども、自分の心の中ではそうして、

自分のできることはすべてすると約束した。

勿論このできることは大したものではなく、それにこの力はシュナーベルの力に劣っていた。しかしマウスは夕方のうちにも印刷して、得がたい侯爵マリーアの中に穏やかな征服者、ほどよい町の総督、明察の司令官を見いだして、それでいて新聞記者のシュナーベルやその国人を批判していなかった。一つにはその両者が怖かったからであり、一つには敬意を払っていたからである。善良な男である、珍しい男ではないが。全体ではそれに分別のある男である。『戦争の短いレジュメ』（それは私の眼前にある）という表題の『戦いの使者』の最初の記事は大部分が侯爵のマリーアを、結果の主導者、指揮官として花をもたせ、仕立屋の功績を取り上げずにいた。その際の彼の比喻は気の利いたものである。つまり偉大な画家、例えばルーベンスやラファエロは戦争画の下絵を力強く描くが、その後の仕上げは弟子達に任せる、だからといってその作品は高貴な立案者の名前を欠かすわけにはいかなかった、そのように侯爵は戦争を企画し、それから弟子達に、兵士達に遂行を任せている、さながら第二のクロード・ロラン⁽¹⁶⁾で、戦闘場面を自ら決め、つまり第一のクロード・ロランが風景を自ら決めたようなもので、人間は第一のロラン同様に他の者達に任せているのである、とそう彼は言っている。

私はちょっとの間新聞記者どもについて思いを巡らし、敵の勝利で突然、しばしば磁石が稲妻でそうするように、極を変えると彼らの並々ならぬ才知は — 反撥していたものが、今や引きつけるわけで、 — 望ましいものか、それともむしろ忌まわしいものか思量することにしたい。勿論一面ではこの才、非難を変えると才は結構なものを有する。いやこれはひょっとしたら、かの奇形の少年に二重の尻を付けたという[*1]自然の贈り物同様に豊かなものかもしれない、この少年は — 両方の尻とも普通パリの尻[下着]を付けたレディーの場合よりも本物なので — どちらを便座に乗せるか自由に決めることができたのであった。すでに申したように、このような二重の臀部を対立する党派のために用意していて、それぞれ打ち負かされた党派にそのうちの一方を見せるという新聞記者は、常に勝者の党派から名声と保護を得るのである。

他面では残念ながら隠しておけないが、このような記者は私がまだ哲学者であった頃の私に、あるいはまだ哲学者であるところの他の人達に似ている。私はまだはっきり覚えているが、私が書生として自分の書齋に座っていて、カントの体系を自分の頭の中に高貴な明かりのための立派なロジのように持ち運んでいたとき、書籍商という悪魔が私の家にエネシデム⁽¹⁷⁾スやフィヒテ、その他の人生の本の梱を送ってきたのだった。これらの本についてはすでに私は他の人々を通じて、この梱が体系を揺さぶるものであることを知っていた。「今の一時にそなたはまだ」と私はあちこち歩きながら言った、「幸せで、カント主義者で、確固として座り、そなたのカントの三脚の上で喜んでいる。いまや、この三脚を折ってしまう梱包の体系を何時にそなたが受け入れるか、それはそなたに懸かっている」。私は自分の好みで、まだ一晩はずっとカント主義者でいることに決心をして、朝になったら梱をほどこいて、ゆっくりと転向することにした。私が批判哲学からの別れの感情を描こうとし、荷をほどこきながら批判哲学を今一度信じながらそれにぎっと目を通した次第を描こうとしたら、胸が痛むことだろう。しかし私がまたフィヒテの大学棟、祭具室での立派な体系を得て、その中に借家人として座しているときに、すぐにまたシェリングの梱が届いたら、何ということになってしまうだろうか。 — しかし私は反抗的に言った。

「この新しい体系を私は受け入れよう。そして余計なことにその後で、また先の体系を転覆させる体系を受け入れよう。しかし私が ― 哲学部の教授職に誓って ― 別様にしたら、私は悪魔にさらわれろ、だ」。しかし私は今では別様にしている。私は通常六から八の体系を寄せ集めて、論駁された体系よりも論駁する体系を先に読み、かくてこの逆の読書を通じて ― 魔女が主の祈りを逆に読み上げて魔法をかけるように ― 幸い魔法を解いて、それで私は今では、余り確信はないが、ひょっとしたら何の体系も有しない男となっていよう。従って私は復活祭の市の後、書店で一人の体系的頭脳の横に立って、この男が頁を開けばいつでもこの男を改鑄し、自ら[悪魔に取り替えられた]奇形児に変えかねない新しい教義の体系に至る所囲まれているのを見ると、秘かな同情を禁じ得ない。「無邪気な者よ」とそれから私は言う。

我々は戦争と新聞に戻ることにしよう。 ― 両軍の部隊は敵の町にしっかり留まっていた。いずれにせよ町の交互の征服は、すべての荒々しい大砲の欠如で、釘付けの大砲すら欠如していて不可能であった。敵の町から出撃することは勧められなかった。敵側の市民が門を閉めかねなかったし、領主はその首都から切り離されて、外の不毛の野に立つことになったからである。両将軍は単に二つの風が意のままになる谷の風車に見えた。そこで、なお立派な軍事会議を開きたいと思ったとき出した案は、毎日ちょっとした別働隊や側光を当てるという案で、村々や敵の別働隊も何かを感じるようにするためであった。しかしこれらの小競り合いの一行はまさに新聞記者の天使達で、つまり彼らの通信員達であった。落後兵が彼らの行商人であったようなもので、それでどの記者も互いに傷付け[シヤグリニーレン]合った。 ― カン⁽¹⁸⁾ペ⁽¹⁹⁾やコル⁽¹⁹⁾ベ⁽¹⁹⁾の聞きたくない言葉である。

シュナーベルの愛国的アルヒーフから若干の記事を引用することを許されたい。私は彼の物語のミュージックが喜劇のプリマドンナでなければ、もっと引用することだろう。日曜新聞の記事はこう言っている、彼らは[グロースラウザウ人あるいはマリーア人]は絞首台山での戦闘の前に、弔辞と棺を前に注文するという素敵な古代ドイツの風習を思い出して真似た、と。その後で彼はマリーアの連隊本部の何人かを褒めて、言っている。彼らは普通トランペット奏者が案内される時のように、大胆に、つまり目隠しをして敵陣へ向かっていった、もっともこの盲目さは作戦を益するよりは害することになった、と。最良の将校の一人を悪意をもって彼は攻撃して、こう言っている。彼は憎しみよりは愛によってはるかに損なわれた男であった、と。そして秘かに傷付いた箇所、鼻[梅毒の影響]を取り上げて、こう主張している。彼は勇敢な男として鼻を失った、彼は敵の女性に決して背を向けることはなかったからだ、と。彼はこの男の後では周知の見解によれば古い彫像ではまさに鼻が最も損なわれているものであるという点で擁護しようとしているが、しかしまた偽善的フィクションも導入していて、自分をガラス製と思っていたかの男が座ることを避けたように、別の男は火の中に立つことを恐れるかもしれない、この男は一事が万事の比喩[一部で全体を示す代喩]によって、自分の鼻に従い、自らを蠟製と見なすからであると言っている。しかし全体的には彼はこの男を戯画化しようとしている。

同じシュナーベルの日曜日の新聞では両義性は薄れる。文字通り写せばこうである。

「我らのティベリウスはまた勝った、マリーア侯爵に勝ったのではないが、その部隊に勝った。彼らは這いつくばっている、居酒屋でのことである。私が詳述しないうちに、このような居酒屋での小競り合いでは何も決しないし、証拠にならないと前もって言わない

で欲しい。勿論最初は単に証拠になるだけで、後でようやく決することになる。というのは一人の散兵は一別動隊を形成し、別動隊は一連隊を形成し、連隊は軍を形成するからである。

ティベリウスの連隊の一鼓手がある居酒屋で二つの敵の翼に出会った。そのそれぞれの翼は一人の兵から成り立っていた。しかしこの鼓手は一つのテーブルのところに軍に大胆に向かって陣を敷き、自分のグラスを要求した。彼は鋭く両翼を見つめた。彼はグラッテナウアーの見解を承知していて、確かに昔の戦争では鉦泉は中立のものに見なされたのであるが、しかし今の戦争ではそうはいかない。実際居酒屋、飲み屋、料理屋は — 健康の飲み客のこれらの鉦泉は — ありきたりの戦場であって、ここでは兵士はまさに最も多く使用し、最も近くに有しているもの、つまり椅子の脚やジョッキを武器に変えて、さながら鐘を大砲に変えるようなもので、かくて酩酊して互いに悲劇を演ずるものである。かくてギリシア人は繊細なセンスを有していて、アポロではなくバックスを悲劇のパトロンに選んでいる。ちなみに傷ほどすぐに素面にするものはないというイーゼンフラムの言葉[*2]が正しいのであれば、酩酊が日常茶飯のことである家でほど傷が治癒の効果を上げるところはないであろう。空のジョッキは、良く投げられるならば、ジョッキの中身が頭の中でちぎったものをすべて頭でまた修復するであろう。 — 要するに鼓手は両翼の顔をちょっと偵察した後、自分の太鼓のバチを取り出して、右のバチで右翼の頭を、左のバチで左翼の頭をはなはだしく叩いて、それで頭から若干の血が流れたのであった。彼の真の意図は、不明なわけではないが、議論の分かれるものである。というのは敵の見解はこうで、鼓手は両翼に単に瀉血を施したにすぎない、両翼が余りに彼に平然としていたからであるというもので、この際敵はローマ人を引き合いに出している。ローマ人は余りに大胆に振る舞う奴隷に瀉血を施したというものである。他方味方は私と共にこういう見解である。バチ叩きは若干の頭の傷でただマリーア人の記憶を、彼らの敗北に関して、強め新たなものにしたかったのである、周知のように頭の傷は薬草帽子のようにしばしば記憶を増強する作用があるからである、と[*3]。

この記者が先の侯爵の首都にいながら、大胆にも新聞に号外を付けたのはまことになお向こうみずなことであった。号外の中でマリーア人を非難してこう言ったのである。マリーア人は惨め極まる発音の一つを有しており、v と f を区別することすらできない。それで自分は以前彼らが彼らの侯爵の宮殿の中庭で万歳[vivat]を叫んだとき、残念ながらより確かな耳をもってしてもいつも耳にしてきたのは Fi Fat[ちえ、自惚れ屋]であって、これは全く意味を損なうものである、と。

火曜日新聞、水曜日、木曜日、金曜日、土曜日の各新聞から抜き出すことは余りに冗長であろう。十分に彼はかくしてマウス達を怒らせて、毒の葉[紙]でもってするように半死の目に遭わせた。

記者のマウスはむしろ侯爵マリーアの賛美に限っていて、古着屋やティベリウス人についてはまだついでに触れて、別様に前もって彼らから触れられることのないようにした。

ただ追加して彼は彼らの食欲、販売欲を描いた。これらは彼らが — ほんの二歩離れた — 外国の境の村の公然たる教会堂開基祭の際、食べ物や金を手に入れる代わりに、ただ敵と殴り合いをしなければならなかったとき感じ取ったとされるものである。この描写の中での彼らの欲望や運命はかの犬どもを思い出させるもので、これらの犬は（垂直に）

立っている常備軍として人間の衣装で喜劇を演じなければならないもので — 半ば見えている尾を付けた無言の端役達は惨めに見えるもので — 鞭が彼らの強制的役割の機械仕掛けの女神で — この端役達は自分達のコトルヌス[悲劇役者の高靴]、つまり彼らの二本足から徒に四本足に下りて、劇場的認識よりは全く別の認識を示したがつているのである。喜劇にしては全く面白くない眺めである。

しかし結局新聞記者達はますます野蛮に喧嘩した — シュナーベルは悠然たるマウスを激昂させた — 名前に関する言葉遊び、例えばマウス風にする[出しゃばる]、とかマウス風を書く、あるいはシュナーベルのままに[率直に話す]はありきたりのことだった — マウスは、かの戦争画家が筆の勢いをつけるために軍楽を演奏するよう命じたように、通常トランペットを自分の横で吹奏させて、ファーマ[風説の女神]のトランペットを更に強く吹こうとした。 — 要するに戦争は今や陸から紙上に移った。両記者は結局真剣な党派の信奉者にならなくなって、最初は侯爵に脅かされて見せかけで信奉者を演じようとしていたのであるが。

両国の戦争の民は全く別様であった。戦争は今や長く続き、七年戦争と同じほどの日数、つまり一週間続いていた。従って八日間という中国の悲劇より単に一日短いで、一方コルネイユは悲劇の時間をさながら先のマグデブルクの要塞司令官⁽²⁰⁾のように単に三〇時間に限定したものである。両首都では部隊は競って食べた、しかしティベリウスの兵が最も多く食べた。というのは、自分達に数で勝る仕立屋達はその数多い胃で町を食べ尽くすであろうことを忘れていなかった彼らは均衡を目指して、グロースラウザウでは一人分の胃に対して倍の分け前、配給量を指令することにしたからである。ちょっとした掠奪、借用証の接收等はティベリウス人の原則、すでに味方間ですべてが共同であるのであれば、ましてや敵のものは共同となるとむしろ結論付ける彼らの原則に比すれば問題にならなかった。いや彼らの間にはこう尋ねる者もあった。戦争で自他の血が流されるべきなのであれば、戦争にカルトウジオ会士の惨めな年に五日の瀉血日のような権利が認められるのではないか、この日には会士達にはより脂っこい食事や修道院規則の自由、散歩の自由が、いや女性と一緒にいることさえ認められるのである、と。 — 勿論生の営み、つまり古着屋や仕立屋は止まってしまった。売れるものは何もなく、寸法を測ることは何もなかった。両軍とも感じていることは、天文学者達はカレンダーの地球に対して適切な印を選んでいる、つまり十字に円である(♁)、ちょうどヴィーナス[金星]をほとんどテュンメル⁽²¹⁾のように逆の円(♀)で印付けているようなものであるということだった。 — しかしこの哀れな十字架に我々両軍は釘付けになっているのではないか。我々はそうではないか。片方の頬を打たれたら、福音書に従ってもう一方の頬をすぐに差し出す我々、そして勇敢なスパルタ人の神への願い、侮辱に耐えるすべを学びたいという願いをする必要は何もない我々、このことがすでに天性になっているからその必要はない我々はそうではないか。

こうした考察は残念ながら両首都で頻繁になされて、両軍の部隊の間で侯爵に対する陰謀となっていった。陰謀には首謀者が欠けていたが、司令官の間に容易に見つかった。というのはある重要な事情のせいで、 — この革命の将来の歴史家は皆この事情に注目することになるだろうが、強力で決定されたのである。それはつまりティベリウス人がティベリウスに飽いていたように、マリーア人もマリーアに飽いていて、両方の人々とも侯爵を取り替えることを願っていたという事情である。領民の間では領主の意味は学生達がかつて

領主と呼んでいたもの、つまり帽子の穴程度のものでしかなかった。「私は君よりも多くの領主を有する」とミュージズの息子は言う、「領主」の出てくる歌のたびに帽子は突き刺されるからである。勿論カウツェン人やグロースラウザウ人は穴について帽子や制服の穴とは別の穴を考えていた。例えば古着屋達にとって、永久に軍服を着せられているのは余り気に入らなかつた。彼らはむしろ自分で軍服を売りたいがっていた。ティベリウスは国の半分だけを、つまり女性だけを徴募免除としていたからである。しかし一つの国は冬ではなく、冬には周知のようにツグミは雄しか見られないが、むしろ雌で一杯の春であるのがましではないか。このことを決定できるのは多分古着屋ではなく、学者であろう。

他方仕立屋達も自分達の侯爵に満足していなかつた。この侯爵は人間よりも金を、頭脳よりも人頭税を求めていた。大きな（侯爵の）家を造るためであった。それ故古着屋達は言った、「単に贅を尽くすだけで、演習を好まないマリーアのような男が我々の気に入っている。そのための古着なら十分に貯えはある」と。仕立屋達はこう続けた、「ティベリウスのような男がまた我々には好ましい。職人の親方や職人、藪医者を残念ながら我々は水夫徴募用に十分に有する。しかしティベリウスのような侯爵、贅沢をせず、光輝や式部官を必要とせず、自分と似た者なら誰でも食卓に呼ぶ侯爵を我々は有しない」。

要するに領国ではなく侯爵を代えるという相互の願いが信じがたいほど両師団の將軍の陰謀に寄与することになった。それで侯爵達を敵の首都に残したままただ人民だけがまた帰還する手筈になった。

結果は、分別ある男達が予言したようになった。まさにこのような戦争は両国を互いに親しくさせ — まさに近い国々が最も必要としていることであるが — 半ば和解させた。誰もが今や、血を流し、血を流させる代わりに、むしろ生き、生きさせることを欲した。この観兵式と戦争時代の平和的結末を考えてみると、あたかもすべてはゲッティンゲンの教授達に対する周知のハノーヴァーの法令であるかのように思われた。即ち政府はすべての教授に、神学の博士から法学や倫理の教授にまで、こう命じたのであった。 — これまで教授間では相互の友好よりも敵対が多く見られたので — 毎週日曜日四時に遊歩場を一緒に散歩して、若干寄り集まり、一緒にいることに慣れて、かくて互いの反撥を少なくすべしというものであった[*4]。さて賢明な政府は我々皆と同様に、教授達は体系的に議論せずには物理的に一緒に行くことはほとんどないし、百もの議論の演習が四時の体育的演習に付随することになると予見していたことだろう。しかしそれでも政府が一緒に歩くことを（単なる諷刺家にとっても素敵な眺めである）命じたのは、教授達はまさに間近の戦争で — 我々の仕立屋や古着屋同様に親しくなるであろうと前提していたのであった。

要するにカウツェン人とグロースラウザウ人は皆、戦争中枢部、師団將軍や交渉人が行った短い静かな調査に従って、帰宅し、その場に居合わせる適当な敵の侯爵の支配を、すべてが以前の通りに、あるいはそれ以上に良く行われるならば、受け入れる用意があると即座に決まった。占領された両国の侯爵は（このことは厳かに決定され調印された）これらの国に人質[Geisel]として（アッティラのように積極的な鞭としてではなく、消極的な人質として）許される限り留まり、支配して良いということになった。

すべてはうまくいった。それぞれの軍が帰宅した。ただそれぞれ侯爵はそれぞれの町にさながらその女王蜂の牢獄のように残って、気晴らしにそちらこちらで支配した。多分マ

リーアは泣き、ティベリウスは呪ったことだろう。ちなみにこの両国のどちらも、現今の多くの国のように、祖国愛と侯爵愛とで固く結ばれた国家ではなく、単に緩やかに並んでいる家臣から成り立っていたのは幸いであった。現今の政治の難しいが、しかし必要な傑作であって、籬なしにただの桶板から作らなければならない桶屋の傑作に似ているものである。

しかし今やクーデターに必要な合法性、支柱を与えることがとりわけ急がれた。それ故両国の代表者がパリへ送られた。すべての信頼のおける地図や証言を持たされていたが、それはナポレオンにこの両国が存在していることを納得させるために必要なものであった。

直に堅固に支配して欲しいという依頼も代表者は携えていた。

しかし案の定重要案件が切迫しているために、今の時までこの小さな件については決定されなかった。両侯爵が占領された暫定の国を差し当たりまだ支配し続けている。

*1 インドについての書簡、一八〇五年の『大胆録』

*2 神経について

*3 ニコライは病理学の続刊の中でペトラルカから引用して述べている。教皇クレメンス六世はその途方もない記憶を単に頭部の傷に負っていた、と。

*4 コンスタンチノーブル等、第2年報、九分冊。三六〇頁。

*

一八一六年干し草月[七月]の後記

— 今日の干し草月もなお両侯爵はその王座に鎮座している。というのは当時 — 一八一〇年 — ナポレオンは多くのそれより重要な事物、ハノーヴァー — オランダ — 二番目の皇后⁽²²⁾ — ハンザ都市と海岸を受け取らなければならず、二つのかくも小さな侯国について何らかの詩的文言、あるいは法的認識を發布して、それを受け取らせる時間が一分も残っていなかったからである。今やそれ以上に長く両侯爵は居座っている、ドイツ人の決定者を待っているからである。というのはドイツ人の針は、時計の正しい月針同様に常に三十一日の月を有し、三十日の月を有しないからである。キュヴィエによると先史の最大の動物の骨格はナマケモノの種族に属するように、ドイツもひよっとしたら同様に大きく同様になまけているのかもしれない。いわば一人の巨人で、これはかつてスペインで侍従が踊る皇女達に対してそうしたように、悠然たる足調で跳ねる小人の女性の長裾を持つのである。 — — しかしながらこの報告の第三版では読者に、いつ暫定の意味する時間がより高位の者によって定められるかきっともっと正確な時間を伝えることができることだろう。

V.

晩夏の蝶

一八一六年の終わりの頃に

私はここで先の薄明の蝶に対して晩夏の蝶を後追いついて舞い飛ばせる — その羽根には輝く鱗粉は多くないし — その千もの目はそれと同程度の蝶の身の丈を越えて見るわけではなく — その稀少さも大したものではない — しかし本年と共に消えないうちに、しばらくこれらが舞って、春のために若干の卵を産み付けることを許して欲しい。

1.

フランス人の亡命貴族や帰国者

年老いた亡命貴族は数十年前に止まってしまった時計に似ている、これは押すといつでもただそれが止まってしまった時だけを告げて繰り返すのである。

2.

フランス

不幸な国だ。 — 海水で満たされ、囲まれた船は、沈むとき、まさしく今一度そのマストを上に向ける。そのように汝は汝のマストを、不幸な、ただ王笏の刺し傷で浸水している国よ、二回持ち上げた。一度目はバステューの嵐のときで、二度目はナポレオンの無益な戦場においてであった。誰が汝を持ち上げることができよう。人間はほとんどできない、時ならひよっとしたらできるかもしれない。

3.

より美しい時計草[受難花]

庭の古い時計草はキリストの拷問具を表している、その尖った葉で茨の冠を、その帽子形で胆汁で一杯の海綿を、血の斑点の筋で鞭を、他の部分で釘や槍、戒めの柱を表している — ただ十字架だけは模していない。かつては大きな時計草であって、その葉や花にすべての拷問具が出現した王国を君達は知らないのか。いや小さな花には欠けている十字架もその王国は有していた、素敵な堅いもので、鉄製のものだった[*1]。

*1 プロイセンの国はいつも地理学的歴史的状態と方向に従って明かりを広めてきたこと、そして最近その光線はプロイセンでは国家を高める炎へと凝縮していることを考えれば — 更にまた若々しい学習者、教師が一種軍人的になって、試験や鍛錬、諸力を持ち帰っていることを考慮すると、大学の首都移転⁽¹⁾、つまり偉大な学者が偉大な政治家や商人と共同すること、少なくとも共にいること、教義と行為とが交互にかみ合うこと、青少年を勇気と英知の一人のアテネを通じて教育すること、即ちこうしたこと一切を、地理学的完成の隙間を精神的完成で補うための未来への偉大な手段と見なすことができよう。殊にこのドイツの国家では珍しく膨張していく首都は、その精神的腕を広げるとラインを越えることも、ケーニヒスベルクに達することもできるからである。その際多くの面で攻撃を受ける国家にあっては、それ故に自ら多くの面で攻撃することができるという事情も考えられよう。

4.

ドイツの民衆に対するドイツの侯爵達の第一の義務

様々な重要な義務の中でどれが第一であろうか。 — 貴方らのドイツの民衆を信頼することだ。他の民衆がまず自分達の共和主義的憲法のために耐え、果たしたこと、この血と金をドイツ人は三〇年戦争のとき周知のようにすでに自分達の侯爵の主権のために犠牲にしてきた。対立する高位にあっても誰が古代バイエルン人、ティロル人、ヘッセン人、ブランデンブルク人、東プロイセン人、ポメルン人、ザクセン人の自分達の代々の侯爵に対する好ましい犠牲の熱意を崇高なもの以外のものとして見ることができよう。 — 君達侯爵よ、考え給え、民衆は君達に対して、君達が民衆に対してヨーロッパの圧倒的王位僭望者に敵対したよりもひよっとしたらもっと忠実にその僭望者に敵対したのかもしれないということを、そしてまた民衆がこのことを成したのは、僭望者が君達の王座を自分の王座の階段に、いや手すりに貶めたときであった、あるいは僭望者が国の巢房を切り取る時不器用に養蜂家のようにその女王をナイフで砕いてしまったときであったことを考え給え。

信頼するために、考え給え。民衆には多くの侯爵にとってフランス革命を突き戻す総長代理による泡が残ったほどの滓もフランス革命から残ったものはないことを、そして民衆のみが外国からの圧力や故国の苦難から活力を得るのであって、その支配者は得ないこと、いや支配者は外国からの援助があっても得ないことを考え給え。この民衆は君達のために最高のことを成した、つまりパリへの最初の戦役なんかではなく、二度目の戦役を成したのだ。熱狂ほど反復の難しいものはない。しかし民衆は反復をなした。それも[もっと厳しく処分しておれば]ナポレオンに対して二度目の熱狂や犠牲は少なくて済んだであろうと思われる時期に戦ってくれたのであった。

しかし何のために — 考え給え — この炎上、再燃が生じ、執筆する手すらも戦争の拳へと固められ、平和の書齋が暴力の陣営へと転じて、その演習をし、それに慣れ、詩文の古代ドイツの草花や新ドイツの木々の花によって敵に対して若者の心が強化され陶醉し — ユーノー女神がただ花に触れて軍神を身籠もり生んだようなもので、 — 何のためにこうしたことすべてが当世の勇敢な温かい市民の中に生じたのかあるいは増加したのか。法と君達への敬意故に他ならない。外に対しては復讐の姿を取る倫理的感情が内に対しては従順の姿を取ったのだ[*1]。

侯爵達よ — 信頼するために、考え給え、 — 我々に共和制の結婚[殺戮]で悩ました外国の権力者達ですら、我々からガリアの血の結婚[虐殺の聖バルトロマイ祭日の夜]を受ける怖れはなかったということを、そしてドイツ人は、親戚筋のイギリス人のように合法的に同盟を結び、連邦や、ハンザ同盟、同胞、ギルド、あらゆる種類の学問的協会を設立しながら、暴動やシシリー島の虐殺のために結び付くことはほとんどなかったこと — つまり外国人に敵対する動きすらなかったことを考え給え。心の動きについては一層少ないと言えるからである。王座に対しては山に対して言えることが多分妥当するであろう、つまり山の上にかかる雷雨は常に民衆の谷に落ちかかる、しかしながら嵐の谷や平野が上に稲妻を発することはほとんどない。

信頼するために考え給え、民衆は君達を信頼し、彼らの希望を静かに連邦都市[フランクフルト]でのより高い選挙や戴冠に対して抱いていることを考え給え。そこではかつて彼らの家族は別の希望や、時には不安を見いだしていたのだった。

さて、君達侯爵が、この邪心のない、復讐しない、決して偽善的でない、また扇動的でない民衆を評価するすべを心得ていて、臆病な僭主ディオニシウスが単なる子供達に警護して貰ったよりも安全に身を守って貰えるこの宝の領民を大事にできるならば、一 決して悪徳の同盟はできない民衆のこのタキトゥスの時代から続く徳の同盟を、君主同盟と後には国民戦争[ライプツィヒの戦い]の双子座を出現させたこの徳の同盟を認めるならば、君達は誰を信頼しようと思うだろうか、千年以上続くドイツの徳の同盟か、それともシュマルツ⁽³⁾みたいな顧問官か。

*1 この種の何と心温まる現象がここに記されることだろう⁽²⁾。ヘッセンの国会と将校達はその提案によって、ヴェルテンベルクの国会、ティーメル⁽²⁾の百姓達、また様々な大学のミューズの息子達は同郷人会の廃止によって記される、等々。それにドイツ人である限りより小さな侯爵達も輝かしい列に受け入れない法はない（例えばまずヴァイマルやコーブルク、ヒルトブルクハウゼン、ナッサウ等の侯爵である）。彼らはより大きな侯爵達の模範になり得る者である。

5.

平和の法

平和の操作は今では戦争の操作よりもひょっとしたら難しくなっていることだろう。しかし平和の操作の方がより重要である。アテネの砦ではオリーブの実を取るのには単に無邪気な子供達に許されていたという昔のアテネの法が生かされるべきだろう。しかし戦争の勝利は通常平和時の外交的大臣的勝利よりも倫理的に勝ち取られる。

6.

全ての非道な暴力の終わり

この暴力は猛烈な奔流の渦のように終わる。これはその釜底を最後にはなはだ広げ、空ろにして、自ら消滅し、停止してしまわざるを得ない。

7.

光[明かり]の力

侯爵達よ、民衆の洞察の力は付与し、光は炎を与えるということを、君達は日々忘れがちであるから、日々最新の戦史から思いを新たにすることがいい。歴史では神々の歴史同様、ミネルヴァが最も巨人達に対して神々を守ってきた。一 炎の民ではなく、明察の民が最後に勝ち、最も長く続く。モンゴル人からアルジェリア人まで何という奴隷の民がその情熱や熱情、従って勇気を有することか。一 これに対して明察は、例えばイギリス国でのように、すべての階層を通じて広がり、あらゆる状況の中、すべての方向へ作用し、どんな短い熱意の火花よりも長い重荷のより確かな持続を付与する。思考の力と自由は国家の太陽光線であり、この許ですべての滋味は甘いものとなる。植物は、太陽光線を受けないと、どんなに温かくて、空気や湿気があっても、力と色彩を欠くようなものである。

8.

人類と個々の民族の進歩

我々の民族が一つの進歩とかあるいは飛翔をもすると、我々は早速、人類全体と一緒に付いてきて、後から飛んできたと思ってしまう。後追いでいないことに気付くと、世界の大きな停滞を嘆き、数千の手を有しながら、いつも与えるための無数の手を残している時代のことを残念に思う。全体もまた進んできた、ただしかしより大きな空の中で進んできたことを忘れていたからである。同様に月の下で地上の雲が移りすぎてゆくと、月が動き進んでいると我々には思える。しかしその見せかけにもかかわらず、月がその場から動いていないと不思議に思うのであるが、しかし最後に気付く。月もまた進んでいるが、我々の雲の空よりはもっと大きな空の中で動いている、と。 — 単なる晩夏は単に個々の民族のためにのみあるのかもしれない。しかし人類自身には初冬というものではなく、せいぜい単に余寒のみがあるのであろう。

9.

諸国家への裁き

神の裁きの前に無実の者によって罪ある者が呼び出されると、この者は死んで出頭しなければならない。この信仰は、無垢が神に裁きを求めるとき、まず諸国家において真実となる。諸国家はその権力者達と共に没落し、処刑される。

10.

上から下への光の宣伝

勿論現在ではほとんど苛酷な侯爵達でさえ、その臣下の精神を熱心に育成しているが、しかしそれはこの精神の成長に一種の限定を設ける体のものである。ちょうどビール醸造業者が — 卑近な譬えを用いれば — 温室で麦芽を育てながら、しかし麦芽を一インチの十分の二以上は長くしない、さもないと乾燥炉で有益な麦芽へと枯れないから、長くしないようなものである。 —

しかしながら当世私は侯爵であれば、次のように考えることであろう。民衆は容易に立派にコルク栓をされた、王侯的に封をされたビールやシャンパン瓶に似ているかもしれない、この瓶の中にコルクが抜かれない間は閉じ込められた[酒]精が泡を立てずに静かに休んで育つ。しかし抜かれたら変わる。絶えず泡がきらきらと上がり、霊[精]が出続ける、たとえまた栓がされてもそうである。今やヨーロッパでは絶えずできるだけ秘かに栓をしようと思っても、透明なガラスの栓をしたり、イタリア人がワインをそうするように、柔らかなオリーブ油で防ごうとしても現れることだろう。権力者達は民衆の頭脳よりも単に民衆の心を支配するだけである。民衆は暗くされるよりも容易に毒を与えられる。

11.

以前の希望

山々に囲まれていると、すべての対象は余りに間近に思えるものである。そのように戦争の時の高さや大きさは平和時の同様の高さを余りに間近に、それ故余りに大きく見せるものである。

四句節の説法の教訓ではなく、時代の教訓

政治的天候の転換期、齋日、国家にとっての分岐点がある。上から来るが、しかし地上の上部が受け入れるよりももっと高いところから来るそういう分岐点である。 — こうした時期を神聖なものとして捉え、その中でできるかぎり最善のことをなすがいい。このような高貴な時代がクセルクセスに対する勝利の後、ギリシアの上で陽光を受けて温かく存在した。そのときすべての古い花々が開花して、すべての若い実が成熟した。このような時が目下ドイツでは最新のクセルクセスに対する勝利の後働いており — それも最もドイツで活発に働いている。というのはドイツだけが最も長く、最も厳しく苦しんだからであり、そしてドイツの中でのみ諸国や諸世紀は砲車で鋤かれて休耕地となったり、雑草地となったり、あるいは敵の意図に反して新鮮極まる開花や繁茂となったからである。

祖父達の顔つきや病気がしばしば父達を飛び越えて、孫達に飛び移るように、我々は我々の父達よりも祖父達にひよっとしたら精神的に似たものになったかもしれない。そしてちょっと前の過去がまた青々と発芽している、少なくともしばらくの間はそうである。しかし空の場合と同様に政治的空でも稀な上方の惑星の会合によって生じたこのような時代では、我々が耕作を種蒔きとは見なさず、我々の克服した苦難を完結した行動と見なさないとき、はじめてようやく収穫ができるものであろう。我々は辛い過去からようやく脱したばかりで、実りをもたらす甘く熟した未来をまだ手中にしていない。君達は信ずるか、より高い世の紳士ども、金と快樂の利己主義者達、狭く冷たい心の持ち主、賢しらな者達、若々しい瑞々しい世界とは夙に離反した者達が突然ピタゴラスの同盟に変身すると信ずるか。それとも君達は信ずるか、下々の民衆、戦争の情欲の中で困窮と復讐心から諸力を倍にして巨大な重荷を動かし奇蹟の救助を行ってきた民衆が、今や平和の時にもその緊張を緩めずに緊張を繰り返すであろうと信ずるか、そして民衆が戦争の後、古代ローマの平民の共和主義的軍として残るであろうと信ずるか。

それ故民衆の中では公の精神が、偉大な公共心としてまず養育されなければならない、それもその公共心を満足させることによってそうしなければならない。すべて至高のものはまず所有してみても分かるように、そして善きことを本当に愛するためには善きことをしなければならないように、民衆は自由な政府というより高い善を無償で得て、然る後にその政府にふさわしいものとなる必要がある。ただ国会のみが民衆を公共心へと高め結び付けることができる — 連邦議会のみがドイツをそうできるようなものである。というのは民衆のすべての精神的な高揚の中では、祖国のための戦争を除けば、平和時には新聞[出版]の他にはなく、新聞はかつて比較的大きな王国[プロイセン]ではほとんど国会の代わりとなったもので、更にはこの国会そのものの他に自由で、完全で、選抜されたものはないからである。そのように民衆はその憲法を、単なる侯爵個人を愛するばかりでなく、愛するだろうし、自らの幸福を、単に戦争時や平和時の悪徳や個人的重荷の不在の中でのみ探そうとするのではなく、一般的法の享受の中に探そうとするであろう。戦争時の一時的な圧力よりも平和時の圧力は今や何と深く大地へかがみ込ませることだろう。君達侯爵よ、政治家よ、君達を将来困む民衆は、倒された民衆ではなく、起こされた民衆なのだ。この民衆のみが君達を歴史の中で偉大に描く、剣でもってのほの白い勝利とかペンでもっての国々の取得が偉大に描くことはない。ちょうど湖は — この比喩が余りに卑小でなけれ

ば 一 その美しさをその大ききで得るのではなく、湖畔の周囲で、平野やワイン畑、村々を湖に写している周囲で得るようなものである。

今や侯爵達が最も強力に神聖な影響を及ぼすために、時代の息吹を受けた青年達の諸力が意のままになっている。青年達は自らと敵を犠牲にするという軍旗の下での誓いを平和時も守ろうとするだろうし、以前市民や侯爵達のためにしたように、同様に今でも市民のために進んで戦おうとするだろう。侯爵達の側にはこうした炎の精神の他になお時代の光の精神が、つまり全ドイツ圏の、そして全学問分野の高い思慮の作家達のシンシナティエ協会⁽⁴⁾が控えている。このような人々の前で、この人々には更にその教師や弟子、偉大な司令官、商人、政治家、世の紳士が加わるのであり、さながら大きな町の諸時計で、これらは皆互いに時を告げて、時刻を数えるのが難しくなるが、しかしそれでも皆同じ時を告げているのであって、この人々の前で、侯爵たる者は、このような手や心、頭脳を有しながら、半ば枯れ、半ば刈り取られたかつてのドイツよりももっと素敵なドイツを植えつけるという、つまり古いドイツを断った戦車よりも、将来もっと強力に、武装し断ち切る凱旋車や戦車を食い止め、外し、砕く新しいドイツを植えつけるという永遠の名声を怠るならば、忠実な温かい助手が欠けるとか他人の準備が欠けるといって弁解することはできないし、いや侯爵達の手本や先行者そのものが欠けるといって弁解することすらできない。

君達あらゆる種類の、王冠を戴き勲章を身に付けた権力者達よ、更に考え給え。君達は将来すべての責任を負うかすべての栄光を得るのだ。千もの星や太陽が日中昇り、沈む。しかし誰もその形、進行を見ない。ただ我々の太陽が昇るだけである。そのように戦場では数千の者が気付かれず勝利し、死ぬ。ただ勝利し倒れる英雄のみがその輝きと共に目撃され、名付けられる。同様に市民生活でも百もの輝く諸精神が人知れず朝と夕を過ぎていく。一 そのように、君達高貴な者よ、君達の面前の幸運は、その中へ皆の幸運が隠されるとき、羨むべきものだ。一 しかし小さな星々は我々の日中目に見えず去っても、しかし新たな世界の夜にはほの白く輝いて出現するように、そのように人知れぬ精霊の星々もいつかは別の世界でその光輝を見せ、諸恒星の下に現れる。

一 筆者はこの四句節の説法をも 一 筆者は、全能の者に感謝しながら、過去の薬剤のことを治癒した現在のことで喜んで忘れることにするが、一 またしても自分の希望と展望を記して締め括ることにする。この希望と展望は、先のそれが時代の広大な霧の中ですら結局本当のことになったのであるから、霧が落ちて、露として花々の中にあり、朝日が丘の背後にあって、金色に輝き始めている現在、多分もっと容易に実現することだろう。

訳注

火星と日輪の王座の交替

序言

- (1)その絵、一八〇六年のフランス人によるヴァイマル掠奪の際にこの絵は失われた。
- (2)象勲章、クリスティアン五世によって一四五八年創設され、一六九三年更新されたデンマークの勲章。
- (3)殉教者の死、カトリックの教義、「殉教者達の血は教会の種なり」をほのめかしている。
- (4)リュッツェン、リュッツェンでの一六三二年の敗北の後、十六年してヴェストファーレンの和平が締結され、一八一三年五月二日リュッツェン近郊の戦いの後、十六週してナポレオンはライプツィヒ近郊で敗北した。
- (5)グライム、『プロイセンの歩兵によるプロイセン人の軍歌、凱旋歌』。(一七五八年)
- (6)エルランゲンで活躍、Joh. Paul Harl.
- (7)Joh. Jak. Moser (1701-85)、ヴュルテンベルクの国法学者、愛国者。
- (8)四分割太守、フリードリヒ・ヴィルヘルム三世、アレクサンドル一世、フランツ一世、スウェーデンのカール十三世。その先祖とは多分フリードリヒ二世、ピョートル大帝、ヨーゼフ二世、グスタフ・アドルフ。
- (9)ヨハネス・フォン・ミュラー、彼は一八〇九年に亡くなった。ベーレントによるとフォン・ゲンツ男爵はイエナの戦いの後のナポレオンに対するミュラーの譲歩した態度に怒って、ミュラーがいつの日か篡奪者の敗北とドイツの自由、繁栄を目にすることになるよう呪ったそうである。ジャン・パウルは意図的に反論している。
- (10)国民軍兵士、フィヒテは解放戦争が始まると(一八一三年)国民軍の兵に志願した。

大晦日の夜、一八一三年を支配している惑星の火星がその後任の日輪あるいは太陽神に一八一四年の支配権を委任する件の簡略報告

- (1)モンフォコンからモーリッツ、フランスの古代研究家 Bernard de Montfaucon (1655-1741)は一七一九年から二四年に十五巻の『図象で説明され描写された古代』を発表し、Karl Philipp Moritzは一七九一年『古代人の神話学』を書いた。
- (2)市民冠、古代ローマでは功績のある市民には緑の小枝で造った栄誉の冠が授与された。
- (3)ドレスデン、ライプツィヒの間違いであろう。
- (4)注の出典は P. Fr. A. Nitsch の『新しい神話学辞典』(一七九三年)からと思われる。
- (5)Johann Arnold Kanne(1773-1824)、神学者、諷刺家。『インドの神話の体系』(一八〇二年)。
- (6)Joh. Aug. Rösel von Rosenhof(1705-59)、自然研究者、銅版彫刻師。『月刊昆虫の楽しみ』を書いた。
- (7)プロテクトル、ライン同盟でナポレオンはプロテクトルの職に就いた。
- (8)ニュルンベルクの書籍商やゴータの国民新聞記者、書籍商 Joh. Philipp Palm(1768-1806)の射殺と国民新聞の編集者 Rudolph Zacharias Becker(1752-1822)の投獄をほのめかしている。Beckerは一八一四年『十七ヵ月のフランスの捕虜生活のベッカーの苦しみと喜び』

の中で投獄について報告している。

(9)ドイツについて、『最も深い零落のドイツ』というのが、パルムが射殺されたときのピラの題であった。

(10)altitudo は高所と深みの二重の意味がある。

(11)外国人財産没収法、フランスの封建的法律で、それによると領国で亡くなった外国人の遺産は領主のものとなった。

(12)外套、ナポレオンの戴冠式の外套は勤勉の象徴として蜂が刺繍されていた。

(13)八月の諸祭典、ナポレオンの誕生日八月十五日は国家の祝日であった。

(14)復讐の女神祭 (Furinalien)、これは古代ローマではジャン・パウルの言うように復讐の女神に捧げられたのではなく、女神 Furina[恐怖を与え、死に関係する女神]に捧げられた。

(15)ヴルカンの夫、古代神話によればヴルカンは、軍神マルスと妻のヴィーナスの密通の際二人を鉄製の網で捕らえた。

(16)Donatien François de Sade(1740-1814)、当時精神的に錯乱した状態にありながらもシャラントン精神病院で存命であった。彼の『ジュスティーンあるいは美徳の不幸』は一七七六年初版。

(17)とりわけ有名なハレ大学が廃止された。

(18)ヨシュアの許の、「ヨシュア記」第十章第十二節以下。

(19)単なる rien、ジャン・パウルの下書きによればモリエールの『アンフィトリオン』II、3を参考にしている。

クレアンティス：なんでもないことって、なにさ？

ソジー：なんでもないことは、つまりなんでもないことさ。おまえもよく知っているだろうが、なんでもないも、大したことないも、似たようなものさ。

鈴木力衛訳、中央公論社『モリエール全集』第2巻。

(20)賭博者、レッシングの『ミンナ・フォン・バルンヘルム』IV、2のリコーの科白、*corriger la fortune* 参照。

(21)メーカー、彼の論文『各町に独自の政治的憲法を与えるべきではないか』は『ベルリン月刊誌』の第五巻（一七八五年）に発表された。

(22)パラシオス、四世紀のギリシアの画家、本物そっくりの絵を描いた。

(23)山岳の長老、イスラム教徒の秘密結社アッサシンの頭目のことを意味している。

(24)Giovanni Domenico Cassini(1625-1712)、イタリアの天文学者。

(25)火、一八一二年モスクワの火事をほのめかしている。

(26)パンテオンは長いことヴィーナスと軍神（マルス）のための二重の神殿と考えられていた。

(27)幾度かの十月、イエナの敗北のあてこすり。

(28)Fr. Schulz 『パリとパリ人について』（一七九一年）。

(29)Joachim Heinrich Campe(1746-1818)、教育学者、言語学者。

(30)父親、ジャン・パウルはしばしば間違っアポロンをミューズの父親と考えている。

(31)Mars-yas、Mars と Marsyas の名前の言葉遊び。ギリシアの伝説によればサチュロスのマルシュアスはアポロンに歌の勝負を挑んだが、アポロンの策によって負け、皮膚を剥が

れた。

(32)王妃、一八一〇年亡くなったプロイセンの王妃ルイーゼのこと。

政治的四旬節説法

序言

(1)『ドイツ・ムゼーウム』、雑誌の本来の表題は『祖国のムゼーウム』。

(2)Johannes von Müller、一七八三年二月二十四日ヤコービ宛の手紙参照。

I. ドイツの為のその後の薄明

(1)献呈、カール・フリードリヒ・フォン・ザクセン・ヴァイマル皇太子とその妃マリア・パウロブナ。献呈は最初『ドイツの為の薄明』に考えられていて、手書きで一部に記入されていた。しかし第二版に至らなかったために、ジャン・パウルは「その後の薄明」の冒頭に持って来た。

(2)二人の天才とその後見の女性、ヘルダー、シラー、アンナ・アマーリア公爵夫人。

(3)北の方、マリア・パウロブナのロシアの出身をほのめかしている。

第一のその後の薄明

(1)エウティケス主義、紀元五世紀のエウティケスの主張で、彼はキリストの神的性質のみを認めようとした。

(2)ヘルダーによれば、彼の『イデーエン』十六章、3。

(3)クセーニエン、クセーニエンはまず一七九七年『ミューズ年鑑』に発表された。

(4)同じ作家が、ジャン・パウルも何度か正書法を変えてきた。

(5)ゲール風、ジャン・パウルは『オシアン』の作品を考えている。

(6)半年ごとに、勿論当てはまるのは作家達のみである。

(7)Johann Georg Sulzer(1720-1779)、スイスの美学者、通俗哲学者。

(8)Johann Gottlieb Fichte(1762-1814)、『ドイツ国民に告ぐ』一八〇八年、二四一頁参照。

(9)レッシング、彼の後期の神学論争集参照。

(10)Gotthilf Heinr. Schubert(1780-1860)、自然哲学者。『自然科学の夜の面についての見解』一八〇八年。

(11)Franz v. Walther(1781-1856)、シェリング派の医師、自然哲学者。

(12)Ignaz Paul Vital Troxler(1780-1837)、同様にシェリング派の医師。『人間の本性への視線』一八一一年。

(13)『ヤーゲン』の著者、この雑誌(八巻一八〇八一一一年)の編集者はジャン・パウルと親交のあったフォン・ベンツェル=シュテルナウ伯爵。

(14)ギボン、『ローマ帝国衰亡史』四一章。

(15)週年、一週を七年とする。「ダニエル書」第九章二十四節の「七十週」は週年と解釈される。

(16)アンフィクティオニア参事会、ギリシアの十二の部族から形成される参事会で、元来はデルフォイの神託の保護に当たっていたが、後にはギリシアの覇権争いで重要な役を果たした。

(17)サテュロス、 プラトンの『饗宴』三十二章の中で、アルキビアデスはソクラテスを内部に神々の像を隠している笛を持ったシレノスの像に似ているとか、サテュロスのマルシユアスにも似ていると言っている。

第二のその後の薄明

- (1)カナンの地、「申命記」第三十二章四十九節以下参照。
- (2)ヴォルテール、ヴォルテールがかなり長い病の後、自分の最後の悲劇『イレーヌ』の上演に初めて立ち合うことができたとき、舞台上彼の胸像に月桂冠が授与された。
- (3)月の永遠の斑点、イタリアの天文学者 Giovanni Battista Riccioli(1598-1671)は著名な天文学者の名にちなんで月の噴火口を命名し、それは今日も使用されている。『天文学年報』（一七七六年から一八一三年）を編集したベルリンの天文学者 Joh. Ehlert Bode(1747-1826)はペガサス座の近くのある星座に『フリードリヒの榮譽』の名を与えた。
- (4)イタリア人、この引用はアルヘンホルツの『イギリスとイタリア』第五卷（一七八七年）。
- (5)周知の薔薇祭、聖人メダルドゥスが最初にその古里の町サランシーで薔薇祭を始めたとされる。最も美しく有徳な娘に薔薇の冠が与えられた。
- (6)プリュタネウム、アテネの公の参事官会所。五〇人の参事官と共に市に功労のあった男達が生涯そこで食事を振る舞われた。
- (7)皇子誘拐者、一四五五年ザクセンの皇子誘拐をほのめかしている。
- (8)奉仕の兄弟、フリーメーソン支部で、一人前の会員でない従僕はこう呼ばれた。
- (9)タキトゥス、『ゲルマーニア』V. 参照。

第三のその後の薄明

- (1)ヘルダー、『イデー』十三章、3 参照。
- (2)アルクメネス、正しくはアルクマン。紀元前七世紀の著名な抒情詩人、ドーリアの詩の創始者。ジャン・パウルはアテネの彫刻家アルカメネスと混同しているのかもしれない。
- (3)三十人の僭主、ソクラテスはスパルタとの戦争で名を挙げ、後には紀元前四〇四年から四〇三年にアテネを支配した三十人の僭主のために不当な判決を受けた者を処刑場に連れて行くのを拒んだ。
- (4)アンナ女王、一七〇二年から一四年の彼女の統治のとき、とりわけジャン・パウルのお気に入りの作家達、スウィフト、ポープ、アーバスノット、デフォーが執筆した。
- (5)Ammianus Marcellinus、ベーレントによると引用の箇所で行われているのは単に以下の文である。「彼らの許でも描かれ造られたのは様々な殺害場面、戦争場面だけである」。
- (6)フィヒテ、『ドイツ国民に告ぐ』参照。
- (7)リヒテンベルク、『全集』第六卷（一八〇三年）二二四頁。
- (8)最近では、一七六八年北アメリカの諸都市はイギリスに対する貿易禁止を取り決めて、紅茶の関税引き上げに対処した。
- (9)友あるものである、この挿入文はジャン・パウルの典拠箇所にはない。
- (10)ベルリン、ジャン・パウルはベルリンのロマン派、とりわけフケーの努力、古代ド

イツの文芸を活性化させようという努力を考えている。

(11) Louis Dominique Cartouche (1693-1721)、盗賊団の頭領。一七二一年車裂きの刑に処せられる前、パリの耳目を数年引きつけていた。

(12) 山岳の長老、イスラム教徒の秘密結社アッサシンの頭目をも意味している。

(13) ヘラクレス、生きながら薪の山の上で火葬して貰ったが、オリュポス山に迎えられた。

(14) タキトゥス、『ゲルマーニア』X X X、XIV参照。

(15) 巨人ども、神々と巨人達の戦いで巨人のエンケラドス、ポリュボテス、テュフォエウスは地中海の火山島の下に埋葬された。

II. 帝国城塞ツィービンゲン包囲の間のネーポムク教会への私の滞在

(1) 記念門、所謂ポルタ・サンタで、二十五年ごとに教皇が自ら開けるピエトロ教会の閉鎖された側門。

(2) きっかけ、ツィービンゲン包囲についての話はラブレーの『ガルガンチュワとパンタグリユエル』のパン屋[小麦煎餅売]の戦争を思い出させる。第一の書第二十五章参照。

(3) 分離派[ドナトゥス主義者]、ローマ帝国との教会の結び付きに反対した四世紀の北アフリカでのキリスト教徒の一派。

(4) Peter Stöcklein、一四九五年ライプツィヒで最初の印刷所を造った Wolfgang Stöckel あるいは Stöcklein との混同と思われる。しかし彼はライプツィヒで最初の書籍商でもなく、百歳も越えなかった。

(5) 注の歌、この歌は一七二〇年 Benjamin Schmolek によってまとめられた。

(6) ポケットの中で右手、ベーレントによると K.A.Böttiger からこの特徴を借りてきているそうである。Böttiger は文学的甲斐甲斐しさのために Ubique (どこでも) という綽名を得ていた。

(7) 氷製の砲、ジャン・パウルでよく使われる比喻で、一七五六年厳寒にロシアのエカテリーナ皇后のために廷臣がペテルスブルク近郊の湖に氷の宮殿を建てた。氷の砲から礼砲が射られた。

(8) 蠟製の鼻、梅毒で欠けた鼻と思われる。

(9) Franz Huber (1750-1831)、ジュネーブの自然科学者。若い頃から盲目であった。『蜜蜂についての新しい観察』。

(10) バルベリーニあるいはポートルランドの壺、アウグストゥス時代の有名な古代の壺。技巧的レリーフの青と白の工芸ガラスからできている。ヴィア・フラスカーティで一五九四年発見され、最初バルベリーニ図書館に所蔵されたが、後にポートルランド公爵によって大英博物館に収められた。

(11) アゲシラオス、紀元前四〇〇年頃のスパルタの王。

(12) 惨めな部分、一七六八年から六九年にリーデルは『惨めな作家の文庫』を出版した。

(13) Johann Georg Meusel (1743-1820)、政治記者、辞典編集者。『学的ドイツあるいは存命のドイツの作家の辞典』(一七五三年) 四巻本を編集していった。

(14) 歴史、プルタークによるアラトゥス[アラトス]将軍の伝記参照。『プルターク英雄伝』(第12巻。岩波文庫。河野与一訳、36頁)

- (15)すべてを携帯して、「自分の財産はすべて自分の中にある」というギリシアの賢人の一人ピアスの言葉を暗示している。
- (16)シュテティーンやマグデブルク、両城塞とも一八〇六年イエナの戦いの後、戦わずにフランス軍に降伏した。
- (17)レグルスの樽、ローマの執政官 M. Attilius Regulus はカルタゴ人によって釘の打ち込まれた樽の中で責め殺されたとされる。

III. 薄明かりの蝶

- (1)ディオニシウスの耳、僭主シチリアのディオニシウスの造った牢獄で、漏斗状に先の尖ったもので囚人の嘆きを聞き取ることができた。
- (2)William Warburton (1698-1778)、イギリスの神学者、作家。Alexander Pope の作品を浩瀚な注釈と共に出版した。
- (3)バラム、「民数記」第二十二章二十四節以下参照。
- (4)オベロンの百合の茎、伝説によると人民を踊りに強いるのはオベロンの角笛である。
- (5)ある種の修道院、トラピスト修道会と思われる。
- (6)Jeanne-Marie Bouvier de la Motte-Guyon (1648-1717)、重要なフランス人神秘家。『自らによるギュイヨン夫人の生涯』(一七二〇年)は広く読まれた。
- (7)タキトゥス、『ゲルマーニア』XXVIIとXXX参照。
- (8)すみやかな啓蒙とすみやかな暗黒、草稿によるとジャン・パウルはヨーゼフ二世治下の啓蒙とフリードリヒ・ヴィルヘルム二世治下の暗黒化を考えている。

IV. 出征を含むグロースラウザウとカウツェンでの二重観兵式。

- (1) タキトゥス、『ゲルマーニア』XXXV参照。
- (2)これらの国の卑小さ、同じような冗談は『見えないロッジ』の第十一扇形でも見られ、初期の作品に散見される。Musäus の『観相学的旅行』第四小冊がヒントになっていると思われる。
- (3)ブリュール伯爵、Heinrich, Reichsgraf v. Brühl(1700-63)、アウグスト強王の宰相で、物欲と浪費で有名であった。
- (4)ティベリウス九十九世、ジャン・パウルはロイス伯爵達の高い数字を念頭に置いている。
- (5)徴募、一八〇六年以降ナポレオンは数度の徴募でドイツからも新兵を採った。
- (6)ガリア教会の自由、一四三八年の「実用的認可」で初めてフランスの王と聖職者にローマ法王からの広範な自由が保障された。
- (7)ラインの岸辺、ライン左岸の所有をめぐる、ドイツとフランスでは長い間戦いが行われた。
- (8)上陸の危機、一八〇五年ナポレオンは大軍をフランスの西海岸に集めて、イギリスに上陸しようとした。
- (9)自然仲介者のアーダム・ミュラー、「すべての審美的美の仲介」を自ら約束したが故にミュラーはそう呼ばれた。彼は単に自分の名声を考えていただけであった。
- (10)死ななかつたのだ、『ドイツへの平和の説法』参照。ハンザー版 Bd.5. S.883、29行。

- (11)飢餓の塔、ゲルステンベルクのドラマ『ウゴリーノ』（一七六八年）ではウゴリーノ伯爵と息子達が塔の中で餓死する。
- (12)加工していない石、「自分達の神をギリシア人のように描写できるだけでなく、つまりジュピターを四角の石に、ダイアナをサーベルに、優美神を丸太に模写するだけでなく、…」ハンザー版 Bd.5. 1026 頁参照。
- (13)ウリヤの手紙、バトシェバの夫ウリヤはダビデの命令で手紙を持たされたが、それは手紙の持参人ウリヤを激戦の地に送るようにとの内容であった。ウリヤは戦いで亡くなった。「サムエル記下」第十一章。
- (14)ポンペイウスの騎兵達の顔、カエサルは兵に、ポンペイウスの兵士の顔を戦いするとき狙うように命じたとされる。
- (15)ギリシア式彫像、紀元前四百年頃のギリシアの彫刻家は像の体に密接して服をまとわせたので、濡れているように見えた。
- (16)Claude Lorrain(1600-82)、十八世紀の最も重要な風景作家。彼はほとんどいつも画面のわずかな添景の人物像を Filippo Lauri や他の助手に描かせた。
- (17)エネシデムス、Gottlob Ernst Schulze(1761-1833)のこと。ヘルムシュテットとゲッティンゲンの哲学教授で、その著『エネシデムス』（一七九二年）の中でカントやラインホルトに抗してヒュームの懐疑主義を代弁した。
- (18)Joachim Heinrich Campe(1746-1818)、教育学者、言語研究者。『ドイツ語の辞典』（一八〇七—一一年）五巻。
- (19)Karl Wilhelm Kolbe(1757-1835)、銅版製作者、言語研究者。『単語混合、言語純正と言語純化について』（一八〇九年）。
- (20)マグデブルクの要塞司令官、v.Kleist 将軍。マグデブルクの要塞を戦わずしてナポレオンに渡した。
- (21)テュンメルのように、彼の『フランスの南の地方への旅行』第四巻（一七九四年）二五九頁以降参照。
- (22)二番目の皇后、一八一〇年四月一日ナポレオンはオーストリアのマリー・ルイーゼ王女と結婚した。

V. 晩夏の蝶

- (1)大学の首都移転、ベルリン大学の創設(一八一〇年)に反対して、大学は一国の首都にあってはならないという真面目な疑念が出された。
- (2)記されることだろう、一八一六年六月全将校団が二人の将校、つまりヘッセンの国会への苦情で逮捕された二人の将校に味方して、二人は名誉回復をした。ヴェルテンベルクの国会は独裁的な侯爵に憲法の施行を求め、ディーメルフルースの百姓達は一八一六年三月一致してヘッセンの国会に高すぎる租税について苦情を述べ、学生の同郷人会は大部分が新たな一般ドイツ人の学生組合に移行した。カール・アウグスト・フォン・ヴァイマル、エルンスト・フォン・コーブルク、フリードリヒ・フォン・ヒルトブルクハウゼン、ヴィルヘルム・フォン・ナッサウはそれぞれの国に最初の憲法をもたらした。
- (3)Theodor Anton Heinr. Schmalz(1760-1831)、プロイセンの参事官。一八一五年有徳同盟や他の結社を中傷して、憤激を誘った。
- (4)シンシナティー協会、一七八三年アメリカ合衆国で設立された将校の協会。

1. 概要

今回は『火星と日輪の一八一四年の王座の交替』（これは一八一三年から一四年の交替）、それに『ドイツの受難週のための政治的的四旬節説法』（一八一七年）を紹介する。ハンザー版(Jean Paul, Werke. Bd.5 1963.以下テキストの引用はこの版による)では先の『平和の説法』や『ドイツの為の薄明』と共に政治論集として収められているものである。ジャン・パウルは現在ではかなり読みにくいものであるため、内容の簡単な紹介も一般的に参考になるものであろう。問題点を論ずる前にまず簡潔に内容を紹介しておきたい。

『火星と日輪の一八一四年の王座の交替』は短いものである。占星術によると一八一三年は火星が支配し、一八一四年は太陽が支配するようである。ある町での一八一三年の大晦日の夜の舞踏会が舞台である。そこへ軍神マルスの仮装をした者と道化師、さらにアポロンの仮装をした者とその道化師が現れる。軍神は「私は今年ヨーロッパを救った」と発して、代わりに道化師が長々しく本年の決算を語る。我々はフランス人のせいで苦しい目にあつた。女性も辱められた。しかし打ち負かした。更に太陽神の道化師が、検閲、大学廃止等について語る。それを受けて軍神の道化師が、報道(特にモントゥール紙)に関して三種類の嘘、真っ赤な嘘(嘘の勝利)、笑ってしまう詭弁的嘘(ヨーロッパへの寄与)、約束を破る、特にライン同盟をないがしろにする嘘が見られたと述べる。これに対して太陽神の道化は艱難を糧に再生すべしと博学な脱線をしながらかつ語る。そして青年達の犠牲の上に民族と時代の未来を祈る旨述べたときに十二時となり、その場の人々が新年を祝ったとき、煙が生じて、仮装者達は消える。最後に一人の形姿が「血の大洪水」の後の「平和の虹」を祈念して歌う。

『ドイツの受難週のための政治的的四旬節説法』に関しては、短い論考の部分はそのタイトルでおおよそ分かると思うので、中に含まれる二つの諷刺的物語について紹介する。

まず「帝国城塞ツィービンゲン包囲の間のネーポムク教会への私の滞在」、これはごく小さな帝国村同士の戦争の話である。ディープスフェーラとツィービンゲンは共に境界に共有牧場を有していて、霰のため鷺鳥四十羽を失ったが、ツィービンゲンの鷺鳥番が亡くなった鷺鳥はすべてディープスフェーラの鷺鳥であったと主張したため、戦争となった。ツィービンゲンの司令官は「日々死を迎え我が生は」という名であるが、市門を閉鎖した。そのため象と象使い、書籍商のシュテックライン、更に作者が閉じ込められてしまう。シュテックラインは包囲について記事にしようとしていて、作者の洩らす言葉を注意深く書き留める。ディープスフェーラ人は爆弾を放つ。そのため村人や作者、書籍商、象、象使いは教会へ避難する。一人の狂人が落ちてきた爆弾に小便をかけて威力をなくする。作者は内側が綺麗な壺の便器を買い求める。陶工は手足が震えて作品ができないと嘆く。司令官は祈ると称して教会に寝泊まりするようになる。作者は時代精神を把握するために有益な駄本の効用や批判を浴び続ける名作の苦労を書籍商に説く。夜の爆弾で焼け出された司祭夫人が身に着られるだけの着物を着て避難する様子が目撃される。次の夜ツィービンゲン人は出撃する。別の市門にいたディープスフェーラ人が開いた市門へ抜けようとしていることに気付いたツィービンゲン人は走り戻ってまた市門を閉め、一人の死者も出さずに終わった勝利を祝う。その次の夜講和の使者の退出に気付いた作者は、司令官や皆を前にし

て、よく戦った、皆が今は平和を願っていると説教して、講和の雰囲気醸成する。講和の使者が帰ってきて、帝国裁判所がこの件を決するまで、ディープスフェーラ人とツィービンゲン人は居住地を入れ替えることが決定したと告げられる。この入れ替わりの講和の式典を目撃しようとして、作者とシュテックラインは樽の上に登り、蓋が外れて中に閉じ込められてしまうが、火事だと叫んでようやく二人は助け出される。

「出征を含むグロースラウザウとカウツェンでの二重観兵式」、これも小さな侯国グロースラウザウとカウツェンの争いの物語である。「一つのグロテスク様式」という副題が付いている。グロースラウザウの侯爵マリーア・プアは名誉と光輝の君主とされ、勝手に身边に貴族の臣下を造ったとされる。一方カウツェンの侯爵ティベリウス九十九世は好戦的な乱暴な君主とされる、しかし質素である。またグロースラウザウは仕立屋からなるが、カウツェンは古着屋からなりたち、お互いに仲が良くない。こうした事情の中、ティベリウスは「本物の戦争のように見える」合同の観兵式を提案し、了承される。プアは軍に防衛の弁髪を用意させ、また帽子を配る。戦争画家も召し抱える。一方ティベリウスは気の狂った古着屋に軍服を着させる。また猿どもを将官に加える。両軍はどちらが先に絞首台山を占領するかで、勝負が決すると取り決める。絞首台には一人の処刑された男がぶら下がっている。途中肉屋が火事となりカウツェン人は火勢で飛んでくるソーセージを食らって侵攻が遅くなる。グロースラウザウ人が先に絞首台山を占領するが、気の狂った古着屋が攻め立て、彼らを絞首台の壘壁に孤立させる。そして本隊を動物どもと共に攻めるが、絞首台から抜け出したプアの部隊が救出に来て、一時的食事の和平に至る。しかし傷を負ったプアの兵のことで補償をプアが求めると、両侯爵は諍いとなり、戦争が始まる。カウツェン人はグロースラウザウの首都をやすやすと征服してしまう。マリーア人は首都を奪い返そうとするが、気の狂った男の配置した消防ポンプの水で撃退される。しかし思い返して敵の首都に逃げ、そこを占領する。互いに敵の地を占領しながら、敵の新聞を味方につけて、戦争は紙上での合戦へと移行する。結末は將軍達が交渉して、侯爵を残したまま、軍は帰宅することで合意に至る。民はそれぞれ自分達の侯爵に満足していなかったとされる。ナポレオンに報告がなされるが、余りに小さな国のことゆえ沙汰はない。

2. 当時の風潮

当時の時代背景について、ウルズラ・ナウマンはその『シャルロッテ・フォン・カルプの生涯』（一九八五年）の中で次のように描写している。「政治的展開のためにアウグスト[カルプの息子]の学業はすぐに終わっている。一八一二年から十三年の冬、ベルリンの人々はロシア内やロシアの側で敗れたナポレオンの大軍が町を通って行くのを見ている。

一 『惨めな、無惨な傷で損なわれた不具者達、彼らは手や腕、足が欠けていたり、凍傷で全体が破壊されていた。神の御手がかくもすさまじきことをなされるとは、人々は自分の目が信じられないほど震えることになった』と一人の証人は書いている。彼はほとんどすべての同時代人同様に、破壊と敗北は神の裁きであるという点に全く疑いを抱いていない。『人馬と車で、主は彼らを砕かれた』と人々は歌った。主はプロイセンの同盟者であった。国王が最後までためらって、しぶしぶ承知した『解放戦争』への熱狂は途方もないものであった。（フリードリヒ・ヴィルヘルム三世が署名したくなかった）志願兵の申し出への呼びかけに全ての教室が従った。大学の六〇〇人の学生のうち二五八人が武器を

取ると名乗り出て、その中にアウグスト・フォン・カルプもいた。ケルナーの息子テーオドールは、シラーを模した垂流の詩を作ってほとんど成功していなかったが、その『英雄の死』の後、父親が一八一四年彼の思い出のために印刷させた敬虔な愛国的戦争詩『手琴と剣』によって戦争に熱狂した若者達のこの全世代の象徴的人物となった。テーオドールが父に志願兵として申し出る決意を述べた手紙は十九世紀の選集で、いや二十世紀においても再三印刷された — 警告としてではなく手本として。『ドイツは立ち上がります。プロイセンの驚はすべての忠実な心にその大胆な羽ばたきで、ドイツの、少なくとも北ドイツの自由の大きな希望を目覚めさせます。私の技芸は祖国を慕います、私をその申し分ない弟子にさせてください — いや父上、私は兵士になりたいのです。喜んで今得ている幸せな、不自由のない生活を投げ棄てて、たとえ自分の血で購うことになれ、祖国を勝ち得たいのです。…偉大な時は偉大な心を欲します。私はこの人民の波頭の岩礁となり得る力を感じています。私は出て行って、大波に向かって大胆な胸を出さなければなりません』。 / 上の世代は若者に先んじていた。フィヒテは（人類の利益に関して）慎重に賛否を考量した後、プロイセンの国家に一種従軍牧師として申し出た。かつて無神論者と疑われたこの男は真にキリスト教的演説を約束したが、自分の新たな官職には特別な地位を所望した。つまり彼は国王自身にだけ従いたいのであった。彼の同僚教授の多くと共に、官吏や教師、学者達と共に彼は「国家総動員」へ参入した。その教練は諷刺家達の餌食となるものであった。 / 女性達は女性達にふさわしい愛国的義務を果たした⁽¹⁾」。

ギュンター・デ・ブロインはそのジャン・パウルの伝記の中で、同じテーオドール・ケルナーの余り読まれていない「復讐の唄」を引用して、こう結論付けている。「ドイツの後の展開を見てみると、伝統となったのは民族を元気づける自由の陶醉ではなく、悪趣味、粗野、プロイセン主義と国粹主義の危険な結合で、これには既に少しばかりの人種主義も欠けていなかった⁽²⁾」。デ・ブロインはこの章の中でジャン・パウルの小論『人生の開花期の死の美しさ』（一八一三年）に注目して、散華を称える遺憾な小論であり、ジャン・パウルの瑕瑾であるとして、問題提起を行っている。デ・ブロインはまた論文『薄明』の中で、当時の時代精神を告げる者として、クライスト、アルント、フィヒテの三名を挙げている。フィヒテについては筆者はすでに、ラテン語の混入したフランス語とは違う根源的ドイツ語というフィヒテの概念の奇妙さについて論じたことがあるので、ここでは先の二人を紹介することにするが、クライストでは、デ・ブロインは『子供達に呼びかけるゲルマーニア』（一八〇九年）の一節を紹介している。

やつらの踏みつけた地をすべて
やつらの骨で真っ白にしろ。
烏と狐の食い散らかしたものを
魚たちに食らわせろ。
やつらの死体でライン川をふさげ⁽³⁾。

またアルントについては、デ・ブロインはこうまとめている。「民族という概念の神秘化、啓蒙主義の軽視が彼の場合、弱さとしての人文主義の軽蔑、狂信主義の称賛、戦争賛美、大ドイツの夢、人種の思い上がりと共に見られた⁽⁴⁾」。以上のような傾向に対してジャン・

パウルはドイツを愛しながらも啓蒙主義を堅持したというのが大体デ・ブロインの論調である。

3. ジャン・パウルの平和論の戦略

特にジャン・パウルの『四旬節説法』を読んで感ずることは、ジャン・パウルは二つの諷刺的物語以外の論述では、普通に勇敢さ等先に挙げた国粋主義者でも主張しそうなことを述べているのに対し、物語では臆病さ、逃げ足、戦時でも避け得ない排便等のことを描写していて、それが対比的効果をもたらしており、滑稽なイメージが残り、結果として反戦を訴える作品となっていることである。論述の部分は余り印象に残らない。例えば民衆の戦意を高揚させるために「市民的レジオン・ドヌール勲章あるいは民衆の貴族」(S.1088)を制度化すればいいと論じている文などは良い思いつきであるが、さほどインパクトがあるとは思えない。これに対し例えば皆が恐れて近付かないのに、不発爆弾に小便をかける狂った男の場面(S.1120)等は脳裏に鮮やかに残るものである。

こうした対比のために例を挙げるとジャン・パウルはアルントの輩に論破されないよう普通に「男らしさ」を論考では称えている。「著者たちの男らしさ」と題する小考では、こう述べている。「目下ドイツ人でないことを恥じるドイツ人はほとんどいない、そうではなくインク瓶として涙瓶を置いて、それにペンを浸して、世間に対して（それどころかすでに表題紙上に）、自分があれこれの『人生の最も恐ろしい年あるいは瞬間に』搾り出すことになった不安の汗の玉を披露している。君達は一体 — 君達の女々しきよりもむしろ — 女々しさを公然と告白することを恥ずかしく思わないのか。古代ローマでは男ならこのようなことを決して告白しなかったであろう。スパルタでは愛する死者に対してすら公の場で泣いてはならなかった、例外は国王の死体の場合であった。毅然とした初期のキリスト教徒や — 古代の哲学者 — ローマ人は(更に力強い北アメリカの蛮人も)カルトゥーシュの原則を有していて、この者は拷問に耐えられない者を自分の仲間に入れなかったのである。英雄は多分自分の傷跡を見せるだろうが、ただ乞食だけが自分の傷を見せるのである」(S.1106f.)。

ジャン・パウルは古代ドイツ人を誇りとする点では同時代の者と比べて遜色がない。司令官の重要性についての言は慧眼である。「ギリシア人は以前ガリア人とドイツ人を同一に見なしていた、少なくとも戦闘的若者をこのように評価する点で我々はガリア人と混同されてよい。我々は(ただ述べたように將軍達は例外であるが)彼ら同様古代のカッティーン人[古代ゲルマンの一部族]に似ていて、タキトゥスはカッティーン人が勝利への信頼を軍に置かず、司令官に置いていた点を珍しい洞察として称賛している。これにはタキトゥスの別の箇所がよい説明に適していて、つまりドイツの侯爵達あるいは司令官達は自らの名声のために、一方軍隊は自らの司令官達のために戦ったとされる。フランス人達は正當にまた幸運に、最大の分別はきっと一人の頭脳の中に収まっているであろうが、勇敢さはしかし数十万の拳の中に収まっているという前提に従って行動している」(S.1109、他にS.1148参照)。ちなみにジャン・パウルはこのようにフランス人を公平に評価している。

別の箇所では英明な君主への期待も語られている。「すべての民衆が喜ばしく美しく一人の英雄のために死に、またそれ以上に好んで一人の同時に戦闘的で倫理的な英雄の侯爵のために死ぬということは、感動的であり、人類として称えるべきことである」(S.1148)。

しかし諷刺の物語に目を転ずると、逆転する。ツィービンゲンの奇妙な名前の司令官「日々死を迎え我が生は」は教会に避難する弱虫である。しかし結果としてこの司令官は兵に死者を出していない。またその戦闘場面は次のように始まる。「ツィービンゲン人は城塞を半分回っていた。すると突然月の光で敵の姿が敵に知れた。恐るべき光景である。 —

歴史は伝えている、ギリシアの偉大な将軍アラトゥスはいつも戦闘の前は激しい下痢に襲われ、下痢は戦闘が開始されるまで続いた、と。あるツィービンゲン人の変わり者はこの無邪気な逸話を乱用して、この逸話で、それに暗い雨の夜をいいことにして、自分の冗談をより信憑性の高いものにして、つまり、とこの変わり者は主張した、両軍は、互いを目にすると、同数の数の将軍アラトゥス達に変じてしまって、早速両軍は目配せや軍使やその他の合図で（ここで蓋然性が低くなるが）七分半ほどの停戦を結んで — その間に両軍は互いに腰を曲げて対峙して、そして事がすむとようやく両軍は合意して攻撃に起き上がった、と。 — しかしもっと真面目な話に戻ろう」(S.1131)。

戦争のグロテスクさを十分に活写しているものである。この文は国粋主義者達の壮大な戦争の鼓吹に十分に匹敵する反戦の戯文といえよう。アラトゥスに関する文は、著者は若い頃から知っていたと思われる。ジャン・パウルのオンラインの「抜き書き集」を検索してみると次の結果が出てきて、直接の出典は不明であるが、若い頃の抜き書きと分かる。

[IIa-01-1782-1783-0188]

Der griechische Feldher Aratus bekam alzeit vorm Anfang einer Schlacht einen Durchfal, der dauerte, bis die Schlacht in Gang gewesen.

(http://www.jean-paul-portal.uni-wuerzburg.de/aktuelle_editionen/nachlass_exzerptheft/)

ハンザー版の注に従って『プルターク英雄伝』を見てみると、そのアラトゥスの項（岩波文庫、第12巻、河野与一訳、36頁）にアラトゥスに対する「誹謗」としてこの逸話は紹介されている。

また物語では兵士達は勇敢さを示さない。それでも死者が出るよりはましであろう。単純に「逃げる」様を描写せず、学術的に「逃げる姿」を論評している点がジャン・パウルのである。

「戦闘で走る兵士と立ち退かぬ兵士とを比べると、ラファエロは、自分の像に大抵動きを与えて、めったに静止像を描かず、それで美を知っている男であるとされる限り、その限りで立ち退かぬ兵士は評価が低い。しかし美は脇へ置こう。両軍が走り始めたのには理由があった。そして戦いのとき法は黙するのであれば、軍法も、例えば逃亡禁止も法の一つである。つまりツィービンゲン人は、抜け目なく、何人かのディープスフェーラ人が去っていくのに気付いて、狡猾にかぎ出した、つまりこれらの少数の者達は他の者達の単なる先駆けにすぎず、残りの者達も今や開けっ放しになっている下の門の中へ侵入しようとしているとかぎ出した。ここで大事なのは決断であった。即刻全ツィービンゲン人の出撃は一つの総アキレスへと変わった。アキレスは周知のようにホメロスがその走りを称えたものである。皆が走り、駆け、飛んだ — ディープスフェーラ人がその後を追ったが、しかし実際遅すぎて疲れていた — かくて幸いツィービンゲン人は勝者として自分達の下の門に達した。 — 一人の男を失うこともなく、あるいは一人の余所者を入れることもなかった。人々は一晩中勝利の出撃を祝って飲んだ」(S.1131f.)。

「二重観兵式」も一番肝要な点は逃げること、敵の首都へ逃げることで、その結果こ

とが収まる。描写には術学が混じる。

「この案はパシヤの三本の馬の尻尾に値したであろうもので、即ち、敵を見下して背を向け、速歩で駆けて、真っ直ぐ敵のただ半マイル先の首都カウツェンに、そこが開いておれば侵入するという案であった」(S.1172)。「この戦略は効果があった。ティベリウス人は無分別に長くその厳しい水を噴射し、遂に撃ち尽くして、敵は去ってしまった。今や彼らが走るようになった。しかし水瓶座の中のグロースラウザウの諸太陽、濡れた衣服の中のギリシア式彫像はすでにはるか先にいて、彼らは医学的理由で冷泉浴を発汗浴にしようと思っていたので、それだけに一層早く行軍した。実際全軍が汗をかいていた。しかしただこの汗は、キケロによるとクーマのヴィクトリアの汗がそうであるように、敗北を意味してはいず、女神の名前を、つまり勝利を意味していた」(S.1172f.)。

また一人の死者も出さない戦争という言葉も「ネーポムクの教会」の話同様に出現している。「『いやはや、かつてイタリア十五世紀の本物の戦争のときよりもっと負傷者が出るかもしれないのであれば、まことに紛らわしい戦となる。昔のイタリアではしばしば戦役で一人の男も死ななかつたのだ。命の保障がほとんどできないのであれば、そんな無茶な戦争は悪魔にさらわれろだ』」(S.1160f)この逸話はすでに『平和の説法』の中で、一四四〇年のフィレンツェとミラノの間でのアンギアーリの戦いで一人の騎士が倒れただけであったという逸話として引用されており (Vgl.S.883)、ジャン・パウル好みの逸話と思われる。「抜き書き集」のオンラインの検索の結果は次の通りである。

[Iib-20-1790-0259]

Im 15 Säk. wurden die Italiener mit einander handgemein ohne zu verwunden - die vom Schlachtfeld vertrieben hatten verloren - Kanonen wurden bei Belagerungen nur auf Plätze gefeuert, worüber beide Theile vorh. eins waren - zum Sonnenauf= bis untergang, an Son= und Festtagen Stilstand. Karakt. aller Nazionen.

『薄明』では昔戦争で兵士達が地震に気付かず戦う様を崇高であると論述している箇所があった (Vgl.S.976)。その逸話も「ネーポムク教会」の話に取り入れているが、しかしここでは「崇高」というイメージはない。ジャン・パウルの好きな「買収された偶然」に通ずるもので、かなり笑話的イメージが残る。「これに対して兵士達は火となって互いに向かっていた、それで彼らは小さな、すでに晴雨計で告げられていた地震に少しも気付かず — かつてローマ人やカルタゴ人が戦いの間の大地震に気付かなかつたようなもので — 単に自分達が揺れて[震えて]おり、大地が揺れているのではないと信じていた」(S.1131)。この逸話も若い頃抜き書きしていたものである。オンラインの検索の結果は次の通りである。

[IIa-10-1787-1163]

Unt. einem Treffen der Karthager und Römer bei dem Trasimenischen See merkten beide nichts vom Erdbeben. K. 86.

「二重観兵式」の諷刺のポイントとして、侯爵同士決闘すれば収まる場面で、そうしない場面を見逃すわけにいかない。『薄明』でジャン・パウルは述べている。「地上の不幸はこれまで、二人が戦争を取り決めて、数百万人が戦争を遂行し、耐えているということにあった。しかし数百万人が取り決めて、二人が戦った方が、結構とはいえなくても、ましであろう」(S.962. 他に侯爵による民衆の迷惑に関して『レヴァーナ』参照。S.755)。

これが「二重観兵式」では旧来の通りである。「荣誉欲から彼は決闘の代わりに — 決闘はすでに青年貴族や学生達によって使い古された補償であったので — 全員の戦い、戦争を選び、もっと名誉を得るために、二本の腕よりは二百本の腕で抵抗したいと思った」(S.1166)。

「二重観兵式」では君主の取り替えということが最後になされる。一種の民衆のクーデターである。革命であるが、死者を出さない無血革命である。しかし論述の部分ではドイツ人は君主を慕うことが厚いと強調されている。この対照も効果的である。検閲は口を挟めない。

論述の部分では、「さて、君達侯爵が、この邪心のない、復讐しない、決して偽善的でない、また扇動的でない民衆を評価するすべを心得ていて、臆病な僭主ディオニシウスが単なる子供達に警護して貰ったよりも安全に身を守って貰えるこの宝の領民を大事にできるならば、 — 決して悪徳の同盟はできない民衆のこのタキトゥスの時代から続く徳の同盟を、君主同盟と後には国民戦争[ライプツィヒの戦い]の双子座を出現させたこの徳の同盟を認めるならば、君達は誰を信頼しようと思うだろうか、千年以上続くドイツの徳の同盟か、それともシュマルツみたいな顧問官か」(S.1187)。

「二重観兵式」では、「要するにカウツェン人とグロースラウザウ人は皆、戦争中枢部、師団将軍や交渉人が行った短い静かな調査に従って、帰宅し、その場に居合わせる適当な敵の侯爵の支配を、すべてが以前の通りに、あるいはそれ以上に良く行われるならば、受け入れる用意があると即座に決まった。占領された両国の侯爵は（このことは厳かに決定され調印された）これらの国に人質[Geisel]として（アッティラのように積極的な鞭としてではなく、消極的な人質として）許される限り留まり、支配して良いということになった。 / すべてはうまくいった。それぞれの軍が帰宅した。ただそれぞれ侯爵はそれぞれの町にさながらその女王蜂の牢獄のように残って、気晴らしにそちらこちらで支配した。多分マリーアは泣き、ティベリウスは呪ったことだろう。ちなみにこの両国のどちらも、現今の多くの国のように、祖国愛と侯爵愛とで固く結ばれた国家ではなく、単に緩やかに並んでいる家臣から成り立っていたのは幸いであった。現今の政治の難しいが、しかし必要な傑作であって、籬なしにただの桶板から作らなければならない桶屋の傑作に似ているものである」(S.1182)。ただ論述の部分でも一般的に「この支配者の交換はヨーロッパでは何としばしば見られたことか」(S.1101)と述べている箇所もある。

エーリヒ・シュトラスナーの『ドイツ新聞学事始⁽⁵⁾』によると、「1792年から1814年までナポレオンの統制を受けたドイツ・プレスは、出版業者やプブリツィストの懲戒処分を受けたり、フランス政府発行の公的新聞『モニテ[トゥ]ール』紙からニュースを借用すべしという命令に服さざるを得なかったり、新たな新聞の創刊を強制されたり、廃刊を余儀なくされたりして、それまで培ってきたものをすべて失ってしまった」(228頁) そうである。こういう背景を考えると、特に『王座の交替』でのモニター紙批判は勇気のあるものであることが分かる。そして『四旬節説法』では、ジャン・パウルは内外の論敵を相手に、擬態を見せながらも、巧みに効果的な反戦の論を展開しているといえよう。これは当時反響はさほどなかったかもしれないが、現在読んでも、勇ましい好戦論に対する有効な反論と思えるものである。

4. ジャーナリストの問題

両諷刺とも公の新聞に報道された戦争であることを最初の部分で虚構としている。「ネーポムクの教会」では「すでに公の新聞で知られている発端」(S.1112)、「二重観兵式」では「そのことを印刷物の中で知ったのは臣下達だけであった」(S.1150)という文言が記されている。本や印刷物が普及するにつれ、執筆に従事する人間達の問題も生じてくる。ジャン・パウルはほとんどの小説で、二流の執筆者を登場させて、問題の所在を摘出している。「ネーポムク教会」の話では、著者ジャン・パウルの語る言葉をいつでもメモして印刷しようと構えているシュテックラインという人物が登場する。これは第一には出版でともかく利益を優先させる人間への諷刺である。第二に、著者の語る言葉をメモする態度は、自分の抜き書きを基にして執筆する方法への自己諷刺も考えられる。次のように描写されている。

「彼[シュテックライン]は本当にその提案全体を — 冗談の部分は別にして — 自分の専門著作にとってとても重要なものとみなして、それで腰を下ろして、私の眼前で重要なことを書き留め、自分の記憶の補助を私に頼んでいいと思っているかのような振りをした。しかし私はこやつが話を単に冗談と解していて、印刷したら上手に利用できるものと見なしていることに気付いていた」(S.1129)。ジャン・パウルとシュテックラインは人垣のせいで最後の式典が見られない。「書籍商はそのことで全く憤激していた。彼は雑誌に書くために進行が必要であった」(S.1137)。彼らは最後に樽に落ちてしまう。「シュテックラインは雑誌のせいで途方にくれていた。彼は言った、『戦争や一切がもっと続いたら、仕舞いには名うての悪漢になって、このこと一切を翻刻してやる』」(S.1138)。

それ故この二流の出版者を前にして駄本と名作についての奇妙な価値判断が呈示されることになる。「友なるシュテックラインよ、試みに単に冗談で不滅のイリアスを起草してみたまえ、あるいは貴方のユーモアにもっとかなうのであれば、アリストファネスの喜劇を起草してみたまえ、誓って貴方はその得がたい傑作を腋に抱えたまま — その傑作は我々皆がどんなに称えても十分ではなく、それ故私はきちんと貴方の前で跪きたいと思うのであるが — 諸世紀、諸民族を通じて批判の鞭や路地を通って行かなければならないのだ — 新たに生まれた批評家が皆新たにその稀有な作品に何かけちをつけるのだ(私はその悪漢の手や髪をつかんで、ただ貴方のような不滅な者の復讐をしたいところである)。貴方の書店作家のように、貴方は一度だけ批評されるなんてものではなく、数千回批評され、筆の存在する限り、刺され続ける。それ故私は良き友人として貴方に不滅性を求めることを勧めない」(S.1129)。

しかしこの人物を考えていると、すでにある転倒、つまり事件が報道を要請しているが、しかし報道がなければ、事件が消滅しかねない事態が生じていることが分かる。執筆者達はまずツィービンゲンの城塞に閉じ込められ、更に、ネーポムク教会に閉じ込められ、シュテックラインは今生じている事件を報道できない。最後には樽に閉じ込められて、両軍交替の講和の式典を見られない。かくて物理的に報道者が報道できない状態に陥っている。しかしこの事態を比喩的に考察すれば、報道者が報道しなければ、事件は存在しないに等しいということである。

現代の新聞のかかえる問題について『ドイツ新聞学事始』のシュトラスナーはこう述べている。「新聞を通じてテーマ入力が行われなくなってしまうと、新しいことや新たに付

け加えられることについて語られることはなくなり、既知の事柄のみ引き合いに出され、会話の役割がなくなってしまう。要するに新聞がなくなれば、何も『起こらない』のである」(前掲書、83 頁)。(ちなみに筆者は若い頃大学紛争を体験したが、このときまず感じたことはメディアが大学紛争について報道しなければ、この紛争はエスカレートしていくことはなかったであろうということである)。

またシュトラスナーはこうも語っている。「ほとんどの新聞が毎日宅配されるので、新聞とは、隠された矯正手段であり、また強制的な方策であるとも言えるのだ。あるいは長期間にわたる麻薬使用のようなものとも言えよう」(前掲書、191 頁)

「二重観兵式」では日和見主義者のジャーナリスト達が二人出現する。二人は「麻薬」の提供者であることを示しているが、まず問題になるのは、彼らの節操のなさである。問題は結局食えれば良いということ、シュテックラインと同じ利益の優先が批判される。彼らは「常に勝者の党派から名声と保護を得るのである」(S.1175)とされる。

「両将軍が征服した首都で面前に来させた最初の者は当地の新聞記者であった。ティベリウスはグロースラウザウの記者、『グロースラウザウの愛国的アルヒーフ』の編集者に
— 一人の意地の悪い道化師で、嘲笑家であったが、こう知らせた。今や週ごとの記事でどれほどの殴打をくらうことになるか、ただ彼自身に懸かっている、しかし少しも手出しをしないことになろう — このとき記者の縮れ毛の男は半分微笑んでいた、つまり左の口の端で微笑んでいたが、
— もし彼がティベリウスとその戦役を然るべく評価し、つまり十分に高く評価し、世間に言葉を尽くしてそれを称えるならば、それにちなみに彼が自分の国人に対して諷刺の青筋を立てるのは一向に構わない、と。愛国的記録課長は答えた、『喜んでそういたします、自分が将来安全であるならば、誰を笑おうと構わないのです、[打ちべらを持った]道化師や丸太詩[平凡な詩]作家は、丸太や棒を自ら肌を感じたいのであれば、本当の意味で阿呆の丸太でありましょう』。ティベリウスは彼に自分の国での検事職あるいは警部職をも約束した。
— かくてシュナーベルは(そうこの話者は言った)色合い[旗幟]と言葉を守った」(S.1173)。

もう一人出現する。マウスという名の男である。『戦争の短いレジュメ』(それは私の眼前にある)という表題の『戦いの使者』の最初の記事は大部分が侯爵のマリーアを、結果の主導者、指揮官として花をもたせ、仕立屋の功績を取り上げずにいた。その際の彼の比喻は気の利いたものである。つまり偉大な画家、例えばルーベンスやラファエロは戦争画の下絵を力強く描くが、その後の仕上げは弟子達に任せる、だからといってその作品は高貴な立案者の名前を欠かすわけにいなかった、そのように侯爵は戦争を企画し、それから弟子達に、兵士達に遂行を任せている、さながら第二のクロード・ロランで、戦闘場面を自ら決め、つまり第一のクロード・ロランが風景を自ら決めたようなもので、人間は第一のロラン同様に他の者達に任せているのである、とそう彼は言っている」(S.1174)。

第二の問題として新聞の持つ「麻薬」の中毒を暗示しているのが、次の文である。

「しかし結局新聞記者達はますます野蛮に喧嘩した — シュナーベルは悠然たるマウスを激昂させた — 名前に関する言葉遊び、例えばマウス風にする[出しゃばる]、とかマウス風を書く、あるいはシュナーベルのままに[率直に話す]はありきたりのことだった
— マウスは、かの戦争画家が筆の勢いをつけるために軍楽を演奏するよう命じたように、通常トランペットを自分の横で吹奏させて、ファーマ[風説の女神]のトランペットを

更に強く吹こうとした。 — 要するに戦争は今や陸から紙上に移った。両記者は結局真剣な党派の信奉者になっていた、最初は侯爵に脅かされて見せかけで信奉者を演じようとしていたのであるが」(S.1179)。

先にはシュテックラインを前に馱本の意義等が開陳されたが、今度はこの節操のないジャーナリストを前に体系を打ち立てることの無効性が主張される。キルケゴールのヘーゲル批判よりも先である点が興味深い。

「他面では残念ながら隠しておけないが、このような記者は私がまだ哲学者であった頃の私に、あるいはまだ哲学者であるところの他の人達に似ている。私はまだはっきり覚えているが、私が書生として自分の書齋に座っていて、カントの体系を自分の頭の中に高貴な明かりのための立派なロジのように持ち運んでいたとき、書籍商という悪魔が私の家にエネシデムスやフィヒテ、その他の人生の本の梱を送ってきたのだった。これらの本についてはすでに私は他の人々を通じて、この梱が体系を揺さぶるものであることを知っていた。『今の一時にそなたはまだ』と私はあちこち歩きながら言った、『幸せで、カント主義者で、確固として座り、そなたのカントの三脚の上で喜んでいる。いまや、この三脚を折ってしまう梱包の体系を何時にそなたが受け入れるか、それはそなたに懸かっている』。私は自分の好みで、まだ一晩はずっとカント主義者でいることに決心をして、朝になったら梱をほどいて、ゆっくりと転向することにした。私が批判哲学からの別れの感情を描こうとし、荷をほどこきながら批判哲学を今一度信じながらそれにぎっと目を通した次第を描こうとしたら、胸が痛むことだろう。しかし私がまたフィヒテの大学棟、祭具室での立派な体系を得て、その中に借家人として座しているときに、すぐにまたシェリングの梱が届いたら、何ということになってしまうだろうか。 — しかし私は反抗的に言った。『この新しい体系を私は受け入れよう。そして余計なことにその後で、また先の体系を転覆させる体系を受け入れよう。しかし私が — 哲学部の教授職に誓って — 別様にしたら、私は悪魔にさらわれろ、だ』。しかし私は今では別様にしている。私は通常六から八の体系を寄せ集めて、論駁された体系よりも論駁する体系を先に読み、かくてこの逆の読書を通じて — 魔女が主の祈りを逆に読み上げて魔法をかけるように — 幸い魔法を解いて、それで私は今では、余り確信はないが、ひょっとしたら何の体系も有しない男となっていよう」(S.1175f.)。体系諷刺は論述の箇所でもなされている。「体系を拡大された疑問符」(S.1080)とからかっている。

ジャン・パウルはこうした新聞の様々な問題を予見しながらも、最後に論述の部分で、新聞[出版]の大切さも強調している。「というのは民衆のすべての精神的高揚の中では、祖国のための戦争を除けば、平和時には新聞[出版]の他にはなく、新聞はかつて比較的大きな王国[プロイセン]ではほとんど国会の代わりとなったもので、更にはこの国会そのものの他に自由で、完全で、選抜されたものはないからである」(S.1191)。

注

- (1) Ursula Naumann:Charlotte von Kalb. Metzler .1985. S.278f.
- (2) Günter de Bruyn:Das Leben des Jean Paul Friedrich Richter. S.Fischer.1975. S.298
- (3) Günter der Bruyn:Dämmerungen, Jean Paul und Politik. Sinn und Form 1986. 38.Jahr.S.1150.
- (4) Ebenda. S.1151.
- (5) エーリヒ・シュトラスナー著、大友展也訳『ドイツ新聞学事始』。三元社。2002年。

あとがき

キャンパスが六本松から伊都に移って一年になります。最初はアクセスに不安を感じていたけれども、慣れると、地下鉄は都心とは逆向きで空いており、昭和バスもさほど混まず、渋滞も少なく、毎日が遠足か出張という気分で一年が過ぎました。授業のある日は翻訳などできないので、夏休み等の休みの日にするしかなく、それが集中力を高めてくれたようで、本年もなんとか翻訳をまとめることができました。

文中のフランス語に関しては同僚の田中陽子先生の御教示を頂きました。感謝申し上げます。

2010年4月

恒吉法海